太皇太后及ビ中宮ノ還啓

乘昏儀懐朝臣來語云、先日余所密談□等洩申北方、有悦氣者、大略一日余申入道了、

十一日、戊戌、○中略召使申云、外記(高橋)國儀令申云、今夜大皇(太)大后(太)幷中宮可入御内裏、可候其行啓者、令申依腰病不可堪騎馬之由、亦可披露之由、示達源中納言經房、畢、後聞、兩宮別車、

同時入御云々、

五月

十九日、乙亥、參内、宰相乘車尻、諸卿不參、參母(彰子)后御方、相逢女房、有仰事等、是入道殿御出家間事等也、

起居自由ヲ關ク

〔御堂關白記〕○陽明文庫本　三月

十四日、辛未、○中略、東宮御所ニ火アルコトニカ、ル、本月十四日ノ條ニ收ム、而依所勞膝難堪、令申案内、不參、

法名行觀

〔日本紀略〕後一條院　三月

廿一日、戊寅、前太政大臣從一位藤原朝臣道長落餝入道、年五十四、法名行觀、後改行覺、依胸病也、戒師法印院源、剃御頭律師定基、入夜小一條院幷太皇大后(太)宮・皇大后(太)・中宮渡御、

定基剃頭ニ當ル

〔公卿補任〕七　前太政大臣從一位藤道長、五十四、三月廿一日出家、法名行觀、改行覺、此日返上隨身、○道長、太政大臣ヲ辭シテ、隨身ヲ返遣スルコト、二年二月九日ノ條ニ見ユ、

隨身ヲ返上ス

道長豫テ出家ノ意アリ

〔榮花物語〕十四　○梅澤義一氏所藏三條西本　あさみとり

なさにつけても、殿(道長)はなをいかてほいとけなんと、かんの殿東宮(敦良親王)にまいらする事をせはやと、○尙侍藤原嬉子(藤原嬉子)、東宮ニ入ルコト、よをあやうくおもふなと、おほし(おもほし)の給へは(給へイ)、○下略、全治安元年二月一日ノ條ニ見ユ、文ハ二年十二月十七日ノ條ニ收ム、コノ條富岡本ヲ以テ校ス、

〔榮花物語〕十五　○梅澤義一氏所藏三條西本

とのゝ御まへよをしりそめさせたまひて、○よを以下十二字、富岡本、よしらせ給てニ作ル、道長ニ、内覽ノ宣旨ヲ賜フコト、長德元年五月十一日ノ條ニ見ユ、のち、みかとは三代にならせたまふ、わか御よは廿三四年はかりにならせたまふに(ふにイ)、みかとわかうおはしますほとは(時イ)攝政と申、○長和五年正月二十九日ノ條參看、おとなひさせたまふをりは關白とまうしておはしますに(まマ)、このころは、攝政をもこそよりわか御一男、たゝいまの内大臣殿にゆつりたてまつらせたまひて、○元年三月十六日ノ條參看、わか御身は太政大臣にて或記云、寛仁二年十二月任太政大臣、同三年二月五日上表辭定、○富岡本、コノ次ニ、三宮の位にてノ六字アリ、おはしますをも、○元年十二月四日ノ條參看、つねにおほやけに返したてまつらせたまひ、しせさせたまへと、おほやけさらにきこしめしいれぬに、たひ〳〵わりなくてすくさせたまふ、○道長、太政大臣ヲ辭スルコト、二年二月九日ノ條ニ見ユ、御心にすさましくおほさるゝ事かきりなし(シ)、かゝるほとに、御こゝちれいならすおほされ、人〳〵もゆめさはかしくきこゆるに(えさすイ)、

病アリ

祈禱ヲ修スレドモ效驗ナシ
物怪數多ク現ル

わか御心ちもよろしからすおほしめさるれは、このたひこそはかきりなめれとおほさるゝにも、もの心ほそくおほさる、〇おほさるれはニ作ル、富岡本、おほさる、殿はら・みや〳〵なとにも、いとおそろしう〇おそろしき御事ニ作ル、富岡本、おそろしう、おほしなけくに、いとおとろ〳〵しき御心ちのさまなり、かゝれはよろつにいみしき御いのりともさま〳〵なり、されとたゝいまはしるしもみえす、いとくるしくせさせ給、さま〳〵の御ものゝけかすしらすのゝしるなかに、けにさもやときこゆるもあり、またことのほかにあるましきことゝもおほえぬなのりをし、あやしきことゝもをも申、さても心のとかによをたもたせ給、ならひなき御ありさまにて、あまたのとしをすくさせ給へは、よの人もいとおそろしきことに申おもへり、わか御心ちにもあるへきやうにもおほしめされす、心ほそくおほさる、わか御よのはしめ六七年はかりありてそ、すへていみしかりし御なやみありて、〇道長、病ニ依リテ、出家セント請フコト、長德四年三月四日ノ條ニ見ユ、かくいまゝておはしますへくもみえさせ給はさりしかとも、いみしき御いのりのしるしたくひなき御願のしるしに、かくておはしませは、〇おはしますへく以下五十三字、富岡本、おはしませはニ作ル、このたひもおこたらせ給ひなんと、とのゝ人〳〵はおもひいふことゝもあり、そのたひの御なやみには、〇中略、道長ノ病ノコトニカヽル、御みやうしともは、晴明・光榮なとはい

曾テ重患ヲ受ケ移徙シテ恢復ス
移徙ヲ拒ム
新堂建立ヲ發願ス
主上ヲ始メ院宮一族等修法讀經ヲ行フ
上東門第附近ノ諸家モ皆僧侶ヲ收容ス

とかみさひたりしものともにて、しるしことなりし人〳〵なり、ところかえさせ給てよかるへきよし申けれは、故麗景殿の内侍のかみ（綏子兼家女）のいへ、つちみかとにこそはわたらせ給ておこたらせ給ひにしかは、そのれいをひきてほかへ（にイ）わたらせ給へなと、さるへきとのは申給へと（させイアリ）、すへてさらにいかんともおもひはへらはこそは〇は、富岡本、あらめニ作ル、とて、きこしめしいれす、たゝほとけをたのみたてまつらせたまへり、としころの御ほい、たゝ出家せさせ給て、このきやうこくとのゝひんかしにみたうたてゝ、〇道長發願ノ新堂ノ木作始ノコト、七月十六日ノ第三條ニ見ユ、そこにおはしまさんとのみおほさるゝに、このたひおこたらせ給へらは（なイ）、かきりなき御ありさまにてこそはすくさせ給はめ、されはいかゝとのみ、したしき・うとき、やゝましけにおもひ申たるも（給イ）、ことはりにみえさせ給ふ、みや〳〵なとみなおはしましあつまらせ給て、さしならひ、よろつにあつかひきこえさせ給ふ、このよの御ありさまなへてならすめてたくおはします、とのにも（攝政殿イ）御すほう三たん（五イ）おこなはせ給ふ、さま〳〵のみと經かすをつくさせたまへり、内・東宮（春イ）よりも、太宮（天イ）・皇太后宮（妍子）・中宮（威子）・小一条院、又攝政殿（教通）・左大將殿（教通）〇左大將殿、富岡本、なと、みな御すほうせさせたまふほとの御ありさま、おもひやるへし、とのゝうちはさらにもいはす、そのわたりのいへ〳〵、おほきなるちゐ（にイアリ）（天）

道長祈禱ヲ停メテ念佛ヲ修センコトヲ望ム

太皇太后道長ノ出家ヲ制シ給フ

道長一家ノ繁榮ヲ述懷ス

寛仁三年三月二十一日

さきわかす、みなこゝらのそうともいりゐたり、かゝらんにはいかてか、○富岡本、コノ次ニ、かきりある御事もノハ字アリ、とみえさせ給ふ、御まつり・はらへなと、○富岡本、コノ次ニ、いふ事しきりにノ七字アリ、いはんかたなし、とのゝ御まへ、いかていまはたゝいのりはせて、滅罪生善のほうともをおこなはせ、念佛のこゑをたえすきかはやとのたまはすれと、それはつゆこのとのはらきこしめしれす、いかてとくほいとけなんとのたまはするを、大宮きこしめして、猶いましはし、春後朱雀院宮の御よにあはせたまふへく、○御よに以下十一字、一本、御代を待たせ給ふへくニ作ル、きこえさせたまふを、○後朱雀天皇御受禪ノコト、長元九年四月十七日ノ條ニ見ユ、心うく、あひおほさぬなりと、うらみ申させ給へは、いかに〳〵とのみおほしなけかせ給ふ、御ものゝけともいとおとろ〳〵しう、ゆゆしくいふもれいのことなれと、猶いかにと、おほやけわたくしたゝいまの大事、これよりほかになにことかはとみえたり、仁和寺の僧正なともみなおはす、とのゝ御まへ、さらにいのちをしくも侍らす、さき〳〵よをしり、まつりこち給へる人〳〵おほかるなかに、おのれはかり、すへきことゝもしたるためしはなくなんある、内・東宮おはします、みところのきさいの・院、○きさい・院、富岡本、きさきおはします院ニ作ル、の女御おはす、○是ノ本、コノ前後ノ行間ニ勘物アリ、姑ク末尾ニ掲書ス、左大臣にて、○左大臣、一本、内大臣ニ作ル、攝政つかうまつる、○る、富岡本、給またニ作ル、つきは内大臣にて左大將かけたり、○内大臣、一本、大納言ニ作ル、藤原敎通ヲ權大納言ニ任ズルコト、十二月二十一日ノ條ニ見ユ、又大納言あるは左衛門督にてへたうかけたり、この（藤原長家）おとこのくらゐそまたいとあさけれと、三位の中將にてはへり、みなこれつき〳〵のおほやけの御うしろみつかふまつるへし、みつから、○富岡本、コノ次ニ、關白攝政ノ四字アリ、太政大臣、○元年十二月四日ノ條參看、・准三宮のくらゐにてはへり、○長和五年六月十日ノ第四條參看、この廿よ年のほと、ならふ人なくて、みひとつしてあまたのみかとの御うしろみをつかうまつるに、ことなるなんなくてすきはへりぬ、おのかせんその貞信公、いみしうおはしたる人、われ太政大臣にて、太郎おのゝみやのおとゝ左大臣、次郎九条右大臣、四郎・五郎なと大納言にてさしならひ給へりけれと、きさきたち給はすなりにけり、ちかくは九条のおとゝ、わか御身は右大臣にてやみたまひにけれと、おほきさきの御はらの冷泉・圓融院おはしまし、十一人のおのこゝのなかに、五人太政大臣、○藤原伊尹・同兼通・同兼家・同爲光・同公季、になり、○富岡本、コノ次ニ、三人は攝政關白しノ八字アリ、給へり、いまにいみしき御さいはひなりかし、されと、きさきみところかくたちたまひたるためしは、このくにゝはまたなきなりなと、よにめてたき御ありさまをいひつゝけさせたまふ、ことし五十四なり、しぬともさらにはちあらし、いまゆくすゑもかはかりのことはありかたくやあらん、たゝあかぬことは、内侍のかみを東宮にたてまつり、皇太后宮の

官位ハ太政大臣准三宮

權ヲ執ツテ二十餘年竝ブモノナシ

藤原忠平同師輔モ猶及バズ

三后竝ビ立ツハ先例無シ

今年五十四歳

藤原嬉子ト禎子内親王ノコトヲ心殘リト爲ス

陽明門院禎子
一品の宮の御ありさま、○禎子内親王著裳ノコト、治安三年四月一日ノ條ニ、東宮ニ入リ給フコト、萬壽四年三月二十三日ノ條ニ見ユ、このふたことをせすなりぬるそあれと、大宮(彰子)おはしまし、攝政のおとゝいますかれは、さりともしたまふことありなんといひつゝけさせたまふに、みや〳〵とのはら○富岡本、コノ次ニせきとゝめすノ六字アリ、なかせ給、○なかせ給、一本、せきとめ難うおほされニ作ル、そうそくもなみたとゝめかたし、うへ(倫子)はさらにもいはす、きこえさせんかたなし、かくて、いまはとて院源僧都(マヽ)めして御くしおろさせ給ふつ(イナシ)、○是ノ本、コノ前後ノ行間ニ勘物アリ、姑ク末尾ニ掲書ス、上もとし(北政所イ)ころの御ほいなれは、やかてとおほしの給はすれと、かんのとのゝ御ことのゝちにと申させ給へは、○源倫子出家ノコト、治安元年二月二十八日ノ條ニ見ユ、いとくちをしとおほしまとふ(のたまイ)もいといみし、そう(マヽ)つの御くしおろしたまふとて、としころのあひた、よのかため(のイ)、一切衆生のちゝとして、よろつの人をはくゝみ、正法をもてくにをおさめ、ひたうのまつりことなくてすくさせ給ふに、かきりなきくらゐをさり、めてたき御家(身イ)をすてゝ、出家入道せさせ給ふを、三世諸佛たちよろこひ、けんせは御壽命のひ、後生は極樂の上品上生(の位イアリ)にのほらせ給へきなり、三歸五戒をうくる人すら、卅六天の神祇・十億恒河沙の鬼神まもるものなり、いはんやまことの出家をやなと、あはれにたうとくかなしきことかきりなし、みや〳〵とのはら(のイアリ)おしみかなしひきこえ給ふ(イナシ)、ことはりにいみしう

天皇東宮ノ御使
室源倫子共ニ出家セントスレドモ道長コレヲ制止ス
院源道長出家ノ功德ヲ讃フ
上品上生ニ昇ルベシ

○富岡本、コノ次ニことはりにノ五字アリ、かなし、内・東宮より御つかひゝまなし、かくてのち、さりともたのもしきかた(事イ)そはせ給ぬ、御ものゝけともくちをしかり、くゐねたむことかきりなし、それをそたのもし(いとイアリ)くきこしめす、さてひころにならせ給まゝに、御ものゝけのこゐとも、やう〳〵すこしう(イナシ)すらきもていきて、御心ちもこよなけにて、御くたものなときこしめす、いかてかほとけ(はイアリ)の御しるしみえぬやうはと、いよ〳〵御心ちもうれしくおほさる、よろつよりもかくならせたまふとて(ひしおりイ)、としころのみすいしんともめしいてゝ、ろくたまはせてかへしまいらせさせ給ひしに、みすいしんともなみたをなかして、にはにふしまろひ(のまへイアリ)せし○せし、富岡本、こそかなし(いみしうイアリ)かりしか、御いのりのそうたち、いよ〳〵心をつくしし(なきしニ作ル)るしありとおもへり、この御なやみは寛仁三年三月十七日よりなやませ給て、同廿一日に出家せさせ給つれは、日なかにおほさるゝまゝに、さるへきそうたち(宮イ)・とのはらなとゝものかたりせさせ給て、御心ちこよなくおはします、いまはたゝ、いつしか御(歳五十四)

○いつしか、富岡本、いかてニ作ル、このひんかしにみたうたてゝ、さゝしう○さゝしう、富岡本、さてニ、一本、しつかにニ作ル、すむわさせん、となんつくるへき、かうなんたつへきといふ(なイアリ)御心たくみいみし、かくてひころになるまゝに、御心ちさはやき、すこし心のとかにならせ給ふて、きのふけふそみや

病中新堂ノ結構ニツキテ語ル
隨身ニ祿ヲ與ヘテ返遣ス
物怪退散ス
菓物ヲ食ス

稍恢復シテ太皇太后中宮ノ還啓ヲ促シ奉ル

新堂ノコトヲノミ思ヒ暮ス

皇太后ハ一條院ニ還啓

〳〵の御かた〳〵におはします、いまはおこたりにてはへり（はてイアリ）、○是ノ本、コノ前後ニ附箋一葉アリ、姑ク末尾ニ掲書ス、大宮（彰子）・中宮（威子）とく内にいらせたまへ、さうさうしくおはしますらんと、そゝのかしきこえさせたまへと、大宮はなをしはしと心のとかにおほされたり、中宮そとくいらせ給ふ、とのはみたういつしかとのみおほしめす、このよのことは、いまはたゝかのみたうのこ（こイ）とをのみおほしめさるれは、攝政とのもいみしう御心にいれておきて申させ給ふ、○おきて以下八字、富岡本、おほしめしいそかせ給ふニ作ル、皇大后宮（妍子）は一条とのにそかへらせ給ふ、○皇太后、一條院還御ヲ延引シ給フコト、五月二十四日ノ第二條ニ見ユ、かくとみをきたてまつらせ給て、おの〳〵かへらせたまふ御心ちとも、きこえんかたなくうれしくおほしめす、このたひの御なやみかくおこたらせ給はん物と（をイアリ）、たれもおほしかけさりつる（イナシ）事そかし、よのめてたきことのためしに申思へし、○富岡本ヲ以テ校ス、

「頼通（行間勘物）」　寛仁元年三月四日任内大臣、同十六日爲攝政、同三年十二月廿二日爲關白内大臣、治安元年七月廿五日任左大臣、關白如元、

教通　寛仁元年四月二日任權中納言（カ）、○教通ノ任權中納言ハ長和二年六月二十三日ナリ、左大將、八月九日兼春宮大夫、同三年三月廿一日（十一）任權大納言、治安元年七月廿五日任内大臣、大將如元、

頼宗　寛仁元年四月二日任權中納言（カ）、○頼宗ノ任權中納言ハ長和三年三月二十八日ナリ、八月卅日爲皇后宮權大夫、左衛門督、○元年四月三日ノ條參看、別當、○長和五年七月十七日ノ第二條參看、同四年四月辭別當、治安元年七月廿七日（五）任權大納言、八月廿九日兼春宮大夫、

能信　寛仁元年八月卅日任權中納言、同二年十月十六日任中宮權大夫、同四年九月十九日兼左兵衛督、治安元年七月廿五日任權大納言、

オトコノ位マタアサキ三位中將云々、長家歟、公卿補任ノ傳ニ無之、可考之、

入道殿　寛仁三年三月廿一日御出家、此時宇治殿攝政内大臣、二条殿（教通）中納言左大將、

堀川大臣（頼宗）權中納言左衛督（門脱）別當、閑院（マヽ）春宮大夫中納言民部卿右近中將、此詞御出家之後歟、能信尤可被入之、道綱不可入歟、御本注、」

「御堂（行間勘物）御出家寛仁三年三月廿一日、年五十四、法名行觀、六月十九日上表、改觀爲覺、院源非僧都、去寛弘八年辭僧都、以弟子實誓任權律師、○寛弘八年四月二十七日ノ第一條參看、長和六年（寛仁元年）三月爲法印、○元年三月十五日ノ條參看、仍今年法印也、

或記云、寛仁三年三月廿一日、前大相國自去十七日依胸病危急、令遁世給、法印院源爲戒師、律師定基剃御頭、小一条院幷三后渡御、○下略、皇后藤原娍子、出家シ給フコトニカヽル、本月二十五日ノ條ニ收ム、」

「南無佛陀耶　南无達麽耶　南無僧伽耶（附箋別筆）」

六月ニ至リテ法名ヲ行覺ト改ム

未刻俄ニ床ヲ離レテ布袴ヲ著ス

阿揭多　說羝嚕　主多光　蘇多末尼」

〔大鏡〕五　○東松本三氏本　□〔二〕　太政大臣道長上

○上略　たゝし殿（道長）の御まへは卅より關白せさせたまひて、一条院・三条院の御時、よをまつりこち、わか御まゝにておはしましゝに、又當代（後一条）の九歳にてくらゐにつかせ給にしかは、御とし五十一にて攝政せさせ給とし、わか御身は太政大臣にならせ給て、攝政をはおと（頼通）ゝにゆつりたてまつらせ給て、御とし五十四にならせ給に、寛仁三年己未三月廿一日、御出家し給へれと、○下略、道長ニ、舊ノ如ク、三宮ニ准ジテ年官年爵ヲ給フコトニカヽル、五月八日ノ條ニ收ム、

（裏書）法成寺入道前攝政太政大臣道長公、事

○上略　同（寛仁）三年三○以上四字、原ト闕ク、流布本ニ據リテ補フ、月廿一日、出家、年五十四、法名行觀、同六月十九日、改觀爲覺、

〔大鏡〕七　太政大臣道長　○上略、上ニ揭グル東松本大鏡ニ同ジ、寛仁三年ちのとのひつし三月十八日、夜中はかりよりむねやませ給ひて、わさとにはおはしまさねと、いかゝおほしめしけん、俄に廿一日のひつしの時はかりに、おきゐさせ給ひて、御かうふりめし、かひねりの御したかさねに布袴をさしそはせ給ひて、御てうつめせは、なに事にかと、關白（マ）殿をはし

春日明神ヲ拜シテ暇ヲ申ス

不意ノ出家

尋圓袈裟ヲ捧グ

落飾ノ後初メテ出家ノ由ヲ奏ス

不慮ノ行啓ニテ作法例ニ背ク

めて、殿はらもおほしめすに、しんてんのにしのわた殿に出させ給ひて、南にむきてはいせさせ給ふ、春日の明神にいとま申させ給ふなりけり、きやうめい（慶命）僧都・ちやうき（定基）律師して、御くしおろさせ給ふ、關白（マ）殿をはしめとしてきんたち殿はらなと、いとあさましとおほしめせと、おほしたちてにはかにせさせ給ふ事なれは、たれ〳〵もあきれて、えせいし申させ給はす、あさましとはをろかなり、ゐけん（院源）法印戒の師し給ふ、しんゐ（尋圓）僧都のけさ衣をそたてまつりそめける、にはかの事にてまうけさせ給はさりけるにや、御名行觀とそつかせ給へりし、のちにしものもしかへて行覺とそ侍りし、かくて後にそ、うち・東宮のみやたちにもかくと聞えさせ給ひける、きゝ付させ給へるみやたちの御心ともあさましかりし、さはくとも事もをろかなり、さるのときはかり小一條院わたらせ給ふ、御門のとにて御車うしかけおろして、ひきいれて中門のとにておりさせ給ひてこそはおはしましゝか、よせておりさせ給はてかしこまり申させ給ふほと、いともかたしけなくめてたき御ありさまなりしそかし、宮たちもゆふさりこそはわたらせ給ひしか、中宮・皇（マ）后宮なとはひとつ御車にてそわたらせ給へりし、行啓のありさまも俄にて、れいのさほうにも侍らさりけり、

天變ハ道長出家ノ兆

〔百練抄〕四 後一條天皇　三月

廿一日、前太政大臣道長、出家、五十四、法名行覺、依胸所勞也、後改行觀、

〔扶桑略記〕二十八 後一條天皇　三月

廿一日、太政大臣道長依病出家、年五十四矣、

六月十九日、入道大相國（前脱カ）、法號本行觀、上表日、改爲行覺、○道長、上表スルコト、六月十九日ノ第一條ニ見ユ、

〔江談抄〕二 雜事　古人名幷法名事

又云、古人名□幷法名等、○中略 道長、行觀、又行覺、

〔諸道勘文〕四十五 彗星上

勘申彗星年々事

○中略

寛仁二年六月十九日、彗星見、經數日長二丈餘、○二年六月十九日ノ條參看、

○中略

同三年三月廿一日、前大（太）政大臣藤原道長公出家、

○中略

右依仰、大略勘申如件、

長治（嘉承元年）三年三月四日　大外記中原朝臣師遠

年來ノ御素意慶圓戒師ヲ辭スル戒師院源

○愚管抄・應德元年皇代記・一代要記等、異事ナキヲ以テ略ス、道長病ムコト、二年六月二十日ノ第二條及ビ同年十一月六日・十二月二十八日幷ニ本年正月十日ノ條ニ、道長ノ病ニ依リテ、非常赦ヲ行フコト、四月三日ノ第二條ニ、道長ニ、舊ノ如ク、三宮ニ准ジテ年官・年爵ヲ給フコト、五月八日ノ條ニ、道長、東大寺ニ於テ受戒スルコト、九月二十九日ノ條ニ見ユ、

復日ノ御出家

二十五日、壬午、皇后藤原城子、出家シ給フ、

〔小右記〕○前田家本　三月

廿五日、壬午、○中略 皇后宮（藤原城子）令出家云々、年來御刻念云々、後聞、爲戒師被請山座主（慶圓）、申障不參入、仍以法印院源爲戒師、亦大僧都慶命・律師懷壽備其事云々、

復日御出家如何、去年八月廿九日戊午、四宮（師明親王）出家、○二年八月二十九日ノ第二條參看、彼日復日、最可被忌避歟、

慶命懐壽モ奉仕ス

戒師濟信トノ説乳母等モ従ツテ出家ス

卅日、丁亥、皇后宮亮(藤原)爲任來、談宮御出家事、被請山座主被申障、仍以法印院源爲戒師、大僧都慶命・律師懐壽又從其事者、

〔日本紀略〕後一條院　三月

廿五日、壬午、皇后宮落餝爲尼、戒師僧正濟信、乳母・年來官仕女多以出家、

〔榮花物語〕十五　○梅澤義一氏所藏三條西本

（行間勘物）「○上略、藤原道長ノ出家ノコトニカヽル、本月二十一日ノ條ニ收ム、」

母并近仕女房等同出家云々、○下略、道長ニ准三宮ノ宣旨ヲ給フコトニカヽル、五月八日ノ條ニ收ム、

○大鏡裏書等、異事ナキヲ以テ略ス、小一條院、皇后宮ニ參リ給フコト、正月九日ノ第二條ニ、皇后、御惱ニ依リ、剃髪シ給フコト、五月九日ノ條ニ見ユ、

四月　小戊子朔盡

參入ノ公卿

見參

藤原道長諸宮ニ更衣ノ裝束ヲ獻ズ　太皇太后ニ獻ル唐衣ニ歌ヲ添フ

一日、戊子、旬平座、更衣、

〔小右記〕○前田家本　四月

一日、戊子、○中略

今日不出御南殿云々、

二日、己丑、宰相(藤原資平)來云、昨日中納言(藤原)行成・經房(源)・實成(藤原)・參議朝經(藤原)・資平參入、秉燭後著宜陽殿、□大納言道綱(藤原)著宿者(カ)、參大盤所、□卿相□甚無由云々、

〔日本紀略〕後一條院　四月一日、戊子、旬平座、見參、

〔榮花物語〕十五　○梅澤義一氏所藏三條西本　○上略、藤原道長、出家スルコトニカヽル、三月二十一日ノ條ニ收ム、かくて三月つこもりに、れいの宮々の御ころもかへのものともたてまつらせたまふこと、いましもおこたらせたまふへき事ならす、みなわかちたてまつらせ給とて、大宮(藤原彰子)にからの御そに

○御そに、富岡本、御そのたもとにニ作ル、そへさせ給へる、

からころもはなのたもとにぬきかへよわれこそはるのいろはたちつれ

集、三句ヲ、立かへよニ作ル、

○世繼物語及ビ和泉式部續

寛仁三年四月一日

太皇太后ノ御返歌

大宮御らんして、いみしうなかせ給て、御返し、〔事イ〕

からころもたちかはりぬるはるのよにいかてかはなのいろもみるへき〔はイ〕　○世繼物語、三句ヲ、世の中はニ、結句ヲ、色もきるへきニ作ル、

和泉式部ノ獻ル歌

〔藤原道長〕とのゝ御うたをきゝて、いつみしきふか大宮にまいらせたる、〔けイ〕

和泉式部、越前守正四位下大江雅致女、或説云、中納言懐平〔藤原〕女、母越中守平保衡女、和泉守橘道貞爲妻、仍號云々、童名

ぬきかへんことそかなしきはるの色をきみかたちけるころもとおもへは〔つイ〕　○和泉式部續集、結句ヲ、御許火、心とおもへはニ作ル、

女房ノ返歌

大宮のせんし、かへし、〔返事イ〕

たちかはるうきよのなかはなつころもそてになみたもとまらさりけり

おなしころ、とのゝいつみをみて、よみ人しらす、

みつのおもにうかへるかけはかくなからちよまてすまぬものにやはあらぬ〔をイ〕

おまへのたきのおとをきゝて、むまの中將、

そてのみそかはくよもなき水のおとの心ほそきにわれもなかれて〔まイ〕

○富岡本ヲ以テ校ス、

〔新古今和歌集〕十六雜哥上　世をのかれて後、○三月二十一日ノ條參看、四月一日、上東門院〔彰子〕大皇〔太〕

源倫子ノ返歌

〔太〕大后宮と申ける時、衣かへの御裝束たてまつるとて、○和泉式部續集、詞書ヲ、入道殿法師にならせたまひてのころ〔ち脱カ〕もかへの物具たてまつらせたまふとてニ作ル、

法成寺入道前攝政太政大臣〔道長〕

から衣花の袂にぬきかへよわれこそ春のいろはたちつれ　○同集、三句ヲ、たちかへよニ作ル、

上東門院

御返し

唐衣たちかはりぬる春の夜にいかてか花の色を見るへき

〔新勅撰和歌集〕十八雜哥三　世をのかれて後、四月一日、法眼袈裟を見侍て、

法性寺入道前攝政太政大臣〔成カ〕

今朝かふる夏の衣はとしをへてたちしくらゐの色そことなる

返し

從一位　倫子〔源〕

またしらぬ衣の色はたちかへて君かためにとみるそかなしき

三日、庚寅、復任除目、

〔日本紀略〕後一條院　四月

三日、庚寅、被行復任事、

入道前太政大臣藤原道長ノ病ニ依リテ、非常赦ヲ行フ、

藤原實資道長ノ病重シト聞キ同資平ヲシテ訪ハシム

上卿藤原行成

實資等ノ見舞

實資詔書ニ加署ス

詔書覆奏藤原公任内侍ノ候不ヲ問ハズ

〔小右記〕○前田家本　四月

四日、辛卯、早朝彼是□（云カ）、入道殿（藤原道長）重悩給、又云々縱横、仍令參宰相（藤原資平）、小時歸出云、去夜重悩給、今朝宜坐者、下官（藤原實資）參不事、傳達源大納言（俊賢）、報云、今間殊事不坐、雖不參有何事乎、尋常祗候卿相達參候之例也、至他人必不可馳歟者、去夜被行非常赦、中納言行成（藤原）卿承之、臨曉更赦免云々、

五日、壬辰、○中略

參入道殿、源大納言俊賢・四條大納言（藤原）公任・二位宰相（藤原）兼隆・右兵衛督（藤原）公信・右大辨（藤原）朝經、先參、以左衛門督（藤原）頼宗、被命云、此四・五日大悩侍、不能相逢、

十一日、戊戌、○中略

詔書赦、覆奏加署、

廿七日、甲寅、○中略

詔書覆奏事、大外記（小野）文義申之、仰可申次人之由、後聞、大納言公任卿奏之、後日大納言云、先可問内侍候不、而不問直奏、思失也者、

〔日本紀略〕後一條院　四月

三日、庚寅、○中略　又詔大赦天下、大辟以下、罪無輕重、常赦所不免者赦除、依入道（道長）前相國之病也、

〔管見記〕正和四年八月

八日、甲申、官人章任○中原記正和四年

八月

八日、今夕依入道（藤原師教）左大臣殿御病悩、被行免者、其簡云、先例□□□□頭辨資名（藤原）朝臣於文殿被問答之、師古（中原）・章任（中原）・章房等祗候之間、云無爲之例、云原免囚事、各申所存者也、寛仁三年四月三日赦、前大政大臣（道長）、御堂歟○中略　此三个度之例、吉例之旨注申入畢、○中略

七月

官人章房記

卅日、丙子、依召參仙洞治部卿（藤原後光）家、被仰云、重臣病悩之時、赦幷免者例可注申云々、章房○中略　請文懐中進入之、其狀、

重臣御病悩時被行赦例

御堂殿

一、寛仁三年四月三日被行赦、上卿權中納言兼侍從藤原朝臣行成卿、左衛門大尉藤原朝

検非違使藤原宗相宣旨ヲ奉ル

臣宗相奉、此赦入道太政大臣病惱之故也云々、

○中略

管見之所覃、大概如斯、○中略　章房誠恐謹言、

主税助中原章房請文

七月卅日

八月

八日、甲申、○中略　赦并免者之先例事、章房注進之、五个度之例、善悪之用捨可計申上云々、師古申云、寛仁三年四月三日、御堂入道太政大臣殿、○中略　此等御無爲之例可宜云々、

○道長、病ニ依リテ出家スルコト、三月二十一日ノ條ニ、猶病ムコト、五月二十四日ノ第二條ニ見ユ、

五日、壬辰、京中各所ニ盗賊・放火頻リナルニ依リテ、検非違使ヲシテ、夜行セシメ、又、條々ニ道守舍ヲ作ラシム、尋デ、瀧口ニ勸賞シテ、宮中放火ノ犯人ヲ捕ヘシム、

〔小右記〕○前田家本　四月

四日、辛卯、○中略　子終剋許、蓮花十字東西、富小道東西、大炊御門以南、冷泉院小道南北人々宅々燒亡、東風頻吹、怖畏尤太、諸卿參集、攝政殿、火欲滅之間、宰相々共參入、乍立奉謁、

大炊御門富小路邊燒亡（藤原佐光宅）
公卿等攝政第ニ參集ス（藤原実資）

小時退歸、東方漸白、寅剋歟、

五日、壬辰、○中略

酉剋許、北隣佐光朝臣宅西廊上、（藤原）投上火、煙發之間、宰相宅人見付、雑人等撲滅了、又今夜戌剋許、上東門大道以北、帶刀町東西小人宅等燒亡、去今夜燒亡皆盗人所爲云々、

又去月晦比雨夜、四條小人宅燒亡、常陸介惟通舊妻宅群盗付火、惟通女被燒欠、（藤原）當時已無憲法、万人抱膝仰天、

六日、癸巳、京中處々不論晝夜。皆是盗賊所爲、無憲法之所致也、昨日卿相參會入道殿（藤原道長）之次、歎息而已、○公卿等、藤原道長ノ病ニ依リテ、ソノ第二條ニ見ユ、參入スルコト、本月三日ノ第二條ニ見ユ、四條大納言條々夜行可被行也、（藤原公任）（云脫カ）（藤原實資）余云、造道守舍、仰保々令宿直、尤可佳、源大納言有饗應、（俊賢）（響イ）

十二日、己亥、將曹正方（紀）云、一昨夜、主殿司女、於後涼殿北道、爲盗人悉被剝衣裳者、拔刀充頸不令放呼聲云々、未聞之事也、御所最近、何況里第乎、可謂末世、悲哉、

十三日、庚子、去夜襲芳舍放火撲滅了、亦藍園行火打滅、又此東町小人宅放火、帥中納（藤原隆家）言家宿直者見付告、即打滅云々、帥家、宿護者夜居舍上云々、連夜京中往々有斯事、放免所爲云々、就中、宮中事極奇怪也、何不降天譴哉、亦公家無所被定行、愚所思者、捕進行火者之輩、可加殊賞之宣

襲芳舍等ニ放火アリ
藤原隆家第ニハ夜間屋上ニ警護者ヲ置ク
放火ハ放免ノ所爲トノ風評アリ
盗賊ノ放火北道ニ於テ後涼殿主殿司女ノ衣ヲ剝グ
盗賊ノ放火夜絶エズ
藤原公任ハ夜行ヲ同實資ハ道守舍ノ設置ヲ建議ス
帶刀町ニモ火アリ
先ニモ四條ニ放火シテ燒死者ヲ出ス
西廊ノ屋上ニ投ズ
已ニ憲法ナシ

實資勸賞ヲ行フベシト申ス

夜行及ビ道守舎ノコトヲ検非違使別當ニ仰ス

犯人ヲ捕ヘタル瀧口ハ衛門尉ニ任ズベシ

旨、若可被下歟、然者有怖畏歟、此由密々示達四條大納言・頭辨經通（藤原）、放火事不斷者、天下滅亡了歟、此兩三日間、諸條造道守舎云々、去五日卿相參會入道殿、有京中行火事等、可造道守舎事、余所陳也、其後官人等召仰也云々、別當（藤原頼宗）彼日在入道殿、計之仰下歟、後日四条納言示送云、夜行事、彼日示別當、其次仰道守舎事歟、

十四日、辛丑、○中略瀧口紀惟光云、去夕藏人左衛門權佐資業（藤原）傳仰瀧口等宣旨云、伺捕宮中放火者、賞以左右衛門尉（尉）允者、

○權中納言藤原頼宗ノ居第等燒亡スルコト、正月十四日ノ條ニ、群盜、參議藤原通任ノ第ニ入ルコト、同月二十九日ノ條ニ、東宮御所内裏凝華舎ノ渡殿ニ火アルコト、三月十四日ノ條ニ、穀倉院燒亡スルコト、同月十七日ノ條ニ、中務省監物局ニ火アルコト、五月十二日ノ條ニ見ユ、

七日、甲午、擬階奏、

〔日本紀略〕後一條院　四月

七日、甲午、擬階奏、

〔小右記〕○前田家本　四月

藤原實資加署ス

太皇太后宮大夫ハ辭セズ

藤原實資布施ヲ奉ル紙四帖

五日、壬辰、擬階奏加署、

權大納言源俊賢、三タビ上表ス、

〔小右記〕○前田家本　四月

七日、甲午、○中略大納言俊賢（源）卿今日重上表、但不辭大（太）皇太后宮大夫、

○俊賢ノ第一度及ビ第二度上表ノコト、二年十二月二十四日ノ條ニ、表ヲ返シ給フコト、本年二月六日ノ第一條ニ、俊賢致仕スルコト、十月二十日ノ條ニ見ユ、

八日、乙未、灌佛、

〔小右記〕○前田家本　四月

八日、乙未、灌佛如例、不參内、奉灌佛布施於内・東宮（敦良親王）、各紙四帖、裹檀帋、々上書右大將（藤原實資）付白木、

〔日本紀略〕後一條院　四月

八日、乙未、灌佛、

九日、丙申、平野祭、

〔日本紀略〕後一條院　四月

九日、丙申、平野祭、

急逝心勞ニ依ル

藤原實資弔問ス

延子日夜悲歎ニ沈ム

十日、丁酉、梅宮祭、

〔日本紀略〕後一條院　四月

十日、丁酉、梅宮祭、

小一條院女御藤原延子卒ス、

〔小右記〕○前田家本　四月

十一日、戊戌、去夜大左臣二娘（藤原延子）（小一條院敦明）院御息所、忽以亡逝云々、心勞云々、

五月

三日、己未、○中略

呼盛筭闍梨令達消息左府、院御息所逝□遣也、賀茂祭○本月二十二以前日ノ條參看、不參、其後日次不宜、于今不弔申之由等也、

九日、乙丑、○中略　臨昏宰相（藤原資平）來云、○中略、三條天皇御忌ノコトニカヽル、五月九日ノ條ニ收ム、次參弔左府、

〔榮花物語〕十六　○梅澤義一氏所藏三條西本

寛仁三年四月はかりに、ほりかはの女御（小一條院女御左大臣顯光二女、式部卿敦貞親王母、）あけくれなみたにしつみてをはしませはにや、

○小一條院、高松第ニ於テ、藤原寛子ト婚シ給フコト、元年十一月二十二日ノ第二條ニ見ユ、御心ちもうき、あつうもおほされて、○あつう、富岡本、あへうニ、一本、あるへうニ作ル、れいならぬさまにて、ありすくさせ給ほとに、いとなやましうお

湯治シタルニ口鼻ヨリ出血シテ卒ス

父藤原顯光ノ悲歎

小一條院急ギ堀河第ニ赴キ給フモ既ニ臨終ノ後ナリ

小一條院中原致行ニ敦貞親王等ノ養ヲ委ネ給フ

親王達ヲ東對ニ移シ奉ル

源頼定及ビ原延子ノ姉藤原元子堀河第ヲ去ル

ほされけれは、御かせにやとて、ゆてさせ給ひてのほらせたまふに、（さイ）御くち・はなより顯光ちあえて、やかてきえいり給ひぬ、おとゝ御こゑをさゝけて、なきのゝしり給へと、なにのかひかあらん、（はイアリ）七十よになりぬる身をめせ、○身、富岡本、をのれニ作ル、わかうさかりなる人のゆくすゑとをきをはかへしたへと、（はるかなるイ）なきのゝしりたまへと、（らせイ）かかるみちはすちなきわさなれは、（えイナシ）えとゝめたてまつらせ給はすなりぬ、（さりけりイ）（イナシ）いとあさましうてはてさせ給ぬれは、小一條院院きこしめして、ひとへの御そてをおしあてゝ、（そのイアリ）たゝせ給へるより、御なみたのつく〳〵ともりいつるほとも、（てくイ）（イナシ）もとのしつくやと、あはれにおろかならす、いまはのほらせ給てもかひなかへけれは、（りイ）つちにたゝせ給て、（ちイ）みや〳〵いたきいてたてまつらせ給て、（たしイ）教貞、今年一宮の六歳也、中原致行寛弘五年正月任左近將監、同六年敍大外記致時男、御めのとのおとこ左近大夫むねゆきをめして、（大臣イアリ）とのはものもおほえたまはさめり、（させイアリ）このみや〳〵かのひんかしのたいにわたしたてまつれ、あなかしこ、○以上五字、富岡本、あよなかしく〳〵ニ作ル、るひるちかうて見たてまつれなと、（くてイ）返〳〵おほせられをきたまひて、（イ）（ナ）（シ）いまはいふかひなけれは、いま又こん、（大臣イアリ）殿にもえたいめせすなりぬることゝて、（の給イアリ）いてさせ給ぬれは、（イナシ）源宰相はこの御事かくのゝしれは、○この御事以下十一字、富岡本、かくこの宮のわたり給てあはたゝしくのゝしり給へはニ作ル、はかなきものをたにえとりあえて、元子一條院女御、顯光女、女御もろともにほかへわたり給にけり、○一條天皇女御藤原元子、源頼定ニ通ズルコト、

敦貞親王御母ヲ慕ヒテ泣キ給フ

小一條院御子ノ前途ヲ憂ヒ給フ

顯光遺骸ヲ抱キテ泣ク

頼定曩ニ讃責セラレシヲ怨ミテ不遇ノ顯光ヲ捨テ去ル

小一條院葬送ノコトヲ指示シ給フ

長和元年閏十月十一日ノ條ニ見ユ、一宮のいみしうなきたまふかあはれにおほされて、いまいくはくもあらさりける御ありさまを、なとてつらしとおほえられたてまつりけんと、〻しころのほいなくあはれなるわさかなとおほされて、〇富岡本、コノ次ニ、やかてノ三字アリ、しものみやにわたらせ給て、かう〳〵のことなんはへる、あはれにいみしきこと、このおさなき人〳〵いかゝしはへらんとすらん、〇富岡本、コノ次ニ、とおほつかなくノ七字アリ、おとゝはいまはなくなられぬらん、いとふかくなるさまにこそきゝ侍つれなと、よろつあはれにのたまひつゝけて、なかせたまふ、この大臣イとのは、おはせぬ人をつといたきて、よろつにいひつゝけてなかせ給もいみしうかなし、かゝるおりにや、人はほうしにもなるらんと、のたまはするに、をまへなる人〳〵心のうちにほゝゑまれける、源宰相はいと心くるしきとのゝ御ありさまを、みすてたてまつりたまふも、ことのはしめいとなさけなかりし御心の思わすれたまはぬなりけり、〇顯光、元子ノ頼定ニ通ジタルヲ讃怒スルコト、長和元年閏十月十一日ノ條ニ見ユ、かくて院わたらせ給て、をんみやうしめして、さるへきことゝもみなさためのたまはせ、よろつにあつかひきこえさせ給ほとも、又いとめてたし、とのゝあはれにおほしめしたるも、このみや〳〵の御あつかひをせさせたまふ、のちの御事ともみなよのつねのさまにおほしおきてさせたまへり、その日になり

院殿上人等ニ命ジテ葬送ニ加ハラシメ給フ

顯光歩行ニ堪ヘズシテ途中ヨリ乘車ス

顯光王子等ノ御後見ヲ以テ已ガ任ト爲ス

て、つとめて、院のおはしまして、よさりのことゝもいそかせたまふ、院の殿上人・しも人も、としころとりわきむつましうおほしめすは、のこりなくみなまいるへう、をきておほせらる、われそひて、こまかにみたてまつらせ給はぬはかりなり、しものみや〇富岡本、しものみやニ、小一条院母儀皇后宮娍子ト傍書ス、にはあまりなしたしうなおはしましそなと、きこえさせ給もことはりにて、事のおきてとも、くはしくせさせ給て、かへらせ給ぬ、さてよさりゐていてたてまつれは、宮たちは、この御ともにいなん〳〵と、したひなかせ給ふに、そこらのそうそく、なきあはれかりきこえぬなし、とのつえにかゝりて〇顯光りて、富岡本、ら よろほひ、〇一本、コノ次ニ人ノ字アリ、〻かへたてまつれと、せ給てニ作ル、けぬへけれは、なをいとみくるしき御事なり、御くるまにてすかやかにおはしまさんときこえて、みちにて御くるまにたてまつりぬ、さてよもすからとかくしあかしたてまつりて、わかき御こに、七十よにてをくれてかへらせ給ぬるほとそ、けによのなかのあはれはしられける、御いみのほともあはれに心ほそくてすくさせ給ふ、院よろつにあはれと おほしめす、とのは〇との、富岡本、おほゐとのニ作ル、すこしものおほしまきるゝおりは、この宮たちをみたてまつり、うつくしみたてまつらせ給ては、かはかりの事をおもふに、わかいのち

法事　國司等藤原道長ノ新堂ノ建立ニ從ヒテ顯光ノ事ヲ願ミズ封戸ヲ

顯光ノ老耄

顯光小一條院ニ諸事ヲ付託シ奉ル

顯光王子ノ即位ト自ラノ執政ヲ期ストヲ

はこよなうのひぬらんかし、われ宮たちの御うしろみを、しあやまつへきことかはとのたまはせ、ひちはらせたまふも、あはれにみたてまつる、御いみはてなは、このみやたちはむかへたてまつらんとおほす、北方ハ堀河大臣之室也、姫君ハ粟田關白之女也、きたのかたも、中宮のひめきみに、〇藤原道兼女、同威子ニ仕フルコト、二年三月七日ノ條ニ見ユ、さるへきところたてまつらせ給へれは、そち〇そち、一本、うちニ作ル、わたらせ給にしかは、あはれにこゝろほそくてすくさせ給ふ、やう〳〵御ほうしのほともちかくなりもていけは、院なにこともおほしいそかせ給、とのゝみふなとも、〇とのゝ以下八字、富岡本、院の御文ニ作ル、かゝるおりにとせめさせ給へと、たゝいまのすらうとも、たゝみたうのことをさきにする受領ほとに、〇藤原道長發願ノ新堂無量壽院木作始ノコト、七月十六日ノ第三條ニ見ユ、せう〳〵のところのことを、なにともおもひたらねと、〇たらねと、富岡本、たえぬされとニ作ル、かく院のおはしませは、それをよろつにたのみきこえたまひて、われはちこのやうにてすくさせ給も、いみしうあはれなり、このみやたちの、かくおいほけてとおはするをとゝひとゝころをまつはし、いみしきものにおもひきこえたまへるほとそ、御すくせもあはれに、心うきまてみえさせ給ふ、とのはをり〳〵は法師にならんとおもへと、このみや〳〵の御ありさまはてんのほいあり、いまの御かと・東宮またいとわかくおはしませは、宮たちをまうけ給へきにもあらす、この院のみやたちそ、そのつきのよには、かならすたちいてたまはん、たゝし、その御ときの攝政・關白、われおほちなり、それをゝきていみしからん、いまの攝政のおとゝ・内のおとゝ、もしはおほくらきやうなとや、たちいて心ちつかむ、それらはいとやすしなといふ、あらましことをのたまひあかしくらさせ給へは、御いみにこもりたるそうなとは、をのかとちしのひてうちわらふへし、それは宮たちの御事のおこかましきにはあらて、七十よにてかはかりよろつをおほしほれて、いよ〳〵あみたふつなともまうし給はて、いつとなくはるかなる程の御心をきてのをこなるへし、のち〳〵の御ほうしなと、みなせさせ給て、よろつ御心のとかに、つれ〳〵まさりて、あはれにてすくさせ給、院はみやたちみたてまつらせたまふては、しものの宮にをはしますへうそ申させ給ける、あさましうひろうおもしろきところに、このとのと一・二宮たちそおはします、さてはは氏忠なといふ人の、おとらぬほとのよはひも、いみしうあはれなれは、ゐんもこのみやたちをいとあはれに心くるしうみたてまつらせ給て、はかなき御くた物なと、よるよなかわかすたてまつらせたまふ、〇富岡本ヲ以テ校ス、

人々顯光ノ妄想ヲ嘲笑ス

世系

尊卑分脈　藤原氏北家

寛仁三年四月十日

五藏頭 顯光 撿別當、左衛門督、牛車・輦車、右大將、東宮傅、左右大臣、從一位、母元長（ママ）親王女、或元平親王女、治安元五廿五薨、

- 重家 從四下、左少將、號一乘院、號光少將、本朝美人、母規子內親王、或盛子內親王、
- 皇慶 東大、阿闍梨、
- 女子 元子、從一位、一條院御時承香殿女御、天皇〔ニ〕晏駕、密通參議、賴定卿、或本源言賴云々、母、
- 女子 延子、小一條院式部卿宮時御息所、式部卿敦貞親王母、母、（ママ）

〔本朝皇胤紹運錄〕

小一條院 諱敦明、長和五正廿九立坊、寛仁元八九辭之、卽授院號、母皇后娍子、濟時女、（藤原）

- 敦貞親王 三品式部卿、中務卿、爲祖帝（三條天皇）子、母顯光公女、

〔帝王系圖〕 ○前田家本

三條院

- 小一條院 太子、諱敦明、母皇后藤娍子、左大將濟時女、
- 敦儀親王

所生ノ王子

- 敦平親王
- 敦貞親王 式部卿、三品、實小一條院子、母左大臣藤顯光女、（子ヵ）
- 敦元親王 無品、實小一條院女、母法成寺禪閤女、
- 敦昌親王 無品、實小一條院子、（道長）母同敦貞、
- 敦賢親王 實小一條院子、母右大臣藤賴宗女、
- 〔性信法親王〕（朱書）
- 當子內親王
- 禔子內親王
- 陽明門院
- 儇子內親王 實小一條院女、母同敦元、
- 嘉子內親王 實小一條院女、伊セ齋、母同敦賢、
- 榮子內親王 實小一條院女、母同敦貞、

所生ノ王女

〔大鏡〕 ○東松本三氏本 三 一、太政大臣兼通忠義公、

○上略 又、太郎君（顯光）、長德二年七月廿一日（ママ）、右大臣にならせ給にき、○長德二年七月二十日ノ第一條參看、中略、こ

母ハ盛子内親王

小一條院藤原寛子ト婚シテ延子ヨリ離レ給フ

の御北方には、村上の先帝の女五宮（盛子）、廣幡のみやすとところ（計子○源）の御はらそかし、その御はらに、男子一人（重家）・女二人おはしましゝを、○中略女君ひとゝころは、一條院の御時の承香殿の女元子御とておはせしか、○中略いまひとゝころは、今の小一條院のまた式部卿宮とましゝおり、むこにとりたてまつらせたまへりしほとに、○長和三年十月六日ノ條參看、春宮にたゝせたまへりしを○長和五年正月二十九日ノ條參看、うれしきことにおほしゝかと、院にならせ給にしのちは、○敦明親王、皇太子ノ位ヲ辭シ給フコト、元年八月九日ノ第一條ニ、同親王ニ、小一條院ノ號ヲ授ケ奉ルコト、同月二十五日ノ第一條ニ見ユ、高松殿（藤原寛子）御匣殿にわたらせ給て、○小一條院、高松第ニ於テ、道長ノ女寛子ト婚シ給フコト、元年十一月二十二日ノ第二條ニ見ユ、顯光よはせたまふことたえにしかは、女御も父おとゝも、いみしうおほしなけきしほとに、御やまひにもなりにけるにや、うせたまひにき、そのはらに、みやたちあまたところおはします、

〔榮花物語〕三十二哥合○梅澤義一氏所藏三條西本　○上略、賀茂祭ノコトニカヽル、長元七年四月二十日ノ條ニ收ム、小一條院には、故左大臣殿（顯光）のゝ女御（衍カ）の御はらに、おとこ二人・女一ところを、○傍書ノ齋宮嘉子ト、榮子ノ誤カ、齋宮嘉子敦貞式部卿歟、一宮は中務、濟（源）政の播磨守のむこにてものし給、二宮は三井寺に大僧正（明尊カ）かしつきゝこえ給ことかきりなし、

堀河女御

顯光堀河第ヲ初メ元子ニ後延子ニ傳領ス

太皇太后元子ニ傳領スベシト爲シ給フ

〔榮花物語〕十四○梅澤義一氏所藏三條西本　○上略、藤原道長、新造上東門第ニ移徙スルコトニカヽル、二年六月二十七日ノ第二條ニ收ム、はかなくあきになりぬれは、風のをとをもあはれにこゝろほそきに、堀河の女御（顯光女小一条院舊室）まつかせのをとをきこしめして、

松風はいろやみとりにふきつらんものおもふ人のみにそしみける（もイ）（むかなイ）○後拾遺和歌集、結句ヲ身にそしみぬる作ル、とおほせられけり、○中略、敦康親王ノ御法事ノコトニカヽル、正月二十四日ノ條ニ收ム、あはた殿（大藏卿遠量○藤原女）のきたのかた、あまになら（りイ）せ給て、いまは中宮のひめきみにさ（つ）へきとこ（きイ）ろたてまつらせ給へれは、そこにわたり給て、ひめきみの御あつかひをのみそし給ける、ほりかはのおとゝはひとりすみにて、世中のあはれにこゝろほそき事をおほしすく（めイ）すへし、女御（元子）もわたり給てすませ給へは、源宰相（頼定爲平親王二男）のいていりし給こそは、たのもしき御ありさまなれと、もとより御なかよろしからさりしかは、御たいめん（イナシ）たにたはやすからす、おほつかなけになむ、このほりかはの院をは、はしめはこの女御にたてまつり給へりけれと、二位（頼定）の宰相の事のゝちは、小一条院○院、富岡本、小一條の院ニ作ル、の女御（延子）にたてまつり給へりけれは（イナシ）、このしんてんは（とイ）○以上五字、富岡本、ほりかはの院はやけにし（らせイ）をニ作ル、小一条院○小一条院、富岡本、院ニ、一本、一條院ニ作ル、こ一条（にイアリ）しろしめしてつくらせ給へりしところなり、されと院（はイ）の女御はしりたまはし、さやうにそ大宮（大皇太后藤原彰子）なとこゝろよせきこえさせ（イナシ）たまふ

頼定ト顯光トノ不和

やうにそきゝはへりしかは、よの人大宮の御心よせをそわつらはしけにまうすめりし、源宰相（頼定）をもいと事のほかにおもひきこえさせ給へき人かは、故式部卿（爲平）の宮（のイアリ）いみしき物におほしたりしうちにも、たゝいまの關白殿（のイナシ）のあまうへ（のイナシ）（尼上、關白ノシウトメナリ、爲平女、頼定妹、頼通）も御（もイナシ）いもうとにおはしませは、いとおほえありてこそはおはすめれ、なのめにてもありぬへかりし御ことゝもの、あまりけさやかにてありしほとに、かくこの御中もあるなめり（めイナシ）、院の御ありさまもことのほかにならせ給へるを、たゝなるよりはうれしうおほしめさ（すイ）るへかめるも、人の御はらからこそ、こゝろうき物はあれとそ、よ人きこゆめりし、○中略、同上、ほりかはの女御とのは、たゝいつまてくさのとのみあはれに物（イナシ）をおほしてあかしくらし給、院もをろかならすおほしきこえさせ給事も、しはしこそあれ、おとこの御心、やう〳〵月ひころへたゝりゆくまゝには、うとくこそなりまさらせ給へ、（はイアリ）いまはいかゝとのみみえさせ給を、左大臣殿（顯光）もたゝいみしきことにおほしいりたるのみそ、このよはさるものにて、のちのよ（イナシ）の御ありさまもこゝろくるしう、われによりみをいたつらになさせ給は、いみしくいとをしくおほさる、宮たちをよすけもておはしま（する）すまゝに、院（小一条院）のちかくおはしまさぬを、いみしうおほしこくしたる御けしき（まイ）とも、かなしくおほしみたてまつらせ給、○富岡本ヲ以テ校ス、

堀河第傳領ノ爭論

堀河第ハ燒亡後一條天皇ノ平維衡ノ造營ヲ給ヒシ所ノ券文ニハ同第ノ顯光ノ延子ニ與ヘタレハ今ハ小一條院ニ歸ス

〔榮花物語〕十六　○梅澤義一氏所藏三條西本　○上略、源頼定薨ズルコトニカヽル、四年六月十一日ノ條ニ收ム、御ほうしなとせさせ給ふに、とのをは（はイ）しまして、このとのをは、○頼定、堀河第ニ歸ルコト、四年六月十一日ノ條ニ見ニ、院の宮（堀河第）（顯光）たちおはしますに、まか〳〵しくあへい事にもあらすと、おは（御齒）○おは、一本、にもふれさせ給はねは、女御（元子）の御めのとこのしちせいそうつのいゑにてそせさせたまひける、とのあさましくをいほけたまひて、この女御（元子）の御あたりのことを、あやにくにおほしの給へは、このほりかはのゐんの御ことをは、いまにろむせさせ給ける、これはやけたりしかは、故一条院（小一条院）のこれひらしてつくらせ給へりしほりかはのゐんなれは、女御はわれ領すへしとおほしたれと、おとゝのけん（券）をはこの女御（のイナシ）にたてまつり給てけれは、ゐんにそさふらふなる、この女御（元子）の御かたには、大宮そ御心よせをはしまして、この女御（延子）のえたま（みイ）はんことこそ理ならめとの給はすれは、おとゝ、このことをえすか〳〵しうおほしさためぬなるへし、○富岡本ヲ以テ校ス、

〔和歌色葉集〕上　六、名譽歌仙者

集・打聞に入たる歌よみはおほかれと、むねとおほえたかきは四百五十七人也、○中略

貴女二十人

歌什

○中略
後拾
堀河女御　元子、左大臣顯光女、小一條院女御、母天暦御女、威子内親王、

〔勅撰作者部類〕女部

堀川女御　左大臣顯光女、後拾遺集雑三、二、續古今集戀五、一、

〔萬代和歌集作者部類〕堀河女御　戀五三、

○延子、敦明親王ト婚シテ、第一王子敦貞ヲ生ムコト、長和三年十月六日ノ條ニ、王女名闕ヲ生ムコト、同四年十二月十一日ノ第二條ニ、敦明親王、立太子ニ際シテ、年來ノ御在所堀河第ノ延子ノ許ヨリ、御母皇后藤原娍子ノ御在所ニ遷リ給フコト、同五年正月二十九日ノ條ニ、延子、敦明親王ノ遜位ニ依リ、御所ノ炬舍等ヲ撤去スルヲ見テ、歎キテ歌ヲ詠ムコト、寛仁元年八月九日ノ第一條ニ、小一條院ノ藤原寛子ト婚シ給フヲ悲ミテ歌ヲ詠ムコト及ビ藤原顯光、延子ノ髪ヲ切リ、幣ヲ捧ゲテ呪詛スルコト、同年十一月二十二日ノ第二條ニ、藤原道長ノ病ハ延子ノ呪詛ニ依ルトノ風評アルコト、同二年六月二十日ノ第二條ニ、小一條院妃寛子、故延子ノ怨靈ニ惱マサルヽコト、萬壽二年三月二十五日ノ條及ビ同年七月九日ノ條ニ見ユ、

十三日、庚子、吉田祭、

〔日本紀略〕後一條院　四月

十三日、庚子、吉田祭、

十七日、甲辰、小除目、齋院次官ヲ任ズ、

〔日本紀略〕後一條院　四月

十七日、甲辰、公卿參入、被行小除目之間、○下略、大宰府ノ飛驛使入京スルコトニカヽル、本日ノ第二條ニ收ム、

〔小右記〕○前田家本　四月

十七日、甲辰、○中略

（藤原資平）宰相來、即參內、入夜歸來云、參入道殿（藤原道長）、次參內、有齋院司除目、次官、中納言行成（藤原）承行云々、○齋院御禊ノコト、本月十九日ノ條ニ見ユ、

上卿藤原行成

備前介

〔公卿補任〕長元七年　七

參議從三位同（源）隆國、年、三年四月日（寛仁）兼備前介、

大宰府ノ飛驛使入京シテ、女眞賊ノ、對馬及ビ壹岐ヲ劫略シテ、筑前ニ來寇スル由ヲ言上ス、仍リテ、明日、陣定ヲ行ヒ、大宰府ニ勅符ヲ下シ、又、諸道ヲシテ、要害ヲ警固セシメ、幷ニ諸社寺ヲシテ、

飛驛使七日及ビ八日付ノ大宰權帥藤原隆家ノ私信ヲモ齎ス賊船五十餘艘筑前能古島ニ來襲ス

大宰府解壹岐守藤原理忠殺害セラル藤原公季以下陣定ヲ行フテ公季藤原實資ニ定ノ委細ヲ示スヲ府解作ザル飛驛ノ式ハヲ失ス

祈禱セシムルコト等ヲ議定ス、

〔小右記〕○前田家本　四月

十七日、甲辰、○中略

戌剋許、惟円師持來帥(藤原隆家)中納言書、只一行、今月七日書云、刀伊國者五十餘艘來著對馬嶋、殺人放火、警固要害、差遣兵船、府飛驛言上者、惟円歸去、不幾重來云、八日送内房帥(源兼資女)書、○藤原隆家ノ室入京スルコト、二年十二月六日ノ條ニ見ユ、同飛驛持來云、件異國船來著乃古嶋、去大宰府警固咫尺云々者、十八日、乙巳、早朝召使來云、巳剋以前可參入者、日來勞腰病、相扶宜者可參入由、仰召使了、宰相來云、(藤原資平)依忌日不可參者、(資平實父藤原懐平忌日)雖忌日、有指召可參入歟、去夜飛驛解文事、侍從中納言(藤原)行成卿行之云々、宰相問遣大宰府解文案内、行成卿返報書云、府解文云、刀伊國擊對馬・壹岐等嶋、對馬守遠晴參府申事由、壹岐守理忠(藤原)被敘害、又筑前國乃古嶋、警固近々所云々、示彼賊多來不可敵對、其迅如隼云々、帥率軍到警固可合戰云々、參入道殿(藤原道長)、即拾謁(給カ)、被談大宰府言上刀伊國兵船事、次參内、右大臣(藤原公季)・大納言齊信(藤原)・公任(藤原)・中納言行成(藤原)・頼宗(藤原)・實成(藤原)・參議道方(源)・公信(藤原)・通任(藤原)等先參入、刀伊國事於壁後問行成卿、事定已了者、余著陣座、大臣給府解二枚、今月七日・八日解文等、對馬守遠晴申狀、壹岐守理忠被敘事、彼嶋講師常覺脫來、以理忠郎等ム丸申旨所申也、刀伊國船五十餘艘、其迅如隼云々、從海陸人々就者責者、飛驛云、刀伊國者二人被射敘者、定申、又云、件府解注官裁、可作奏狀也、非飛驛申狀如何、余答云、諸卿僉議如何、大臣云、

函上ニ飛驛ト注シテ勅符ヲ給フベシ

官符ヲ山陽山陰諸道南海ノ警固セヲシテ下シ符ヲ山陽・南海ノ道ニ依リ北陸道ニ加フ

飛驛使返ヲ遣ハスベキ馬ヲ給フベキ式ヲ檢ス

奏上ラザルヲ由ヲ載スル飛驛使二人ニ給ヲ

飛驛ノ相次イデ到ラザルヲ怪ムル

飛驛使乘馬ノマヽ左衛門陣ニ馳入ル

警固要害、可加追討、有勤之者可加賞事、府解注官裁、須給官符、然而非勅符遲到歟、函上注飛驛、猶可給勅符、但官符文可注違例由、又可賞事尋前例□(可カ)載勅符、仍可載官符可被行種々内外御禱、ム(仏カ)事、山陰・山陽・南海道等、可警固要害事等定申了、余云、此外又不可申、但可警固事同可給北陸道歟、大臣諾、仰左大辨道方、大臣引見寛平外記日記云、有警固北陸・山陰・山陽・南海等道要害、○寛平六年四月十四日ノ條參看、叶余定申者、又云、飛驛若可給寮馬乎、答不覺由、被問外記、無所見者、諸卿云、雖慥無所覺召可給歟、推而所量也者、未被行勅符事之前、稱所勞退出、彼日(後カ)見飛驛式、被發遣時給寮馬、返遣之時無所見、准發遣例可給歟、

後聞、可加賞事、非奏狀事、猶被載勅符者、少納言信通(藤原)所談、或云、賞事不可被募云々、

飛驛二人給寮馬云々、

廿日、丁未、帥納言使公政今日歸者、仍殊□行(以カ)(マヽ)召召遣、面示刀伊國事、飛驛不重來、人々傾憤、

〔日本紀略〕後一條院　四月

十七日、甲辰、公卿參入、被行小除目之間、○本日ノ第一條參看、大宰府飛驛使乘馬馳入左衛門陣、

是刀伊國賊徒五十餘艘起來、虜壹岐島、殺害守藤原理忠、并虜掠人民、來筑前國怡土郡者、

十八日、乙巳、(藤原頼通)摂政以下定申飛驛事、仍賜大宰府勅符、并五箇條、警固要害、防禦凶賊、

祈禱佛神、可守當境之由也、○大鏡裏書異事ナシ、

〔扶桑略記〕二十八後一條天皇　四月

新羅ノ刀伊

八日、太宰府飛驛言上新羅刀伊賊來侵邊境之狀、

十八日、公卿定申賜勅符於山陽道諸國、警固要害、祈禱佛神、

〔諸道勘文〕四十五彗星上

勘申彗星年々事

○中略

寛仁二年六月十九日、彗星見、(經數日長二丈餘、○二年六月十九日ノ條參看、)

○中略

(寛仁三年)同年四月八日、刀伊賊徒來侵由、太宰府言上、

○中略

右依仰、大略勘申如件、

彗星出現ハ來寇ノ前兆

大外記中原朝臣師遠

(寛仁元年)長治三年三月四日

〔百練抄〕四後一條天皇　四月十八日、諸卿定申大宰府言上新羅賊侵邊境之狀、

〔應德元年皇代記〕後一條　四月十六日、太宰府飛驛到來、刀□(伊)賊徒起來、殺害壹岐嶋司理忠云々、

○女眞賊ノ來寇ニ依リテ、大神宮以下ノ十社ニ奉幣スルコト、本月二十一日ノ條ニ、

大宰府ノ言上シタル女眞賊擊攘ノ狀ヲ議シ、官符ヲ同府ニ下シテ、警固セシムルコト、同月二十七日ノ條ニ、賊寇ノコト等ニ依リテ、臨時仁王會ヲ行フコト、五月二十六日ノ條ニ、追討ノ勲功者ヲ賞シ、女眞賊并ニ高麗人ヲ勘問スベキ由ヲ定ムルコト、六月二十九日ノ條ニ、大宰府、對馬判官代長岑諸近ガ高麗ニ渡リ、女眞賊ニ捕ヘラレタル女十人ヲ率キテ歸來スル由ヲ申スコト、七月十三日ノ第二條ニ、大宰府、高麗ノ虜人送使鄭子良等ノ對馬ニ來ルコトヲ奏スルニ依リテ、之ヲ召問スベキ由ヲ定ムルコト、九月二十二日ノ第一條ニ、大宰府ヲシテ、高麗國ニ牒シテ、鄭子良等ヲ送還セシムルコト、四年二月十六日ノ條ニ、南蠻賊徒、薩摩ニ來リテ、人民ヲ虜掠スルコト、同年閏十二月二十九日ノ條ニ見ユ、

刀伊ノ語義

〔參考〕

〔歴代鎮西志〕六王代志　第六十八代後一條院○中略

(寛仁)三年己未夏四月、新羅賊船五十餘艘來侵壹岐嶋、害島守藤原理忠、宰府官軍渡彼島討賊、不日成之、

〔天正中年代記〕○螢蠅抄二所載　寛仁三己未、新羅軍兵對馬マテ來、賊船四十八艘、

〔訓蒙字會〕中人類

夷 㐫이 東番、或汎稱一狄、

戎 㐫융 又戎狄汎稱、

蠻 㐫만 南番、蛇種、

狄 㐫뎍 北番、犬種、總稱達子、

羌 㐫강 西番、羊種、字从羊、

虜 㐫로 夷狄戎一、外番總稱、

〔大日本史〕二百四十一諸蕃十女眞　列傳一百六十八

女眞居肅愼故地、東瀕海、南接高麗、初役屬渤海、仍稱黑水靺鞨、及契丹滅渤海、遂附契丹、改號女眞、其籍于契丹者、稱熟女眞、不在契丹籍者、稱生女眞、其地有混同江・長白山、生女眞酋居完顏部、爲完顏氏、其始祖曰函普、函普玄孫石魯、稍以條教爲治、由是寖强、耀武諸部、所至克捷、金史、女眞世通使於宋、至是與契丹戰數克之、文獻通考、俗善射、箭長尺餘、能洞楯、且殺人、其臨戰、每人持楯、戈矛居前、次刀、次弓矢、○文獻通考亦云、用兵以戈爲前行、號硬軍、刀棓自副、弓矢在後、女眞陣法與本書合、附以備考、○本月二十七日ノ條參看、其船長十餘尋、每船設檝三四十、所乘五六十人、上陸則二三十人奮刄奔騰、操弓矢負楯者七八十人從其後、所在殺老弱、驅壯丁、掠資糧、跋涉山野、疾如飛隼、武備志云、女眞喜馳獵、上下巖壁如飛、亦與本書合、但怕鳴鏑、

〔天朝光被盛典〕八後一條天皇　寛仁三年己未三月下旬、○按下旬蓋二十六七日間也、刀伊賊○刀伊卽女眞、說見〔下カ〕上、乘戰艦五十餘艘、來寇對馬嶋、○中略　其陣法賊皆持楯、前者持鉾、次者持大刀、又次者持弓、○按群載云、持刀者二三十人、躍刄奔騰、帶弓矢負楯者七八十人、每隊皆同、箭長尺餘、射力甚强、能穿楯中人、小右記、○按刀伊爲女眞、有二證、陣法與文獻通考所載女眞同、詳見下、是一證也、○中略　九月、高麗遣使○中略　曰、本國(高麗)擧兵征刀伊、奪二島之民、以護送之、大鏡、太宰府召使人暫留之、以乞朝裁、時太宰府解文稱刀伊者、高麗國書皆爲女眞、朝廷疑之、發官符、問賊名異同之由於大宰府、○本書有勅問、而大宰府再奏、諸書無所見、故今其由不可考、○按太宰府解文稱刀夷者、高麗國書爲女眞、是刀夷爲女眞之第二證也、○中略

小右記所載ノ刀伊ノ陣法等文獻通考等ノ女眞ノ記載ニ合致ス

岡崎正忠ノ考證　刀伊ハ女眞タルノ第一證

第二證

寛仁三年四月十七日

（岡崎）正忠曰、寛仁夷賊之禍、事起於倉卒、兵士不聚、謀略不調、譬如以螗蜋之斧禦隆車之隊、特百年以降、藤氏專權、輔佐幼主、號令天下、上而大人君子闇治道淫佛法、下而村長民豪背勅命施私恩、海內殆有分裂之勢、彤管記權門之榮、關東報總國之叛、（道）赤染衛門著榮花物語四十卷、記賴長奢侈之事、長元二年、前上總介平忠常謀反、官軍討之、外禍內患、一旦迭發、乾綱解紐、人心洶々、雖然紳縉君子尙能奮然、以邦家爲己任、攝弓而馳、荷兵而進、流汗相屬、唯恐居後、是豈樂死惡生而然哉、上以維持人心、崇重皇道之道未盡墜地之故也、御製一章實可以振起人臣之怠惰、況又廷臣海防之規模、宰府一擧之妙略、理忠之戰死、（文室）忠光之義烈、皆足杜外夷窺覦之意、是以、彼有席卷唐山之勢、而未能取勝于我中國、高麗雖爲彼先導、又懼後患而致護送之誠、比之古昔盛時、雖當時失得有可議者、然亦非後世之所能及也、及至後世、教化凌夷、風俗頹敗、肉食君子懵于維持人心崇重皇道之道、而常居殿宇之深、列鼎而食、累茵而眠、無知天下之形勢、不解兵略之妙用、以爲天下萬世無兵革之患矣、一朝有抱鼓之警、則縮頸旋踵、不血刄、不張弦、棄器械、懷寶貨、東奔西走、彈丸之地不能保焉、可謂人情短薄極矣、易曰、窮則變、々則通、有天下之大任者、不可深謀遠慮以不講中興之道也、

刀伊ハ東夷ノ誤聞カト ノ說

第三證

女眞國ノ位置

物產

黃頭女眞

〔天朝光被盛典〕八 刀伊風土記　刀伊北方一大國也、自稱曰女眞、古謂之肅愼、後又稱靺鞨、○今按、刀伊國不知在何地方、古今史書亦不載之、唯其陣法與女眞同、且寬弘・長和・寬仁之間、女眞與高麗親睦尤厚矣、且高麗表文爲女眞、則其爲女眞、確不可疑矣、何以謂之刀伊、按刀夷・東夷音相似、且大鏡作刀夷、蓋高麗目彼爲東夷、而大宰府倉卒之間、聞之、以爲國名者也、朝廷疑之、再問之、而宰府再答無所見、今不可考、○中略　天祿三年圓融天皇、始寇宋國白沙塞、掠略人馬、不久而返其人馬、又別遣使贈馬、時鐵利王子附其使、贈馬・布・膃肭臍・紫青貂鼠皮於宋、○下略

（頭書）○初略之又送之、與寛仁之時、始末相似、定彼欲以之而察其强弱也、是亦女眞爲刀伊之第三證也、

〔契丹國志〕二十六 諸蕃記　女眞國

女眞世居混同江之東山、乃鴨淥水之源、東瀕海、南鄰高麗、西接渤海、北近室韋、其地乃肅愼故區也、地方數千里、戶口十餘萬、無大君長、立首領、分主部落、地饒山林、田宜麻穀、土產人參・蜜蠟・北珠・生金・細布・松實・白附子、禽有鷹・鸇・海東青之類、獸多牛・馬・麋鹿・野狗・白彘・青鼠・貂鼠、後爲契丹所制、擇其首領世襲、又於長春路置東北統軍司、黃龍府置兵馬都部署司、咸州置詳穩司、分隸之、

黃頭女眞

熟女眞

黃頭女眞皆山居、號合蘇館女眞、合蘇館河西亦有之、有八館、抵黃河東與金粟城・五花城、隔河相近、其人戇撲勇鷙、不能別死生、契丹每出戰、皆被以重札令前驅、髭髮皆黃、目睛多綠、亦黃而白多、

〔契丹國志〕二十二　四至鄰國地里遠近○中略

次東南至五節度熟女眞部族、共一萬餘戶、皆雜處山林、尤精弋獵、有屋居舍門、皆於山牆下闢之、耕鑿與渤海人同、無出租稅、或遇北主征伐、各量戶下差充兵馬、兵回各逐便歸於本處、所產人參・白附子・天南星・茯苓・松子・猪苓・白布等物、竝係契丹樞密院所管、差契丹或渤海人、充節度管押、其地南北七百餘里、東西四百餘里、西北至東京五百餘里、

又次東南至熟女眞國、不屬契丹所管、其地東西八百餘里、南北一千餘里、居民皆雜處山林、耕養屋宇與五節度熟女眞同、然無君長、首領統押、精於騎射、今古以來、無有盜賊詞訟之事、任意遷徙、多者百家、少者兩三家而已、不與契丹爭戰、或居民等自意相率、賣以金・帛布・黃蠟・天南星・人參・白附子・松子・蜜等諸物、入貢北番、或只於邊上買賣訖、却歸本國、契丹國商賈人等就入其國買賣、亦無所碍、契丹亦不以爲防備、西至東京二百餘里、

生女眞

東北至生女眞國、西南至熟女眞國界、東至新羅國、東北不知其極、居民屋宇・耕養〔鑿イ〕・言語・衣裝與熟女眞國竝同、亦無君長所管、精於騎射、前後屢與契丹爲邊患、契丹亦設防備、南北二千餘里、沿邊創築城堡、搬運糧草、差撥兵甲屯守征討、三十年來深爲患耳、西南至東京六百里、

〔高麗史〕三穆宗世家三　乙巳（寛弘二年）八年、春正月、東女眞寇登州、燒州鎭部落三十餘所、遣將禦之、○高麗史節要異事ナシ、

〔高麗史〕四顯宗一世家四　辛亥（寛弘八年）二年、○中略八月、○中略是月、○中略東女眞百餘艘寇慶州、

東女眞高麗ノ沿岸ニ寇ス

〔高麗史〕壬子（長和元年）三年、○中略五月己巳、東女眞寇清河・迎日・長鬐縣、遣都部署文演・姜民瞻・李仁澤・曹子奇、督州郡兵、擊走之、

東女眞于山國ニ寇ス

乙卯（長和四年）六年、○中略三月○中略己亥、○中略女眞以船二十艘寇狗頭浦、鎭溟道都部署擊敗之、

戊午（寛仁二年）九年、○中略十一月○中略丙寅、○中略以于山國被東北女眞所寇、廢農業、遣李元龜、賜農器、

己未（寛仁三年）十年、秋七月○中略己卯、于山國民戶曾被女眞虜掠、來奔者、悉令歸之、○高麗史節要異事ナシ、

〔高麗史〕八十二兵二　志三十六鎭戍　顯宗卽位、造戈船七十五艘、泊鎭溟口、以禦東北海賊、

能古島
今ノ殘島

古ヨリ早良郡ニ屬ストノ說
周圍二里餘

出車騎馬等ヲ定ム

○高麗史節要穆宗十二年三月ノ條同ジ、

〔太宰管内志〕上筑前之六　早良郡下　能巨島

延喜兵部式牛牧件、に、筑前國能巨島あり、能巨は乃古と訓へし、名義いまた考へす、今は殘ノ島と書くなり、里人の語傳に、神功皇后異國より歸給ふ時、此島に住吉ノ神靈を殘し留めて、異國降伏を祈給ふ、因て殘ノ島と云といへり、○中略　朝野群載廿卷、寛仁三年三月、刀伊國賊襲來件に、同八日、移來同國那珂郡能古島、○中略　なとあり、○中略　貝原翁(益軒)云、能巨島、朝野群載には那珂郡とし、藻鹽草には志摩郡とあれと、何も違へり、此島は早良郡正北にあり、那珂郡にも志摩郡にも道隔りて、古より早良郡に屬けり、島ノ周廻二里餘にして、山に薄多し、島民是を販て產とす、

十九日、丙午、齋院選子内親王御禊、

〔小右記〕○前田家本　四月

一日、戊子、左中辨經通(藤原)持來宣旨　○本月二十二日ノ條參看、　幷齋院禊□□(祭料カ)進未勘文、子細在目錄、

五日、壬辰、○中略

參入道殿(藤原道長)、○中略、藤原道長、病ムコトニカカル、三月二十一日ノ條ニ收ム、　蹔之參齋院、左中辨經通乘余車(藤原實資)後、於客殿定出車・出馬事等、史奉親朝臣(但波)祗候、院司等同候、令仰禊祭事等、左少將誠任(藤原)・少納言基(藤原)

粉熟

行事藤原資平

藤原隆家ノ子同經輔ノ御禊前驅ノ具ヲ調ヘテ京ニ送ル

禊祭文等ヲ奏ス

齋院長官禊祭料未進ニヨリ走孺ノ狩袴等ヲ調フル能ハズト申ス

房(原)爲垣下、院羞粉熟等、晩頭退歸、

九日、丙申、大外記文義(小野)云、左大臣(藤原頼光)一昨可被定御禊前駈之由、兼有其戒、而俄被申犬產穢、仍被仰右大臣(藤原公季)、明日可被定申、亦可有他定者、

召使云、明日右大臣有可被定申之事、可參入者、稱所勞了、

十一日、戊戌、○中略　參議資平(藤原)禊祭日可參齋院事、以藏人範永(藤原)令奏、他參議皆勤其役、資平未勤、仍所令奏也、

十四日、辛丑、藏人範永來仰云、資平朝臣巡到者、可爲禊祭行事者、召外記國儀(高橋)、仰宰相可參齋院事、禊祭日、○中略　惟円來傳帥(藤原隆家)室消息、是子兵衞佐(藤原經輔)御禊前駈間事也、帥調送万物、去夕到著者、

十七日、甲辰、左中辨持來陰陽寮勘申禊祭文等、點地文一枚、禊祭兩日御出日時文各一枚、見了示可奏之由了、

十九日、丙午、未剋許參齋院、宰相々從參入、宰相著殿上人座上首、行事辨經通(藤原)著同座、外記・史著南座、令召院司、良久長官光清(源カ)朝臣參入、依禊祭祈未究進、院事難成、走孺等狩袴未調、又下仕裳少々不足者、又申云、下仕裳不足、以舊裳令著如何、又走孺狩袴用舊如何者、令仰云、事已臨御出期、不可事闕之樣、可計行之由、令召仰也、行事辨朝

御禊ノ當日ニ至リテ之ヲ申スコト不當

臣云、先日進禊祭未進勘文、其後不申左右、已知究進由、已臨當日申此由、不可然者、

前驅等座ニ著カズ

先見肥牛等、臨申剋見下社走孺等、義通(橘)朝臣勸盃、以余盃不可擬宰相資平、仍更余授義通、々々擬宰相、衛府前駈・次第使等不著座、只藏人所陪從二人著座、自餘皆稱故障、候院外者、申剋寄御車、余於一条院北邊見物、宰相乘車尻、日未入之間、齋王(選子内親王)渡給、計也(潤)東院東大路間日入歟、右兵衛佐經輔牛童狩衣縫目押銀薄、檢非違使等出自齋院之次、以看督長令召搦、牛童遁走入人宅、卽經輔朝臣騎馬宅也、看督長追捕之間、左衛門尉(藤原)爲親出逢、仰不可捕之由、看督長搦爲親從者將來、使官人卽禁固、看督長爲爲親從者被引斷衣袖、又被損負靱云々、懐信(源)朝臣云、騎馬所人々到會、而爲親亦前駈、仍騎馬、不會看督長、太無實事也者、祭後廿四日、問爲親從者、依爲親申所爲也者、是左衛門府生良信所申也、

檢非違使輔經ノ牛童ノ差ヲ咎メ捕ヘンスト

前驅藤原章信ノ同道長ノ馬ニ乘ルノ舍人等ノ章信ノ被物ヲ少シテ罵辱スト

廿三日、庚戌、○中略、賀茂祭使等、藤原道長ニ馬ヲ借リテ、舍人ニ多ク祿ヲ給フコトニカヽル、本月二十二日ノ條ニ收ム、

御禊前駈右衛門權佐章信(藤原)乘大殿(道長)御馬、給舍人絹十疋・被物等、陳乏少由、罵辱無極、居飼手作布五端云々、

日本紀略　後一條院　四月

前驅

次第使

十九日、丙午、齋院禊也、今日右兵衛佐經輔牛童著過差裝束、檢非違使以看督長召搦之間、左衛門尉爲親從者打奪件童、官人等捕搦爲親從者了、

江次第　六月御禊前駈定

賀茂齋內親王禊日前駈

左衛門佐藤原朝臣惟忠

右衛門權佐藤原朝臣章信

左兵衛佐藤原朝臣惟任

右兵衛佐藤原朝臣經輔

左衛門權大尉藤原朝臣爲親

右衛門權少尉源朝臣孝重

左兵衛權少尉藤原敎任

右兵衛權少尉藤原賴業

次第使

右馬權助源朝臣賴職

左馬權少允橘季任

寛仁三年四月十日

○齋院次官ヲ任ズルコト、本月十七日ノ第一條ニ、賀茂祭ノコト、同月二十二日ノ條ニ見ユ、

上卿藤原公任　攝政藤原頼通賀茂詣ヲ延引ス

藤原實資小野美材自筆ノ宣命草ヲ得テ藤原道長等ニ覽ズ　美材ノ文華拔群ノ由ハ菅家集ニ見ユ

二十一日、戊申、女眞賊ノ來寇ニ依リテ、大神宮以下ノ十社ニ奉幣ス、

〔小右記〕○前田家本　四月

廿一日、戊申、依異國凶賊著鎮西之事、被立諸社御幣使、大納言公任（藤原）卿行之、攝政（藤原頼通）今日可被參賀茂、而依公家奉幣延引云々、○攝政藤原頼通、賀茂社ニ詣スルコト、八月二十日ノ條ニ見ユ、宰相（藤原資平）來云、今日奉幣使宰相申故障、可參仕之由、藏人右少辨資業（藤原）朝臣奉攝錄（籙）命送書狀、即經營參入、從内示送云、左大辨（源道方）參入、仍可兼勤松尾・平野使、

黄昏宰相來云、午剋被立奉幣使、依有任（妊）者不入垣中、以次官頼（源）重朝臣令宣（讀脱カ）命者、

廿四日、辛亥、寛平六年新羅凶賊時宣命、野美（小野）材自筆草、○寛平六年九月三日ノ條參看、慮外尋得、今般無指御祈、太以懈怠、仍宣命送源大納（後賢）言許、爲令覽兩殿、入道（藤原道長）攝政、書寫送四條大納（藤原公任）言、爲令見宣命趣之太優、報云、美材文華拔群者也、見菅家集者、

十社

出御ノ日時ヲ勘申ス

〔日本紀略〕後一條院　四月

廿一日、戊申、奉幣伊勢大神宮以下十社、依刀伊國賊徒事也、（伊勢）伊・（石清水）石・（賀茂）賀・（松尾）松・（平野）平・（稲荷）稲・（春日）春・（大原野）原・（大神）神・（住吉）住、○大鏡裏書、同ジ、

○大宰府、女眞賊ノ來寇ヲ言上スルニ依リテ、諸社寺ヲシテ祈禱セシムルコト等ヲ議定スルコト、本月十七日ノ第二條ニ、官符ヲ大宰府ニ下シテ、賊ヲ防禦セシムルコト、同月二十七日ノ條ニ見ユ、

二十二日、己酉、賀茂祭、

〔小右記〕○前田家本　三月

廿六日、癸未、藏人式部丞範永（藤原）持來賀茂祭使女官用途申文幷祭間宣旨等、有所勞不相逢、以人傳給、有無例之文、大略令示了、

廿七日、甲申、左中辨（藤原經通）來、乍（下カ）昨日宣旨等、

四月

一日、戊子、左中辨經通持來宣旨幷齋院禊□□（祭料カ）進未勘文、子細在目錄、

十七日、甲辰、左中辨持來陰陽寮勘申禊祭文等、點地文一枚、禊祭兩日御出日時文各一枚、見了、示可奏之由

了、

廿日、丁未、○中略臨昏宰相(藤原資平)來云、參入道殿(藤原道長)、左大將(藤原教通)云、坐狹敷可被見物者、或云、美乃守泰通(藤原)奉仕饗事云々、

祭使源顯基

廿二日、己酉、摺袴送源大納言(後賢)御許、息左少將顯基(源)今日祭使也、宰相來云、罷祭使所、

一條院別納ヨリ出立ツ

一條院別納、從彼可參院(齋院)者、余未剋(藤原實資)參院、先示遣事由於宰相許、左近府生久友於途中傳申源大納言消息云、藥袋十二忽可借送者、差副人於久友、仰遣師重許、宰相從上東門相從參院、宰相云、源大納言思忘、不儲手振藥袋、又不具魚袋、仍忽取遣也、古實云、近衛府使或著餝劔、代、何況魚袋乎、今日饗院所設、師經朝臣(藤原)四位、勸盃、余目左少將誠任(藤原)、々々來擬盃、宰相・左中辨等雖在座、依無便擬誠任、師經・誠任等依饗事爲垣下在座、令催院事、長官光清(源カ)申云、事漸成了者、見餝馬・童女馬、々々今一疋未將來、是帥宮(敦平親王)可被出之馬也、重令催仰也、□漸及申剋、又有陰氣、仍起座、進御所、令寄御輿、而騎馬女十二人、髮未理髮、申云、借奉女等遲參來也、仍不能早上髮者、分手令上髮、時剋推移、僅上了、以院司經案內、御衣未縫出、又童女汗衫未縫了者、此間良久停立、院司申云、帥宮出馬被申不堪者、仰院司相構可奉之由、申無術由、童女一人不供奉、依無馬也、時剋多移、乘給御輿、余於一條院北邊見物、宰相乘車尻、未及昏黑、御後供奉者渡了、歸家之後小時秉燭、

敦平親王ノ出馬ヲ督促ス

理髮裁縫等終ラザルニ依リ渡御遲延ス

敦平親王出馬ヲ辭ス

童女一人ノ供奉ヲ停ム

實資ノ見物

廿三日、庚戌、今年大殿(道長)御馬舍人祿、二位宰相子中宮亮(藤原兼隆)(使脫カ)兼房、給絹十五疋・被物云々、皇大后宮(太)使亮濟政(源)・東宮使學士廣業(藤原)(敦良親王)(藤原妍子)卅石・被物等云々、人之狂亂、世之衰亡、或居飼祿絹二疋、或手作布五端、加被物云々、奇怪々々、不可陳盡、○下略、御禊前驅藤原章信、被物少シトシテ舍人ニ罵辱セラル、コトニカ、ル、本月十九日ノ條ニ收ム、

皇太后宮使源濟政東宮使藤原廣業ノ過差極リ無シ

〔日本紀略〕後一條院　四月

廿日、丁未、警固、

廿二日、乙酉(己)、賀茂祭、

廿三日、庚戌、解陣、

警固

解陣

○齋院選子內親王御禊ノコト、本月十九日ノ條ニ見ユ、

二十七日、甲寅、是ヨリ先、大宰府、重ネテ飛驛シテ、女眞賊擊攘ノ旨ヲ報ズ、是日、公卿ヲシテ、其ノ狀ヲ議セシメ、尋デ、同府ニ官符ヲ下シテ、防護ニ努メシム、云、

〔朝野群載〕二十 異國

擊攻〔取カ〕刀伊國賊徒狀

大宰府解　申請官裁事

言上刀伊國賊徒或擊取或逃却狀

右、件賊船五十餘艘、來著對馬島、劫略之由、彼島去月廿八日解狀、今月七日到來、即載在狀言上先了、〇本月十七日ノ第二條參看、且整舟船、且興軍兵、警固要害所々、然間壹岐島講師常覺、同七日申時參來申云、合戰之間、島司及島內人民、皆被殺略、常覺獨逃脫者、同日襲來筑前國怡土郡、經志摩・早良等郡、奪人物、燒民宅、其賊徒之船、或長十二箇尋、或八九尋、一船之檝三四十許、所乘五六十人、二三十人耀刄奔騰、次帶弓矢、負楯者七八十人許相從、如此一二十隊、登山絕野、斬食馬牛、又屠犬肉、叟嫗兒童、皆悉斬殺、男女怯〔壯イ〕者、追取載船四五百人、又所々運取穀米之類、不知其數云々、事出慮外、要害地廣、雖召人兵、來未多、雖整舟船、勢未□〔ホイ〕、雖然與所差遣兵士、并彼郡住人文室忠光等、合戰之場、賊徒中矢者數十人、或扶以載船、其中追所斬首數輩、兵士等中矢十餘人、同八日、移來同國那珂郡能古島、重錄在狀言上又了、但彼郡人民、或迷鬪戰、或爲賊虜、

十六日付ノ大宰府解

三月二十八日付ノ對馬島解　壹岐島講師常覺僅ニ逃レテ賊寇ヲ報ズ

四月七日筑前怡土郡ニ襲來ス　賊船ノ形狀

賊馬牛犬ヲ屠食ス　悉ク老幼ヲ斬ヘ男女ヲ捕ヘ壯年ノ男ヲ穀米ヲ奪フ　府兵及ビ文室忠光等ヲ防戰ス

八日那珂郡能古島ヲ侵ス

飛驛言上之前、不申子細也、以前少監大藏朝臣種材・藤原朝臣明範・散位平朝臣爲賢・平朝臣爲忠・前監藤原助高・傔仗大藏光弘・藤原友近等、遣警固所、令相禦、同九日朝、賊船襲來、欲燒警固所、距劫〔却イ〕之間、奮呼合戰、其間中矢者十餘人、賊徒遂不能前戰、還著能古島、其後二箇日風猛波高、不能相攻、十一日未明、同國早良郡至志摩郡船越津、先是分遣精兵、豫令相待、同十二日酉時上陸、與大神守官〔宮〕・權撿非違使弘延〔財部〕等合戰、中矢之賊徒卌〔卅イ〕餘人、生得二人、其中一人被疵、一人女、少貳平朝臣致行・前監種材・大監藤原朝臣致孝・散位爲賢・同爲忠等、差加兵士、以船卅餘艘、令攻追、同十三日、賊徒至肥前國松浦郡、攻劫村閭、爰彼國前介源知、率郡內兵士合戰、中矢者數十人、生得者一人、賊船不能進攻、遂以歸、劫藤白兵船等攻戰云々、又差遣救兵四十餘艘了、但生虜者等、皆高麗人者、以通事令尋問之處、申云、高麗國爲禦刀伊賊、遣彼邊州、而還爲刀伊被獲也者、其疑難決、追賊之船還之後、搜實誠追可言上、又所擊獲首虜并戎具等、追將進上、且錄在狀、謹解、

寛仁三年四月十六日

三品帥親王〔敦平〕在京、

正六位上行大典上毛野朝臣師善

從五位下行大監菅原朝臣雅隆

太宰府官人ヲ警固所ニ派シテ防戰ス

十一日賊船志摩郡船越津ニ至ル

財部弘延等防戰擊退ス

大宰少貳平致行等兵船ヲ派シテ賊ヲ追フ　十三日賊船肥前松浦郡ヲ劫掠ス　肥前那珂郡前介源知善ヲ戰シテ之ヲ追擊ス

生虜ノ高麗人ハ刀伊ニ捕ヘラレシ者ト稱スル生虜ノ武具等ヲ追ツテ進上スベシ

正二位行中納言兼權師〔帥〕藤原朝臣隆家　大監正六位上大藏朝臣光順
正五位下行少貳兼筑前守源朝臣道濟　從五位下行少監豐島眞人靜風
從五位下行少貳藤原朝臣盛規〔親イ〕　正五位上行少監上毛野朝臣行蔭

捕ヘシ賊ヲ京ニ送ルト誤傳ノ藤原隆家ノ書狀

使者隼船ニ乘リテ參上ス戰鬪ノ狀況

賊ノ矢ハ長サ一尺餘ナレドモ楯ヲ貫通ス賊鏑矢ノ音ヲ恐レテ退ク

〔小右記〕○前田家本　四月

廿五日、壬子、早旦惟円來云、鎮西事已無音者、卽歸去後、不幾來云、從備中參上者申云、異國者厶人於壹岐嶋打得、其一人付兵士令參上者、先經言上可左右歟、直令參上如何、留山埼可進府解之由、指示了、（後聞、此事大虛言、更無令參上之者云々、近代只以虛爲宗、）酉時許、惟円持帥〔隆家〕書、（去十六日書、）示、異國人〔去カ〕來九日來著、合戰等子細在府解、又示可辭退哉否事、○藤原隆家、大宰權帥ヲ辭スルコト、十二月二十一日ノ條ニ見ユ、惟円云、使者乘隼船參上、但異國八日俄來著能古嶋、同九日亂登博多田、府兵忽然不能徵發、先平爲忠・同爲方等爲帥首、馳向合戰、異國軍多被射致、不留戰場、持入船中、又有弃置者、又有生虜者等、又奪取兵具・甲冑者、一船中有五六人〔十脫カ〕、合戰場每人持楯、前陣者持鉾、次陣持大刀、次陣弓箭者、箭長一尺餘計、射力太猛、穿楯中人、府軍被射致者、只下人也、爲將軍者不被射、乘馬馳向射取、只恐加不良〔鏑〕聲引退、（刀伊國人之中、有新羅國人等云々、）乘船遁去、傍岸棹船、府軍等依無兵船、不能追擊、從陸路馳行、刀人更下船、

賊宮崎宮ヲ燒カントス兵船數十ヲ急造シテ賊ヲ追フ隆家追擊ハ日本國境ニ止メ新羅ニ入ルベカラズト令ス

賊船ニ捕ヘラレタル二島人多クハ脫出シテ博多ニ遁ル

賊ノ風俗人ヲ食フ

藤原公季及ビ同實資ノ興福寺物忌

欲燒苞前宮、府兵射致前行兵一人、驚乘船逃遁、十日・十一日北風猛烈、不得還渡、逗留海中、神明所爲歟、兩日間、府令營造兵船卅八艘、令追襲、賊徒遁去、指本州漕去、府兵船又今廿餘艘乘勝逐之、又致行朝臣調十餘艘相逢、但先可到壹岐・對馬等嶋、限日本境可襲擊、不可入新羅境之由、都督〔隆家〕所誡仰也者、使者又云、如只今、似被討平也、賊徒甲冑・兵具等少々被奪取、又云、從陸路令捕進刀伊國者之由、十六日以前所不承也者、縱横說難信受而已、

後聞帥使說、壹岐・對馬嶋人等悉取載船、合戰之間、嶋人等叫云、馬を馳（かけ）射与（天）、おく病しにたり、仍官軍等馳進射、刀人遁走歸乘舟、此間被取載之二嶋者、多下從船、遁來博多田云、件刀人爲躰多食、又多飲水馳馬、以加不良射留仁、有恐怖氣者、又云、以兒爲荒卷、落置博多田津云々、食人云々、

廿六日、癸丑、今日山階寺〔興福寺〕物忌、左中辨經通〔藤原〕來云、大宰言上異國凶賊事解文、攝政〔藤原頼通〕可被奏之由、被聞右相府〔藤原公季〕、御返事云、物忌上、咳病發動、不能參入者、若被仰下官〔實資〕歟者、答云、右府・余同甲子、同物忌也、若有攝政命者可申此趣之由、相含訖、辨云、按察〔藤原齊信〕有所勞、若被示四條大納言〔藤原公任〕歟者、問遣案內、報云、明日可被定申之由、被聞右府了者、

解文ヲ定ム　内豎ヲ遣シテ特ニ藤原公任及ビ同實資ノ參内ヲ命ズ

參内ノ公卿少ク再ビ公任ヲ召ス

定ノ内容　賊徒ハ刀伊人ナルカ高麗人ナルカ決斷言上ヲ四王寺ニ修行フベシ

對馬守遠晴本島ニ還ヲ警備セシ壹岐ハ權ムベシ

廿七日、甲寅、○略中頭辨經通含攝政命來曰、太宰府解文事、飛驛解文、刀伊國凶賊追却事等、今日可定申者、申可參入由、又云、四條大納言公任、及下官、別差內豎、可必參由、令仰遣者、自餘仰大外記文義（小野）、可令申者、經通退去後、內豎來示可參由、令申只今參入由、又召使來告可參由、未剋許參入、宰相（藤原實資）乘車後、暫之左大辨（源）道方、參入、召外記順孝、問上達部參不、申云、大納言公任、・右衞門督（藤原）實成、雖有所勞、相扶宜者可參入也、自餘故障者、頭辨經通下給大宰解文云、可定申者、令申云、見參上達部數少、隨仰可定申、被仰云、重召遣大（公）納言、可定申者、召遣之間、大納言・右衞門督等參入、先是經通下給大宰解文云、可定申者、府解文云々、定申云、申刀伊國人、而獲得者三人、推訊之處、申云、高麗國爲禦刀伊賊、遣彼邊州、而還爲刀伊被獲也云々、數千人刀伊賊外、高麗人何必被捕乎、僞稱刀伊人歟、決斷府可言上歟、兵具・首虜不可令進、又四王寺御修法殊可被行、對馬嶋司遠晴早可遣本嶋、但差副事堪者、令勤防護、仰國々令運兵粮、催遣訪人（防カ）、又壹岐守理忠（藤原）被致害事、此度解文愜尋問可言上也、而無其事、可仰其由歟、事若有實、暫遣權攝使、可令警固歟、定申趣、以經通令申攝政、命云、任上達部定申、可給報符者、但兵粮糒可注進之由、可加載報符者、卽件事等仰經通、又下給府解、可載報符、晩景退出、

實資官符案ヲ檢シテ攝政ニ覽セシム

賴通命シテ農事ヲ勸ムベキ由ヲ加ヘシム

寛平五年ノ勅符

五月

一日、丁巳、○略中左中辨經通見給大宰之官符、有條々、每條有難、可改直之由、指示訖、

三日、己未、大宰報符草今朝見之、有改直事等、可覽攝政之由、相示左中辨了、

○略中

左中辨示送云、給大宰之官符、令覽攝政殿了、命云、太吉、但可入農業不可懈怠之由者、依無仰事、所不令作、件事要須事也、去寛平五年閏五月三日勅符云、追討新羅海賊事、當令（今カ）務在農要、勿令失時、且征且田良時（將カ）之術、勅到奉行、○寛平五年閏五月三日ノ條參看、

（裏書）「元慶二年四月廿八日勅符討滅出羽夷賊事、都良香作、

重得奏狀、具知凶類滋蔓、致略良民云々、今所上奏狀、極爲省略、胡城雲隔、魏闕天遙、路遠事疑、非可指問、必須事無巨細、委曲記錄、今可（令カ）知見、老弱在行、耕種廢務、早休染鍔之勞、當崇櫜弓之化、勅到奉行、

元慶二年ノ勅符

此勅書大優也、仍聊注付所々要句耳、」

四日、庚申、大宰府報符從左中辨許見送之、止奸猾襲來文、可改奸猾來侵之由、示遣了、

件官符今日請印云々、

官符請印

五月十日付ノ隆家ノ書狀　追擊ノ兵船對馬ニ向ヒテ未ダ歸ラズ　疫癘起ル全力ヲ兵備ニ注グ

廿四日、庚辰、〇中略帥納言消息書、今月十日書、今日到來云、追打刀伊賊之兵船未歸來、仍重不言上、歸來之後、可上府解、兵船等自壹岐向對馬了者、其後不聞案內、疫癘方發、無爲術、但止万事、令造兵船・戎具等、令勤行要害警固事、追打刀伊之官軍等、皆府無止武者等、而于今不歸來、太以欝歎者、

實資定ノ上卿ヲ勤ム

〔日本紀略〕後一條院　四月

廿七日、甲寅、大納言實資卿以下定申太宰府言上雜事等、給官符於太宰府、防禦刀伊賊、

〔大鏡〕四〇東松殿三氏本　一、內大臣道隆

〇上略この中納言隆家は、〇中略、隆家、大宰權帥ニ任ゼラルヽコトニカ、長和三年十一月七日ノ第二條ニ收ム、まつりことよくしたまふとて、筑紫人さなからしたかひ申たりけれは、例の大貳十人（マヽ）はかりかほとにて、のほりたまへりとこそ申しか、〇十二月二十一日ノ條參看、かのくにゝおはしましゝほと、刀夷（伊イ）國のもの、にはかにこの國をうちとらんとやおもひけん、こえきたりけるに、筑紫にはかねて用意もなく、大貳殿（隆家）ゆみやのもとするゑもしりたまはねは、いかゝとおほしけれと、やまとこゝろかしこくおはする人にて、筑後・肥前・肥後九國の人をおこしたまふをはさることに

九州ノ民隆家ニ信服ス

隆家兵事ニ慣ハザルモ外寇ヲ攘フヤまとこゝろ勝レタル人

て、府の內につかうまつる人をさへをしこりて、たゝかはせ給けれは、かやつかかたのものとも、いとおほくしにけるは、さはいへと、家たかくおはしますけに、いみしかりしことたひらけたまへる殿そかし、

名門ノ故ニ平定ノ功ヲ奏ス

〔大槐祕抄〕帥・大貳に武勇の人なりぬれは、かならす異國おこると申候けり、小野好古か大貳の時、隆家か帥の時、ともにと（行カ）異國の人おこりて候なり、

武勇ノ人

〇女眞賊ノ來寇ニ依リテ、大神宮以下ノ十社ニ奉幣スルコト、本月二十一日ノ條ニ、同ジク、臨時仁王會ヲ行フコト、五月二十六日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔菊池系圖〕〔藏規〕正則　對馬守、父隆家卿左遷時、於但州出生、成人後、隆家卿大宰權帥ト成下向ノ時、同心ニ下向、初武家ニ下リ、大宰府ニ居住、屋敷馬場宮高木ニアリ、後一條院御宇、寛仁三年四月、親父隆家帥時、異賊襲來時、政則若年ニシテ、著紫糸鎧・竹笠、乘白葦毛駒、打望博多、警固松原防戰、異賊大將討取之畢、依忠功、可爲九州之兵頭之由、被下宣旨、賜錦御旗、賜御歌、

菊池氏ノ祖正則ハ隆家ノ子トノ說

ツクシナル矢峯（笘カ）ノ嶽ノフモトニハタケキヲノコノ住トコソキケ

正則ノ防戰

伊豫三島社
ノ氏子近清
ノ防戰
舟越津ノ位
置

船越村

〔伊豫三島縁起〕

天神第六代面足尊・惶根尊末孫代々異國敵誅伐目錄

○上略　六十八代後一條院以降、寛仁三年己未、二月廿七日、新羅軍對島來、氏子近清彼軍誅、

〔太宰管内志〕上筑前之四　志摩郡　舟越津

朝野群載、廿卷、寛仁三年三月刀伊國賊入寇件に、十一日未明、同國早良郡至志摩郡船越津、云々とあり、船越は不那古之と訓へし、名義は船を引越す處なるに依て、負せたるなり、山の多和より、舟を引越すこと、古事記の内にも見えたり、さて和名抄に、志摩國英虞郡船越、筑後國竹野郡船越なともあり、引津の北につゝきて船越浦あり、貝原翁云、志摩郡なる久我・船越の兩村は、岐志村より南一里にありて、海中の洲なり、其西は山なり、洲の横二十間餘あり、洲の南北兩方は海なり、北は可也海、南ハ引津なり、いにしへ久家浦と船越の間をこきめくれは、みちとほき故に、洲上を南北たかひに引越けるによりて、引津といひ、船越といふ、さて志摩郡船越村あり、貝原翁云、志摩郡かやの入海は、芥屋村の西南野邊崎と云處と、船越山坤方の崎、鷺首と云處の間より東方、惣て一里餘あり、されとも岐志新町より西方野邊崎までの間は、海廣くして風景よろしからす、龍王社前と向の新町前なる迫門間七八町あり、是より東方へ海圓にして山廻れり、此圓なる海渡東西半里、南北も同しかるへし、此間風景よし、船越より新町方に浦傳に行廻る處、又面白し、又船越西北の海邊、龍王社前に大なる松あり、本方より地に伏て、過半より海水に漬せり、めつらしき木なり、かゝる愛たき處なるを、古人の歌枕に漏しけむ事いふかし、

四王寺
御笠郡鼓峯
ニ在リ

〔太宰管内志〕上筑前之二十三　御笠郡　四王寺

類聚國史、百八十卷に、大同二年十二月甲寅朔、太宰府言、於大野城鼓峯興立堂宇、安置四天王像、令僧四人如法修行、而依制旨、既從停止、○中略伏請奉□〔遷カ〕本處者、許之、○中略三代實錄、十二卷に、貞觀八年二月十四日、神祇官奏言、肥後國阿蘇大神懷藏怒氣、由是云々、太宰府司於城山四王院、轉讀金剛般若三千卷・般若心經三萬卷、以奉謝神心、消伏兵疫、檜垣嫗家集に、四王寺山を物の名にて、

四王院
古ノ大寺
四王寺山

老ぬれは年若〔はかく〕くして有ぬへししわうしやまつ人にみゆれは

なと見えたり、四王寺山は御笠郡に在て、坂本より絶頂まて一里あり、絶頂に四王院として小堂あり、古は大寺にて僧坊も千區有しと云、其時の礎往々に殘れり、大野山・大城山・鼓峯・四王寺山、同山なれとも、さす所は聊かはれるもあり、

二十八日、乙卯、正五位下天文博士安倍吉昌卒ス、

〔小右記〕○前田家本　四月

廿八日、乙卯、○中略

天文博士安倍吉昌朝臣卒云々、

六月

四日、己丑、○中略、天變ノコトニカヽル、只今無上天文奏之人、博士吉昌卒、權博士久邦住伊与國云々、公家無被咎、司天臺只有其號、有何益乎、當時無公事、嗟乎々々、

藤原實資吉昌卒シテ天文奏ヲ上ル人無キヲ嗟ク

〔類聚符宣抄〕九　天文得業生事

官歴

太政官符式部省　外、諸道得業生、

應補天文得業生從八位上安倍朝臣吉昌事

天文得業生從八位上

讀書

三家薄讃壹部　晉書志壹卷

讀書

觀星貳拾捌宿

觀星

右、得中務省去八月十九日解偁、陰陽寮解偁、正五位下行主計頭兼天文博士賀茂朝臣保憲牒狀偁、件吉昌、情操聰敏、勤學匪懈、望請補得業生竹野親當滿九年替、令遂其業者、寮依牒狀申送者、省依解狀申送如件者、從二位行大納言兼皇太子傅侍從源朝臣兼明宣、依請者、省宣承知、依宣行之、符到奉行、

左少史

左中辨（藤原爲光）

天祿元年十一月八日

天文博士

〔權記〕長德四年十月

三日、申剋、天文博士吉昌朝臣令藏人右衞門尉奏、○下略、天文密奏ノコトニカヽル、長德四年十月三日ノ條ニ收ム、

陰陽助

長保三年八月

十一日、庚戌、○中略　召陰陽助吉昌朝臣、令擇申御魚始吉時、○下略、敦康親王魚味始ノコトニカヽル、長保三年八月十一日ノ第二條ニ收ム、

陰陽頭但馬權守

〔除目大成抄〕五　春外國五　勘申　兼國例事　兼國

安倍吉昌　歴三年、

陰陽頭兼國例

長保六年正月、任陰陽頭、寛弘三年正月、兼但馬權守、（寛弘元年）

〔朝野群載〕十五　曆道

請殊蒙天裁、因准先例、從五位上行陰陽頭兼陰陽博士賀茂朝臣成平、依造進御曆幷頭・博士等勞、被敍一階狀、

寛仁三年四月二十八日

○中略

一、陰陽道第二者、臨時預加階例

安倍吉昌、長和四年〔正イ〕四月、敍正五位下、其時上藏吉平朝臣〔安倍〕、敍勞十三年、○中略

長治二年二月廿一日○署所略ス、

〔尊卑分脈〕安倍氏

晴明 大膳大夫、陰陽師、天文博士、主計權助、左京權大夫、從四下、穀倉院別當、年八十五、

吉平 主計頭、陰陽師、陰陽博士、從四上、年七十三、○安倍吉平卒スルコト、萬壽三年十二月十八日ノ條ニ見ユ、

吉昌 陰陽頭、陰陽師、陰陽助、天文博士、但馬權守、主税助、正五下、

奉親 陰陽助、權天文博士、爲吉昌之子、子孫在此由歟、〔中カ〕

〔系圖纂要〕號外十五 安倍朝臣姓

晴明 司天竿術長、大方通神、奇異人也、

陰陽道ノ第二者 正五位下

世系

安倍晴明ノ子

養子安倍奉親

吉平 密奏、博士、主計頭、穀倉院別當、從四上、

奉親 爲吉昌子、權天文博士、助、從五上、

吉昌 正五下、主税助、天文博士、陰陽頭、寛仁年中卒、

成親 上野介、

〔安倍氏系圖〕

晴明 主計權助、天文博士、左京權大夫、大膳大夫、從四位下、

吉昌 陰陽頭、陰陽助、天文博士、正五下、密奏儒、

吉平 從四上、陰陽博士、主計頭、陰陽助、穀倉、

奉親 陰陽助、權天文博士、從五上、正五下（ママ）養子、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏 寛弘八年二月

十九日、癸亥、到鳴瀧解除、○藤原道長、七瀬祓ヲ修スルコト、寛弘八年正月八日ノ第三條ニ見ユ、陰陽師吉昌給祿、○吉昌、道長ノ七瀬祓ニ從事スルコト、長和五年三月三日ノ第一條ニ見ユ、

陰陽師藤原道長ノ爲メニ七瀬祓ヲ修ス

〔權記〕寛弘四年六月

十六日、庚戌、參內、昨日吉昌勘申仁王會日、來月十四日・廿六日、○中略被問一昨光榮（賀茂）朝臣・奉平（縣）等勘申臨時御讀經日、來月三日丁卯如何、吉昌申丁卯有忌由了、仍今日權（藤原隆）中納言（家）奉仰、召三人被問、光榮申、昨日者、丁卯日可被行由、奉平撰申、不見給子細加署也、今如吉昌申、雖注三寶吉、可忌由、有所指、不可被用、二日丙寅可被行者、下官（藤原行成）申云、丙寅日奉仕、三寶父師死云々、○中略仍十四日可被行被定仰了、○天變ニ依リテ、臨時仁王會ヲ行フコト、寛弘四年七月十四日ノ條ニ見ユ、

仁王會ノ日ヲ勘申ス

縣奉平ノ勘申ニ難ヲ申ス

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　寛弘四年十二月

廿一日、癸丑、戌時小（少）地振、又丑時又振、大也、兩度、

廿二日、甲寅、○中略天文博士吉昌（ナイアリ）・奉平地震奏持來、吉昌奏在月（月在イ）弓、奉平在月角者、各論月度、又吉昌十二月者、奉平正月者、○寛弘五年ノ立春ハ、ホヾ同四年十二月二十一日午後十時四十八分ノ頃ニ在リ、是家々說云々、但召光榮問、月度弓者、吉昌所申有理、○陽明文庫所藏古寫本ヲ以テ校ス、吉昌、地震勘奏ヲ上ルコト、長和二年八月八日及ビ同四年五月二十八日ノ條ニ見ユ、

地震勘奏ヲ上ルコト

月度ヲ論ジテ奉平ノ勘說ヲ異ニス

〔小右記〕○前田家本　寛仁三年二月

五日、癸巳、○中略天文博士吉昌持來天文奏案、月犯太白、依家人密々令見也、

○吉昌、天文密奏ヲ上ルコト、長保二年二月二十三日及ビ寛弘八年十月二十四日ノ條ニ、客星勘文ヲ奏スルコト、寛弘三年六月二十四日ノ第二條ニ、陰陽頭トシテ、御曆奏ヲ奉仕スルコト、同六年十一月一日ノ條ニ、皇后藤原娍子ノ內裏入御ニ、反閉ヲ奉仕スルコト、長和二年三月二十日ノ條ニ、天文博士ノ辭表ヲ上ルコト、同年五月九日ノ第二條ニ、日食勘奏ヲ上ルコト、同四年六月一日ノ第一條ニ、後一條天皇御元服ノ日時ヲ勘申スルコト、寛仁元年十二月十三日ノ第一條ニ、彗星出現ニツキテ說ヲ爲スコト、同二年六月十九日ノ條ニ、安倍章親ヲ天文博士ニ任ズルコト、本年十月十日ノ條ニ見ユ、

賀茂光榮吉昌ニ贊ス

天文奏ノ案ヲ密ニ賀資ニ示ス

賀資家々人

五月 小 盡 丁巳 朔

一日、丁巳、入道前太政大臣藤原道長家法華三十講、

〔小右記〕○前田家本　五月

一日、丁巳、今日入道殿（藤原道長）三十講始、未剋許参入、坐御堂南廊、被招入簾中清談、○中略小時移坐御堂、坐簾中、大僧都尋円・前大僧都尋光祗候、即打鐘、摂政（藤原頼通）著堂前座、下官（藤原実資）及大將（藤原教通）・左衛門督（藤原）頼宗（原）・皇太后宮權大夫（源）経房・伊与守（藤原）兼隆、・左大辨（源）道方、・右兵衛督（藤原）公信、・修理大夫（藤原）通任、・

三位中將二人、左（藤原）道雅、右（藤原）兼経、次第著座、講師律師懐壽、問律師明尊、論義了行香、摂政已下、僧等退下之後、還給南廊、

三日、己未、○中略宰相（藤原資平）來、臨晚又來云、参入道殿三十講、今夕可参大内給云々、

八日、甲子、今日欲参内并三十講所、而夢想不靜、仍不轄車、

十日、丙寅、宰相云、参入道殿、講了被招入左兵衛督（源）頼定、并資平、被差饌飠、

十三日、己巳、○中略未剋許参入道殿、宰相同車、今日三十講五卷日、以二位宰相兼隆、被命可相逢由、小時出給堂前、可相遇由、以左將軍（教通）被命、奉謁良久清談、摂政及卿相参入、仍入給簾中、令打鐘、僧侶参入、堂童子著座、法用後頌花苫、次僧侶退下、摂政已下諸大

發願
参入ノ公卿
講師懐壽
問者明尊
道長源頼定等ヲ招ジテ饌飠ヲ差ム
五卷日

夫并上官六位執捧物三廻、僧侶前行、薪等遲々、數度被催、僅以列行、摂政已下上達部執捧物三廻、了置座前、皇太后（藤原妍子）御坐御堂、御捧物有風流、亮定頼（藤原）藏人頭・右中辨、持之、立上達部次、殿上人已下捧物置堂前廊、敷長莚置其上、袈裟・褂・帋・色物等諸大夫取置、帋者近衛府官人已下取置、講師權律師懐壽、問律師定基、釋經并論義・問答如常、佛事了後、僧俗有饗饌、黄昏退出、

今日卿相摂政・大納言公任（藤原）・中納言行成（藤原）・教通・經房・頼宗・實成（藤原）・参議兼隆・道方・頼定・公信・朝經（藤原）・三位中將二人道雅・兼經・参議資平、

十九日、乙亥、参内、宰相乗車尻、○中略小時参入道殿、講演始間也、下官未参之前、大納言公任・左三位中將道雅在堂前、小時摂政・中納言教通・頼宗・經房・参議兼隆等参入、

廿四日、庚辰、○中略

早旦宰相來、即参入道殿、向晚又來云、明日卅講結願、又云、今年受領營非時事多、倍例年、

廿五日、辛巳、○中略、藤原道長、病ムコトニカ、ル、本月二十四日ノ第二條ニ收ム、今日入道殿卅講結願、仍参入、宰相乗車後、○中略被打鐘、摂政已下著堂前座、僧侶参入、講説・論義、了被修諷誦、信乃百端、摂政已下行香、

行道
皇太后御捧物ハ公卿ノ欠ニ立ツ諸大夫ハ袈裟等ヲ近衛府官人ハ紙ヲ講師懐壽ヲ執ル問者定基ヲ饗饌アリ
受領ノ非時ヲ奉仕スル例年ニ倍コトニスル
結願
諷誦

了中納言已下取祿、件祿桑絲褁帋、上達部取之、頗以輕々、大納言不取、丹波守頼任奉
仕非時、各帋挿解文、米歟、置請僧前、僧等退出、了攝政已下起座、

祿ハ桑絲ヲ紙ニ褁ム丹波守藤原頼任ノ非時紙ニ解文ヲ挿ム

三日、己未、右近衛府、相撲使ヲ定ム、

小一條院ヨリ御隨身番長ノ相撲使申文ヲ給フ

〔小右記〕○前田家本　正月

卅日、戊子、○中略

院以永信朝臣被仰云、去年以隨身示遣可差遣相撲使之由、而有無止可遣之者等、仍不可
差遣者、○二年四月二十七日ノ條参看、不能重示、今年以番長民利信可遣山陰・南海道等間使者、下給
申文、令申至道相定可遣之由了、

藤原道長隨身播磨貞安ヲ大宰府使ニ推ス

二月

廿六日、甲寅、宰相云、昨日参大殿、申御隨身相撲使事、御報云、欲申事由之間、今有
此消息、以近衛播磨貞安可遣大宰府使、召將曹正方仰遣權中將公成許、但先遣大宰使、
相次可定他道々使之由等也、

四月

廿四日、辛亥、○中略

次將等ノ故障ニ依リテ定ヲ延引ス

藤原頼通ノ隨身秦武方ハ道長ノ隨身ト競合ヲ辭セントス退リ使ヲ見テ優レタル技ヲ相撲使ニ遣ハスベシト言ス人ノ選ハ大將ノ監ノ將ノ進止ニ非ズ

可定相撲使事、以將曹正方云遣中將公成、即有返事、
廿七日、甲寅、早旦將曹正方申云、中將公成消息云、今日可定相撲使之事、令告將等、
皆申故障、若手結日有相定例者、可隨案内者、

五月

三日、己未、○中略

今日可定相撲使之由、先日示中將公成了、今旦將曹正方申云、爲申定其事可來者、小時
中將朝臣來云、今日申相撲使事於攝政、命云、可遣隨身番長武方者、其後武方觸中將云、
不可被差遣者、不可隨武方申歟、大略武方所思者、被差相撲使者、以入道殿御隨身光武
被長差歟、依此疑今退所辭遁歟云々、將監保春賭射多中的、○正月十八日ノ條参看、彼時入道殿有遣
相撲使之興言、一日申攝政、有可遣之氣色、至將監難進止、仍取氣色耳、可定遣之由、
示中將了、○中略　相撲定文府生保重持來、見了返給、中將公成・少將良頼・隆國等定、

藤原頼通ノ隨身秦武方ハ道長ノ隨身ト競合ヲ辭セントス退リ使ヲ見テ優レタル技ヲ相撲使ニ遣ハスベシト言ス人ノ選ハ大將ノ監ノ將ノ進止ニ非ズ

○相撲召合ノコト、七月二十七日ノ條ニ見ユ、

四日、庚申、右近衛府荒手結、

〔小右記〕○前田家本　五月

手結文ノ過誤ニ箇所馬場所糟藤蕨酒等ヲ進ム

禄

大将藤原實賚料米ヲ給フ

四日、庚申、○中略

入夜府生保方（紀）持來手結、中將長家（藤原）・少將隆國（源）・良頼（藤原）著行、

五日、辛酉、早朝下給手結、日下部誤注草部、府掌武晴（荒木）書近衛、件兩事示遣將許耳、馬場所進糟・藤蕨酒等、

○右近衛府眞手結ノコト、本月六日ノ條ニ見ユ、

六日、壬戌、右近衛府眞手結、

〔小右記〕○前田家本　五月

六日、壬戌、眞手結、將祿大褂、射手官人祿絹六疋、射手物節已下祿布九十端、但四端有餘剩、雜駈仕新云々、饗新米兼日給之、今日手結、垣下五位・六位等差遣之、戌刻許府生保方（紀）持來手結、中將公成（藤原）・長家（藤原）・少將隆國（源）・良頼（藤原）著行、

七日、癸亥、早旦下給手結、

○右近衛府荒手結ノコト、本月四日ノ條ニ見ユ、

八日、甲子、勅シテ、入道前太政大臣藤原道長ニ、舊ノ如ク三宮ニ准ジテ年官・年爵ヲ給ヒ、併セテ封二千戸ヲ給フ、

上卿藤原公任疑点ヲ同實資ニ問フ
故菅原宣義抄出ノ詔勅中ニ藤原兼家ノ例アリ

封二千戸ハ總數ナリヤ新加ナリヤ

勅書ニ御畫無シト雖奏スベシヤ否ヤ
實資ノ返答
出家ノ人ニ位封職封有ルノ理ナシ
近代御畫無キヤ
ズキ文ハ奏セナルト雖重事ニ依リテ奏聞ヲ經ベキカ

〔小右記〕○前田家本　五月

八日、甲子、○中略

四條大納言（藤原公任）被示送狀云、昨日依有攝政（藤原頼通）御消息、今日參入可行勅書事、是入道殿（藤原道長）御封事云々、大入道殿（藤原兼家）御時事○正暦元年五月二十三日ノ條參看、若有所聞食歟、御暦被注乎、故宣義（菅原）抄出詔勅之中有此勅、先入道關白任人・賜爵猶擬三宮、封戸不改勅云々、書中任人・賜爵之儀擬三宮、以不改榮邑茅土之制、割二千而殊加云々、表狀云、讀月日勅書、賜其封二千戸、任人・賜爵擬三宮云々、勅答、辭其准三宮之儀、謝以封二千之制云々、案之、最初勅書割二千新加之文、本封仁似加別封二千、依之端所書文者、宣義所注也、出家之人何有位封・職封乎、表并勅答者只有別封、加字非無所疑、如何、又勅書無御畫者、不就御所、只可奉攝政歟、先例雖幼主皆奏、近代不然、今被加御元服、○二年正月三日ノ條參看、如此事如何者、報云、暦無所注、或書云、只入道殿（大カ）例注准三宮年爵・年官并別封二千、抑出家人不可有位・職等封歟、亦無御畫之文不可被奏者、古跡亦就御所奏聞、從御所被遣攝政所、而近代不然、但事已不輕、進御所被奏宜歟、可有事疑者、先示奏者、隨案內被進止如何、近代事不似古昔耳、九日、乙丑、昨日勅書趣并進奏不等事、問達大納言（公任）御許、報云、任人・賜爵如故不改、

道長ノ意ヲ伺ヒテ勅書ヲ奏覧ス

出家以後ハ希代ノ例

又封戸二千戸、不可有位・職等封、仍只被給別封二千戸云々、如大入道殿御時、於入道殿申案内、付御所可宜者、仍進御所奏覧、攝政被候御所者、此事合愚案、

〔日本紀略〕後一條院　五月

八日、甲子、勅入道（道長）前太政大臣、任人・賜爵准后如故不改、又給封戸二千戸、

〔公卿補任〕七　前太政大臣従一位藤道長、五十四、五月八日詔（勅）、任人・賜爵准三宮儀如故不改、又封邑（ママ）三千戸殊以賜之、

〔扶桑略記〕二十八後一條天皇　五月八日、入道前太政大臣重勅、准三宮賜年官・年爵、三（ママ）千戸封如舊矣、出家以後希代之例也、

〔榮花物語〕十五（行間勘物）「○上略、皇后藤原城子、出家シ給フコトニカヽル、三月二十五日ノ條ニ收ム、」○梅澤義一氏所藏三條西本（うたかひ）

三宮之由、被下宣旨、御本注如此、」

〔大鏡〕五○東松斎三氏本　□（ママ）太政大臣道長　上

○上略　寛仁三年己未三月廿一日、御出家し給へれと、猶又おなしき五月八日、准三宮のくらゐにならせたまひて、年官・年爵えさせ給、

法興院ニ於テ御忌ヲ修ス

皇后ノ御病ハ時行及ビ邪氣

御病危殆小一條院皇后宮ニ參リ給フ

○一代要記・撰集祕記・濫觴抄等、異事ナキヲ以テ略ス、道長、出家スルコト、三月二十一日ノ條ニ、上表シテ、封戸及ビ准三宮ヲ辭スルコト、六月十九日ノ第一條ニ見ユ、

九日、乙丑、三條天皇御忌、是日、皇后藤原城子、御惱ニ依リテ剃髮シ給フ、

〔小右記〕○前田家本　五月

九日、乙丑、○中略　宰相（藤原實成）來云、今日故三条院御國忌、於法興院被行、○中略　臨昏宰相來云、參三条院御國忌、

十一日、丁卯、宰相來云、皇后宮（藤原城子）日來重惱御、時行・邪氣相交云々、

十三日、己巳、○中略

皇后宮先日爲厄（尼カ）、去九日更剃御髮爲法師、依御病危急、是二位宰相（藤原兼隆）所陳、昨日參入所聞者、又御病危殆云々、院（小一條院敦明）御坐彼宮云々、

十六日、壬申、○中略

宰相來云、昨參皇后宮、御惱不輕之由、修理大夫（藤原通任）相示之、

八月

十三日、丁酉、○中略宰相云、○中略、小一條院、白河院ニ於テ、管絃ヲ催シ給フコトニカヽル、八月十二日ノ第二條ニ收ム、日來母后（嬉子）重惱給、而遊遙管絃、奇怪無極云々、一昨坐母后宮、其間重惱給、有管絃云々、非尋常之事也、

小一條院御母皇后病中ニ管絃ヲ行ヒ給フ

○皇后御出家ノコト、三月二十五日ノ條ニ見ユ、

十日、丙寅、入道前太政大臣藤原道長、太皇太后ノ御惱ニ依リテ、同宮ニ參入ス、

〔小右記〕○前田家本　五月

十日、丙寅、宰相（藤原資平）云、○中略太后（藤原彰子）日來時々惱御云々、今夕入道殿（藤原道長）參入給云々、

十二日、戊辰、中務省監物局ニ火アリ、

〔小右記〕○前田家本　五月

十二日、戊辰、○中略夜闌西方有火、人々云、西京火歟者、不幾滅、

十三日、己巳、去夜火事問人々、申云、中務省內監物局板舍燒亡者、去夜不聞案內、仍不參大內、

板舍火ク藤原實資火ハ右京ナリト思ヒ參內セズ

○京中ニ放火相次グコト、四月五日ノ條ニ見ユ、

程無ク鎭火

十六日、壬申、祈年穀幷ニ祈雨ノ奉幣使ヲ發遣ス、

〔小右記〕○前田家本　五月

十一日、丁卯、宰相（藤原資平）來云、○中略臨夜又來云、今日參內幷入道殿（藤原道長）、明日可被定祈年穀使、中納言行成（藤原）卿承行之者、

十二日、戊辰、宰相示送云、今日依八卦厄日籠居、而召使來告可參入之由、申障了、其後內堅來重召、令申可參由訖、左右大辨（藤原朝經）不可參、依可書奉幣使定文所召云々、

十六日、壬申、祈年穀使立、中納言行成卿行之、

〔日本紀略〕後一條院　五月

十六日、壬申、奉幣廿一社、依祈年穀幷祈雨也、（丹生・貴布禰）丹・貴二社、黑毛御馬、獻

○重ネテ祈雨奉幣使ヲ發遣スルコト、本月二十四日ノ第一條ニ見ユ、

二十日、丙子、大納言藤原實資、孔雀經御修法料物ノ宣旨等ヲ下ス、

〔小右記〕○前田家本　五月

廿日、丙子、○中略

今日藏人式部丞範永（藤原）下給宣旨一枚、自廿二日被始行孔雀經御修法料物宣旨、下左中辨（藤原經通）、左中辨下給鹿嶋宮司

左右大辨不參ニ依リ參議藤原資平八卦物忌ヲ破リテ參入ス定文ヲ書ス上卿藤原行成

二十一社丹生貴布禰兩社ニ黑馬ヲ奉ル

御修法ハ二十二日ヨリ始ムベシ

鹿島宮司ニ下ス宣旨申文

奉勅宣

續文ヲ放チテ宣下ス

藏人ヲ使ト爲ス

上卿源經房

將來宣旨、其申文有當任者續文、問案内、若他上令續歟者、而申文端不注上・辨幷月日、甚所爲奇也、又々問子細、答云、攝政(藤原頼通)爲覽當任者任限、所令勘續也、依奉勅宣所被下也者、余(藤原實資)答云、然者放續文可宣下之由、相示了、○鹿島宮司ヲ補スルコト、長和四年六月二十九日ノ第二條ニ見ユ、

○孔雀經法ヲ修スルコトハ、見ル所ナシ、

二十四日、庚辰、重ネテ祈雨奉幣使ヲ、丹生・貴布禰兩社ニ發遣ス、

〔小右記〕○前田家本　五月

廿三日、己卯、源中納言經房、云、明日被立祈雨使、丹生・貴布禰、使藏人、卽源中納言行之、

廿四日、庚辰、○中略早旦宰相(藤原實資)來、○中略向晩又來云、○中略又云、午時被發遣丹生・貴布禰使、

〔日本紀略〕後一條院　五月

廿四日、庚辰、奉幣丹・貴二社、依祈雨也、使(行カ)殿上六位爲使、

○祈雨奉幣ノコト、本月十六日ノ條ニ、旱魃等ニ依リテ、臨時仁王會ヲ行フコト、本月二十六日ノ條ニ見ユ、

入道前太政大臣藤原道長、病ム、

定基道長ノ畫寢ハ不例ノ徵證ナリト言フ

道長藤原實資ニ今度ハ存命期シ難シト告グ

〔小右記〕○前田家本　四月

廿八日、乙卯、宰相(藤原資平)來、退去、臨晚又來云、參入道殿(藤原道長)・攝政殿(藤原頼通)等、無指事、律師定基云、入道殿晝寢、御心地不宜之時事也者、

廿九日、丙辰、無事、

五月

廿五日、辛巳、或云、入道殿去夜惱給云々、不得愜說、○中略、道長家法華三十講結願ノコトニカヽル、本月一日ノ條ニ收ム、

仍參入、宰相乘車後、以左將軍(藤原教通)被示云、從去夕惱煩、于今無休、不能相逢者、○中略四条大納言(藤原公任)・余(藤原實資)暫祗候入道殿、惱苦御聲極不便也、以左將軍被示余云、此般更不可存者、臨晚罷出、

廿六日、壬午、今明物忌、今日仁王會、○本月二十六日ノ條參看、依物忌不參入、○中略宰相來云、參入道殿、次可參內、○中略黃昏宰相來云、○中略今日先參內、以下官(實資)消息觸二位宰相、(藤原)兼隆、卽申事由、御返事云、所惱太難堪、然而不如昨日者、從八省退出之間、彼是云、只今重惱給者、

廿八日、甲申、早朝參入道殿、宰相乘車尻、以左大將有從去夕重煩給之由、彼是云、極重惱給

者、小時退出、

六月

一日、丙戌、○中略

入道殿重惱給云々、入夜宰相從入道殿罷出云、更無平減、俄被始念佛、

念佛ヲ始ム

二日、丁亥、宰相來云、○中略又云、入道殿頗宜坐云々者、又云、從酉時許、重發煩給云々、

三日、戊子、從今日入道殿乍御身靈氣顯露、被調伏、今朝頗宜坐云々、是扶公僧都密語、去夕籠御物忌、今朝罷出者、

靈氣道長ニ憑リテ調伏セラル

四日、己丑、已講朝靜云、入道殿宜坐者、太后(藤原彰子)明日可御出入道殿云々、仍取案內大夫、俊賢(源)報云、略定五齋(マヽ)可出御、但入道殿御心地宜者不可出御歟、問權大夫、頼宗(藤原)、追可示者、

太皇太后道長第ニ行啓シ給ハントス

五日、庚寅、今日太后可出御入道殿云々、取案內於源中納言、經房、報云、執申入道殿、御返事云、雖有仰事、依事煩侍、申止已了、但亂心地、去春所惱平復之後、心神隨例、○三月二十一日ノ條參看、此度惱侍、昨・今日雖頗宜侍、無力殊甚、起居日難堪、今有此御消息、

道長行啓ヲ辭シ奉ル

悅申不少、每事不令申者、納言報狀如此也、

七日、壬辰、○中略

宰相來云、早朝參入道殿、御心地無殊事者、

十一日、丙申、早旦參入道殿、宰相同車、以左衞門督頼宗、被命云、昨・一昨心神さハやあなり、而今日熱氣天覺侍、仍不能相逢、彼是云、頗不例坐、臥給者、暫祗候、又命云、久成ぬ、可出者、小時罷出、

熱氣

廿三日、戊申、召使申云、明後日皇太后宮(藤原妍子)可還御本宮(一條院)、○道長、出家スルニ依リテ、皇太后、上東門第ニ行啓シ給フコト、三月二十一日ノ條ニ見ユ、可候其行啓者、答從今朝有所勞、相扶若宜者、可供奉之由、

廿四日、己酉、去夜入道殿發惱給云々、

○中略

入昏宰相來云、○中略明日皇太后宮行啓停止、入道殿可坐法性寺、此間北方(源倫子)獨可坐、仍爲可徒然、可坐同處云々、

道長法性寺ニ入ラントス

皇太后一條院還御ヲ延引シ給フ

○道長、病ニ依リテ出家スルコト、三月二十一日ノ條ニ、道長ノ病ニ依リテ、非常赦ヲ行フコト、四月三日ノ第二條ニ見ユ、

賑給使定ノ上卿藤原公季

不堪佃田定ハ寛仁元年定

藤原行成大分ナレバ定納言列座ヲ要スト爲ス

セズ聽カレド

二十五日、辛巳、賑給使定及ビ不堪佃田定、

〔小右記〕○前田家本　五月

廿日、丙子、○中略

入夜召使來云、明日右大臣（藤原公季）參入可有定者、只今稱有犬死穢之由、

廿五日、辛巳、○中略　今日入道殿（藤原道長）卅講結願、○本月一日ノ條參看、仍參入、○中略　召使來云、左大臣（右カ）被參陣、有被定申事、諸卿可參入者、余及四条大納言（藤原實資）稱障不參、相扶所勞參入此殿、而心神太惱、不能參由也、家子卿相同不參、中納言行成（藤原）・經房（源）・實成（藤原）・參議道方（藤原公任）・公信（源）・通任（藤原）・朝經（藤原）・資平（藤原）等參內、依攝政（藤原頼通）命左大辨道方（源）先參入、依右府被定賑給使、又今日定若不堪事歟云々、

廿六日、壬午、○中略　宰相（資平）來云、○中略　昨日大納言外可參內、而右兵衛督公信・修理大夫通任自途中退去、皆是申參入由之人等也、昨定先賑給使、次不堪定、去寛仁元年、○元年十二月十九日ノ第三條參看、中納言行成云、大納言一人猶可候、是大定也、大臣云、國々司等有所申、後日難參具歟者、仍愁定、此間大臣觸事欝々、

七月

十四日、己巳、○中略

諸衛府ノ賑給文ヲ奏ス近代ハ奏セズ

藤原頼通同實資ニ定ヲ行フベキヲ命ズ實資更メテ藏人頭ヲ經テソノ命ヲ承ク

資宰相來云、昨日右大臣（公季）令奏府々賑給奏文、卿相・上官等云、未見之事也、被定賑給使（奏カ）定文例也、其後更不被奏宛行之奏文者、近代不奏、古者奏之、

○七月十三日、賑給文ヲ奏スルコト、便宜合敍ス、

二十六日、壬午、旱魃及ビ女眞賊ノ來寇ニ依リテ、臨時仁王會ヲ行フ、

〔小右記〕○前田家本　五月

十九日、乙亥、參內、宰相（藤原資平）車尻、乘諸卿不參、參母后（藤原彰子）御方、○中略、太皇太后、藤原道長ノ出家ニ就キテ仰セ給フコトニカ、ル、三月二十一日ノ條ニ收ム、小時參入道殿（藤原道長）、講演始間也、○道長家法華三十講ノコト、本月一日ノ條ニ見ユ、下官（藤原實資）未參之前、大納言公任（藤原）・左三位中將道雅（藤原）在堂前、小時攝政（藤原頼通）・中納言教通（藤原）・頼宗（藤原）・經房（源）・參議兼隆（藤原）等參入、攝政命云、可定申仁王會事者、申云、承之、但以頭藏人可承仰事、攝政目經通（藤原）、藏人頭左中辨、候、仰之、就下官後、仰云、可定仁王會事者、令申承由、明日陰陽寮可召候事・例文可候事、便仰經通、差行事辨有次第、問其由、皆有其巡者、例仁王會歟如何、辨云、不承左右、余申攝政、命云、於大極殿立百高座可行者、又命云、前例不定、或時只大極殿一所被行、或又不止院宮者、申云、神社・院宮猶被行太可善、攝政被諾、明日可參入由、面仰左大辨、道方（源）、

定
日時勘申

廿日、丙子、参内、宰相乗車尻、先是左大辨道方参入、以左中辨経通、傳仰陰陽寮、令勘申仁王會日時、又問文書等候不、皆具候者、仍移著南座、即進日時勘文、廿六日、時、廿九日、時、史進文書、前々定文・撿挍行事定文・僧綱夾名・名僧帳等、硯置大辨前、即令書定文、大極殿百講座、講説了、別有講師、讀師、其外皆講師、又別有〔高カ〕名・内供阿闍梨夾名、〔藤原彰子〕紫宸殿・清涼殿・太皇后皇參カ〔藤原妍子〕〔藤原威子〕〔藤原嬉子〕太后・中宮・皇后宮・東宮・五条〇小一条カ院・神社等、次第如此、又書撿挍一帋中納言藤原朝臣實成・參議源朝臣道方・行事一帋、右少辨藤原朝臣資業・右大史小槻宿禰貞行・左少史宇治忠信、書了進余許、進件文等、三通、余披見了盛莒、初盛文書莒也、撤彼文書等、盛定文・日時勘文・撿挍定文等、以經通奉攝政、坐御宿所、但行事定文不奉、是前例也、咒願趣者、令申可被仰撿挍上之由、其後問案内云、有可仰之命、問其趣、云、有旱魃事而已者、示可有異國凶賊事之由、即返給定文等云、廿六日可行、又云、皇后宮上書中宮、次第違濫、改書中宮上、可下賜者、余申云、去春仁王會定文如此之、〇三月十六日ノ第一條參看、仍所書也、但令申改書可下給由、可切續由仰辨了、苦熱之間、改書有煩之内、大辨有惱氣也、日時勘文・僧名定文・撿挍定文・行事定文等、欲下給行事資業朝臣、左中辨云、依有病者、忽罷出了、先下給可被給後者、〔彼カ〕仍件文書等下左中辨、四通、一通僧名、一通日時勘文卷加、一通撿挍定文、一通行事定文卷加、一度給、昨日四條大納言〔藤原公任〕云、去春仁王會、皇后宮上書中宮、又東宮下書小一条院、令申此案内、命云、移付之時、皇后宮者可書中宮上者、仍可改付之由、仰辨了、初定左府、〔藤原頼光〕後時撿挍大納言公任、〔藤原〕〔小一條〕院與東宮次第無左右命者、今日見彼時定文無改書、仍如定文所令書也、問右大辨朝經云、

日時勘申
大極殿ニ百高座ヲ立ツ
紫宸殿清涼殿神社院宮等ニ於テモ行フベシ
咒願趣者ニ賊寇ノ事ヲ加ヘシム
定文ニ皇后宮ヲ中宮ノ下ニ書ス
切リ繼ギテソノ先後ヲ改メシム

彼時有可改之仰、然而于今不書改者、左大辨懈怠耳、〇三月十六日ノ第一條參看、今日參入左大辨道方・右大辨朝經・侍從資平、酉剋退出、

廿四日、庚辰、尋清律師來、他僧等多皆〔与カ〕示仁王會事、答可觸撿挍上之由、

廿五日、辛巳、〇中略、道長家法華三十講ノコトニカ、ル、本月一日ノ條ニ收ム、今日、明日咒願於堂前被見、余・四条大納言・侍〔行改〕從中納言、多忌諱文、有不例文、甚不宜、又引載天文奏占文等、占文作者不可知、極足爲奇、作者文章博士爲政、〔善淫〕攝政以行事辨資業、可改作之由被仰作者、

廿六日、壬午、今明物忌、今日仁王會、依物忌不參入、加供解文令送行事所、僧綱一口、凡僧五口、宰相來云、參入道殿、次可參内、〇中略黄昏宰相來云、卿相參大極殿、又相分參内云々、

〔日本紀略〕後一條院　五月

廿四日、庚辰、〇中略今日大祓、依仁王會也、

廿六日、壬午、仁王會、依祈雨也、今日雷電雨降、又祈刀伊國事、

〇大宰府女眞賊ノ來寇ヲ言上スルニ依リテ、諸社寺ヲシテ祈禱セシムベキ由ヲ議定スルコト、四月十七日ノ第二條ニ、祈雨奉幣使ヲ發遣スルコト、本月十六日ノ條及ビ同月二十四日ノ第一條ニ見ユ、

春ノ仁王會ノ定文ヲ書改メザリシハ左大辨ノ懈怠ナリ
實資等咒願文ヲ檢ス
忌諱不例ノ文アルヲ以テ咒願文ヲ改作セシム
作者善滋爲政
實資加供解文ヲ行事所ニ送ル
大祓
雷電降雨

上卿源経房
休暇ノ日ニ行フ外官有ル時ニハ參議除ニ書ヲ書スル京官ノミモノ時ハソノ要ナキカ

二十九日、乙酉、復任除目、

〔小右記〕○前田家本　五月

廿九日、乙酉、宰相（藤原資平）束帯來云、今日源中納言経房、行復任奏事、外記國儀、雖休假日、依有前例、候氣色早（マヽ）攝政（藤原頼通）所行也、依彼納言催所參入者、有外官之時、宰相（高橋）書除目、京官復任時、宰相不可必具歟如何、

午時月星共ニ見ユ
太白星カ
天文博士安倍吉昌卒シ權博士久邦ハ伊豫ニ在リ
陰陽寮ハ有名無實ニ等シ
權博士以下天文ニ通ズル者ナシ

後懸

六月大盡　丙戌朔

一日、丙戌、造酒司、醴酒ヲ上ル、

〔小右記〕○前田家本　六月

一日、丙戌、○略中

造酒司進醴（醴カ）酒後懸、

九日、甲午、天變アルニ依リ、主計頭安倍吉平ヲシテ、天文密奏ヲ上ラシム、

〔小右記〕○前田家本　六月

四日、己丑、○略中　午時月星共見、月在巳、星在月坤、相去七八尺所、三光一時變異、希有恠也、若太白星歟、從源大納言（後賢）・四條大納言（藤原公任）許有消息、源大納言乞送舊奏案、付使送、只今無上天文奏之人、博士吉昌（安倍）卒、○四月二十八日ノ條參看、權博士久邦住伊与國云々、公家無被咎、司天臺只有其號、有何益乎、當時無公事、嗟乎々々、

十日、乙未、○略中　主計頭吉平（安倍）朝臣可上天文奏之宣旨被下云々、昨今間宣旨歟、權天文博士久邦不知其道、又住伊豫、習學宣旨者二人、孝親朝臣・師任等也、皆不覺者云々、仍

所被下歟、○安倍章親ヲ天文博士ニ任ズルコト、十月十日ノ條ニ見ユ、

八月

十一日、乙未、早朝吉平朝臣請取天文吉昔（古カ）奏案、書寫可返者、依上密奏、爲見上代奏也者、○コノコト、便宜附載ス、

〔日本紀略〕後一條院　六月

九日、甲午、以主計頭安部吉平（倍）可進天文密奏被下宣旨、

〔類聚符宣抄〕九　進天文奏人事

右少辨藤原朝臣資業傳宣、權中納言源朝臣經房宣、奉勅、以主計頭從四位下安倍朝臣吉平、宜令進天文奏者、

寛仁三年六月九日　　左大史小槻宿禰貞行奉

入道前太政大臣藤原道長、十六羅漢ヲ供養ス、

〔小右記〕○前田家本　六月

九日、甲午、今日入道殿（藤原道長）被供養十六羅漢、請僧有數、上達部・殿上人有饗饌云々、稱物忌不參入、臨暗宰相（藤原資平）來云、入道殿羅漢供了、

吉平天文奏案ヲ藤原實資ヨリ借寫ス

宣旨

饗饌

十日、乙未、御體御卜、

〔日本紀略〕後一條院　六月

十日、乙未、御體御卜、

左大臣藤原顯光、左大臣ヲ辭セントストノ風聞アリ、仍リテ、大納言藤原實資、權大納言同公任ニソノ實否ヲ問フ、

〔小右記〕○前田家本　六月

九日、甲午、○中略臨暗宰相（藤原資平）來云、○中略四條大納言（藤原公任）・左兵衛督頼定（源）云、左府（藤原顯光）被辭退云々者、

十日、乙未、左僕射辭退事、問大納言、公任、報云、以二位宰相（藤原）兼隆、被示送左大將許、教通（藤原）、可申入道殿（藤原道長）者、院（小一條院敦明）御子一人先日爲親王、○三月四日ノ第一條參看、今二人（敦昌・榮子）可爲親王者、其外無申者、相替親王二人歟、又云、右僕射（藤原公季）有望太相府之氣、○藤原道長、太政大臣ヲ辭スルコト、二年二月九日ノ條ニ見ユ、此間可致祈禱、世間人云、主上成身給、除目時執筆人尤可入下官（藤原實資）事、衆人有所申者、

十一日、丙申、早旦參入道殿、宰相同車、○中略道長、病ムコトニカ、カル、五月二十四日ノ第二條ニ收ム、二位宰相候、兼隆、問左府辭退事、無然氣、但近日參此殿有可被申之事者、計也辭退以外孫二人（敦昌・榮子）可爲親王事歟、

十四日、己亥、○中略丞相事、大納言（公任）示送云、一日問申入道殿、命云、未聞愜說、但いま

顯光ヲ藤原敦通ニ介シ同ジ意ヲ道長ヘ傳ントスル辭退ノ替ニ王子ノ親王ヲ外孫ノ女王ヲ宣下ヲ望ム風評ノ藤原公季ヲ太政大臣ニ望ヲ望ミテ祈禱ヲ大臣ニ資ヲ列スベシトノ世評

道長後任トシテ藤原道綱或ハ教通ヲ考慮ス

道綱一家ノ長老ナレバ一二箇月間タリトモ大臣ノ名ヲ得ンコトヲ道長ニ懇望ス

一文不通ノ人道長教通ハ大納言ヲ経テ大臣ニ任ズベシト爲ス

公任実資ニ任大臣ノ見込有ル由ヲ報ズ

ゝ者あへあらむなとゝ侍わし、彼人（藤原道綱）、無爲方、但非可弃、いとわひし事やと様よゝ侍わし、左將軍も遂登之時、傍有人てゝよあるへき者、彼人ハ即辭せんとゝ云なると侍や、猶有思氣歟、雖然不早辭をはいあゝをられむ、又爲除目極不便歟、未見慥氣色侍、

大納言書如此、

十五日、庚子、宰相來、居地上、〇十二日、藤原資平ノ女生ル、コト、年末雜載、社會ノ條ニ見ユ、良久談話、次云、或云、道綱卿令申入道殿云、一家兄也、此度若不任丞相、何恥勝之、只一・二个月可借給、縱雖無悉（悉カ）不可從事、何況有病乎者、余所思者、第一（道綱）大納言年勞太多、〇藤原道綱、大納言ニ任ゼラル、コト、長德三年七月五日ノ條ニ見ユ、所陳可然、但一文不通之人未任丞相之故、世以不許、以之可驗、今朝左大將可任丞相事、問四条大納言、報云、一日入道殿云、昇大納言之後可任者、〇藤原教通、權大納言ニ任ゼラルルコト、十二月二十一日ノ條ニ見ユ、

十七日、壬寅、〇中略

大納言書狀云、（公任）御事（實資）とてもかくてをも必可有樣に承侍、左將軍所談也、余報云、とてもかくてをとあるハ如何、納言重云、彼人事（道綱）ハ大略不用云々、御事雖無仰、致隨分思侍、一者爲一家、又爲左將軍、又者爲自身罷去世間、〇藤原公任、出家ノ意ヲ同實資ニ洩ラスコト、長和四年年末雜載、宗教ノ條ニ、出家スル

道綱源倫子ニ懇請スル一箇月大臣ノ勤メヲ退ク道綱ハ請ヲ辭ス

藤原頼通ニ任ジ左大臣ニ及ブ藤原ノ器ニ非ザルニ依リ齊信大臣ニ懇望ス

公任ハ大臣ニ任ズベシ言ニ敦通

臣ノ見込ニ通ジ左大臣ニ任ズベシ言ニ教通

コト、萬壽三年正月四日ノ條ニ見ユ、必然思給侍、其間子孫事一向憑申侍者、今如此報書、似一定、但近代事如反掌、

十八日、癸卯、大納言消息云、昨參入道殿、見氣色、此度攝錄（藤原頼通）可被任左大臣歟、內大臣忽不可被任歟、一昨日左將軍所談已相違、若見荒凉氣色歟、將變改歟、將軍昨參殿、今朝可出、問案內、可申子細者、事々輕々、以何喩之、攝政被任左大臣、太有便事也、今推量以之爲實、左軍又有所云乎、

十九日、甲辰、宰相來、〇中略　又云、泰通（藤原）朝臣云、道綱卿大臣事、以惟憲（藤原）朝臣令申入道殿、御報如在也、其後令申北方（源倫子）、其詞云、不堪上、病極重、不可從事、但爲上薦納言年勞太多、如云々者、左大將可被任內大臣、只借給彼內大臣、一月許出仕、將辭退、可被隱恥之由、切詞殊甚、即被傳聞入道殿、所被示偏道理、大納言勞廿餘年、依是非器也、被報可然之趣、但左府辭退事、未聞彼消息、彼一定後可有左右、至今一定可任內府、又云、齊信（藤原）卿懇望云々、驚奇無極、今遇狼藉之代、濫成非道之望歟、四條大納言取案內、左將軍示送之旨相同、左府辭退之時、內府攝政、昇左僕射之所、道綱者可昇也、左將軍可昇其所大納言云々、

公任教通及ビ実資ヲ大臣ニ推挙ス

道綱直チニ大臣ヲ辭任セバ実資年内ニ大臣ニ任ゼラルベシ

人徳ノ致ス所

顯光未ダ辭意ヲ表セズ

教通先ヅ実資ヲ大臣ニ任ズベシト道長ニ進言ス

廿日、乙巳、早朝大納言送書云、彼事は非變改、被相構様侍れり、先日左將軍事有思氣、其時、幼愚之人獨不可堪、貴殿相並被任者可宜之由申之、よく云太わとたをほしたる氣色侍わけわ、而今借彼人先任其所、即令辭て、年中にも可被任ゝ侍なり、然則御事其時必侍歟云々、左將軍昨日慥見氣色之所談也、此事非無所據、宜議也と承侍、先日入道氣色侍わし、如此なるゝ侍けわ、昨日按察(齊信)參內云、或人次第至也、而天下不云其事云々、御事是德之至歟、但若實有其事者、有御心勞歟者、氣色自事不用と聞て侍るなるへし、

廿二日、丁未、○中略今日相逢左將軍、案內彼事、密談云、左府先日有御消息、其後痢病發動、不被參殿、近日平復者、入道殿被命云、可任內府乎如何者、申云、極愚侍、先被任右大將(實資)、下官(教通)其次可罷成、不然者不可令成給之由申了、有甘心御氣色、內辨・官中雜事等更無爲術、猶被任右大將、其後被任爲下臈大臣、尤可佳者、大略云、此度事不知彼(後ヵ)度事也、皇太后宮大夫(道綱)懇切被申入道殿、若被任內府、即辭退、其彼(後ヵ)相並可被任歟、左府闕者、攝政先成給、暫之被辭歟者、頗似有內儀(議)、皆是有時日歟、

十二月

廿二日、甲辰、○中略、除目ノコトニカヽル、十二月二十一日ノ條ニ收ム、可任丞相事、家人有疑氣、然而不實之事也、

藤原經通同実資ニ勅答ノ故実ヲ問フ

准三宮辭表ノ勅答使ニハ納言ヲ充ツル例アリ

(左)右將軍先任丞相之次、吾可任也、

○左大臣顯光、薨ズルコト、治安元年五月二十五日ノ條ニ、右大臣藤原公季ヲ太政大臣ニ、關白內大臣藤原頼通ヲ左大臣ニ、大納言實資ヲ右大臣ニ、同藤原教通ヲ內大臣ニ任ズルコト、同年七月二十五日ノ條ニ、小一條院王子敦昌等ヲ親王ト爲スコト、長元二年六月七日ノ條ニ見ユ、

十一日、丙申、月次祭、神今食、

〔日本紀略〕後一條院　六月

十一日、丙申、月次祭、神今食、

十九日、甲辰、入道前太政大臣藤原道長、上表シテ封戶及ビ准三宮ヲ辭ス、勅シテ聽シ給ハズ、

〔小右記〕○前田家本　六月

十九日、甲辰、宰相(藤原資平)來、即參入道殿(藤原道長)、小時歸來云、今日被上表、准三宮、(藤原經通)○中略頭辨從內、入道殿御表勅答使、可用何人乎、又勅答可納莫乎否事如何者、報云、勅答使多用中少將、而忠仁公(藤原良房)・貞信公(藤原忠平)・當時在俗日、准三宮勅答使用納言、貞信公御時中納言師輔(藤原)、○天慶二年三月二

勅答ハ上表ノ筥ニ納メテ返シ給フヲ例トス

勅答ノ上卿藤原公任

勅答使權中納言藤原教通

日ノ條參看、忠仁公勅答使中納言基經（藤原）、當時使中納言教通（藤原）、○長和五年七月五日ノ條參看、若可依件例歟、又勅答者納上表莒返給之例也、示遣此由了、使事尋見未尋出、引見故殿（藤原實頼）御日記、無所見用中少將、但宰相資平、爲藏人頭（左中將）之時、當時入道殿准三宮表勅答時○長和五年十月二日ノ第一條參看、所尋也、宰相資平、所注置也、仍且所報也、昨日頭辨來云、依勅答事可召上卿者、示可召他上之由、大納言公任（藤原）卿應召者、彼日（後カ）引見貞信公天慶二年三月三日御記云、使左衛門督（師輔）返賜昨表、被物如例者、○天慶二年三月二日ノ條參看、

貞觀十三年四月十八日（五カ）、忠仁公准三宮表勅答使、中納言基經、

天慶二年三月二日、貞信公任人・賜爵准三宮表、勅答中使中納言師輔、已上見表・勅答、

廿日、乙巳、○中略

頭辨經通示送云、昨日勅答使左大將教通卿云々、

〔日本紀略〕後一條院　六月

十九日、甲辰、入道前太政大臣准后上表、有勅答、

〔公卿補任〕七

前太政大臣從一位藤道長、五十四、六月十九日、上表、請止准三宮・二千戸、勅答不許、今度上表日、改觀字爲覺字、○大鏡裏書異事ナシ、

上表文作者善滋爲政

〔本朝續文粹〕四表上

入道後、謝准后儀表　文章博士爲政（善滋）作

沙彌某（道長）言、伏奉今月八日（五カ）勅命、賜臣以二千戸封及准三宮儀焉、亡考遁世（藤原兼家）之昔、初斯塵（脫アラン）、○正曆元年五月二十三日ノ條參看、聖上御宇之今、强追彼蹤、雪首雖除、氷尾忽踏、某中謝、須占幽寂以住觀念、避喧囂以學坐禪、而爲痾恙之易發、常問良藥於醫方、依筋力之漸衰、未致苦行於佛戒、況若栖野雲、則遠可隔鳳闕龍樓、若藏山月、則遙欲謝椒房蘭殿、雖思謗訕、暫以徒倚（從カ）、方今乖于出家之幽意、更賜希代之厚恩、草菴至窄、宮圍（闈カ）之准的非便、山厨不寬、二千之食邑奚納、加之所陪從者、衲衣之法侶也、誰有任人・賜爵之望、應儲蓄者、香花之什物也、曾無生民貢賦之要、既絕妄語於十戒、寧餙虛詞於一端、伏望、聖慮幸照蒙禁、早收無涯之恩波、無渴小流之定水、不勝懇迫屏營之至、謹抗表陳乞以聞、某誠惶誠恐、頓首々々、死罪々々、謹言、

寛仁三年六月十九日

上表

○道長ニ、舊ノ如ク三宮ニ准ジテ年官・年爵ヲ給ヒ、并セテ封二千戸ヲ給フコト、五月八日ノ條ニ、道長、再ビ上表スルコト、七月三日ノ第二條ニ見ユ、

丹波ノ百姓等、陽明門ニ到リテ愁訴ス、尋デ、同國守藤原頼任、私

賴任皇太后宮ノ下部ヲシテ捕ヘシム
百姓等外記局左衛門陣ニ逃入リテ叫呼ス

賴任藤原實資ニ陳辯ス
檢非違使ヲシテ十餘人ヲ拘留セシム

百姓等重ネテ愁訴ス

ニ之ヲ追捕シタルノ故ヲ以テ、入道前太政大臣藤原道長及ビ攝政内大臣同賴通ニ勘當セラル、

［小右記］○前田家本　六月

廿日、乙巳、○中略　大外記文義（小野）朝臣云、丹波州民等從西京來東都之間、於大庭、國司令皇太后宮下部（原妍子）捕搦之間、州民等走逃入外記局・左衛門陣呼叫、太狼藉、陽明門外帶弓箭者等相待州民云々、

頭辨經通（藤原）示送云、○中略　又云、丹波國百姓立公門訴訟、而國司以騎馬兵追捕、百姓來左衛門陣放呼言云々、

廿一日、丙午、○中略

丹波守賴任來云、依令搦立公門之百姓、入道殿（藤原道長）・攝政殿（藤原賴通）勘當殊重、是慮外事也、所辨太多、到左衛門陣頭・外記局等放呼言之者十餘人、仰檢非違使被召候云々者、但國司所辨似無所避、

七月

六日、辛酉、入夜宰相（資平○藤原）來、傳丹波守賴任所言之事、是可見入道殿氣色之由、今日重參上愁訴云々、只是一郡者云々、

實資道長ニ取成ス

愁狀ヲ召シテ百姓等ヲ歸國セシム

百姓ヨリ相撲人ヲ擇ビ取ル

賴任ノ勘當ヲ宥ス

賴任實資ニ深謝ス

賴任任國ニ下ル

賴任州民ヲ召シテ宅ノ垣ヲ改築セシム

七日、壬戌、早旦參入道殿、宰相同車、奉謁、○中略　丹波國事、國司以宰相（資）有令傳云之事、仍取氣色、深有恩氣、其次申案內、

九日、甲子、○中略　宰相（資）來、卽參內、臨夜又來、丹波訴人愁狀今日被召取、卽百姓等可罷歸由、被召仰了云々、

或云、不可罷歸云々、件愁人中、堪爲相撲人之者、以府（右近衛府）下部等令撰、○相撲召合ノコト、七月二十七日ノ條ニ見ユ、中略、

丹波守賴任應入道殿召參入、無勘當云々、又可罷下之由、左中辨經通召仰云々、賴任事、去七日蜜（密）々申入道殿、賴任以宰相度々云送深恩之由、

十日、乙丑、宰相（資）來、又臨夜來云、參入道殿、近召賴任朝臣被談雜事、賴任云、一日下官洩達事等之後、卽有喚參入、所被仰之事、如予示告、此喜不可云遣者、

十一日、丙寅、丹波守賴任今朝下國、早朝以宰相（資）有令申之事、

八月

十五日、己亥、○中略　丹波守賴任宅垣去年新築、而從昨日更壞改築、未得其意、從國差送

州民令築云々、去月州民參上愁訴條々事、今臨秋獲期改築數本垣、奇也恠也、

〔日本紀略〕後一條院　六月

十九日、甲辰、○中略　今日丹波國氷上郡百姓於陽明門愁申廿四个條雜事、

氷上郡ノ百姓二十四箇條ノ愁訴

廿日、乙巳、丹波守藤原頼任取搦之、

○丹波ノ百姓等、國守頼任ノ善狀ヲ上ルコト、九月二十二日ノ第二條ニ見ユ、

圓教寺燒亡ノ後昨年ヨリ圓融寺ニ於テ行フ

二十二日、丁未、一條天皇御忌、仍リテ、圓融寺ニ於テ、法華御八講アリ、太皇太后モ亦、弘徽殿ニ於テ、法華經供養ヲ行ヒ給フ、

〔小右記〕○前田家本　六月

廿二日、丁未、○中略

行香

參円融寺、故一条院御國忌、自今日被修御八講、円教寺燒亡後、○二年閏四月十二日ノ條參看、自去年被移行云々、○二年六月二十二日ノ條參看、宰相乘車後、假隨身府掌武晴（荒木）於途中落馬、衣裳悉染泥留了、仍召遣他物節了、攝政（藤原頼通）被參、以東廊爲休所、以西廊設上達部・殿上人座、有饗饌、諸卿著堂前了、右大臣（藤原公季）・余（藤原實資）參入、講說・行香、攝政只坐休廬、事了攝政出居上達部座、攝政已下參大内、右大臣一人不參入、大后（藤原彰子）於弘徽殿、奉爲一条院、令供養法華經、僧綱・凡

弘徽殿ノ法華經供養

講師永昭ノ釋經優妙ノ藤原頼通直衣ニ更メテ列座ス

參内ノ公卿

僧等十一人爲請僧、殊以已講永照（昭、下同ジ）爲講師、釋經優妙、落涙難禁、今日無行香、攝政改著直衣出居卿相座、如何々々、中納言已下取僧綱已下祿、更又權大夫頼宗（藤原）執永照祿、縫物、永照復座後、預一同祿、其後有此祿、須未復座前給縫物祿、秉燭後事了、今日先以僧都深円（尋）被齋食、又御齋食御膳等撤却間、時剋推移、後被始講說、今日參入卿相中納言行成（藤原）・教通（藤原）・頼宗・經房（源）・能信（藤原）・實成（藤原）・參議兼隆（藤原）・道方（源）・頼定（源）・公信（藤原）・三位中將道雅（藤原）・參議資平（藤原）、假隨身番長兼行追來内、

結願ニ參入ノ公卿

二十八日、癸丑、法興院法華御八講、

〔小右記〕○前田家本　七月

一日、丙辰、左大辨道方（源）示送宰相（藤原資平）云、頭□□動不來、○頭ノ字、原ト闕ク、京都御所東山御文庫本ニ據リテ補塡ス、相扶若宜者、明日先參法興院、□次可來者、○下略、定文ノコトニカヽル、本月二十九日ノ條ニ收ム、

二日、丁巳、左大辨道方持來一日定文幷具文書等、○本月二十九日ノ條參看、相逢談話、了相俱參法興院、宰相々從、合乘左大辨車、中納言教通（藤原）・參議兼隆（藤原）・道方・通任（藤原）・朝經（藤原）・資平參入、講說・諷誦等了行香、各々分散、

〔年中行事祕抄〕六月○前田家本　廿八日法興院御十講（或八）始事、五个日、五卷日上官參入事、

○發願ノ日、詳ナラズ、姑ク恒例ニ據リテ掲書ス、

二十九日、甲寅、公卿ヲシテ、諸國ノ新司幷ニ鎮守府將軍平永盛等申請ノコト、女眞賊追討ノ勳功ヲ賞シ、捕虜幷ニ漂著ノ高麗人ヲ勘問スベキコト及ビ石清水八幡宮寺別當定清幷ニ權別當元命申請ノコト等ノ三事ヲ議セシム、

〔小右記〕○前田家本　六月

十七日、壬寅、○中略頭辨經通（藤原）持來國々司十一个國、申請文云、攝政（藤原頼通）御消息云、可定申者、去年下給左大臣（藤原顯光）、遂不定申、依國々司愁申、被召返、更賜右大臣（藤原公季）、而被催諸卿、度々不參、仍被返進、○定ヲ延引スルコト、二年四月二十六日ノ條ニ見ユ、今更下給、預奇（傾カ）不少、件國解三通不勘續前例、仍給辨了、

十八日、癸卯、○中略頭辨經通持來宣旨等、或下宣旨、或勘宣旨、亦有新吏等申請事等、可定申者、下給辨令續文、

廿一日、丙午、今日帥書付（藤原隆家）脚力送之、高麗人未斤達、五月廿九日到著筑前國志摩郡、申云、去年三月十六日、從彼國康州、隨身米千石、參著京都、六月十五日罷歸之間、被放逆風、去月（マヽ）八日到大宋國明州、今年五月廿四日罷歸本國之間、遭逆風來者、依有大疑、

攝政藤原頼通ヲシテ諸國ノ申請ノ雜事ヲ定ム
藤原隆家高麗人未斤達ニ筑前志摩郡ヲ由來ル報ズ漂著ト稱スヲ疑ヒ有ルニ禁錮スヲ
藤原顯光左大臣ニ曩ニ定メシム
大臣公季ニ共ニ裁決シ同ジ政務ニ沿ヲ

禁固令訊問者、

廿二日、丁未、○中略左中辨經通下給和泉・加賀國司申請雜事解文、可定申者、卽仰可續文之由下給、又先日所下給將軍永盛（平）申文、雖有續文、又有可尋續之官符、今日下左中辨、件申文右府承之所令續、然而必有可續之官符之故、

廿八日、癸丑、大外記文義（小野）朝臣來、申明日定上達部故障等、大納言齊信（藤原）・公任（藤原）・中納言行成（藤原）・能信（藤原）・實成（藤原）・參議道方（源）・頼定（源）・朝經（藤原）可參入、今日令申右府、被稱御障、不告資平（藤原）歟、依余催廻歟、

廿九日、甲寅、參內、午刻、四宰相乘車後、先是中納言經房（源）參入、其後大納言齊信・公任・中納言行成・參議道方・朝經參入、定國々司・將軍永盛等申請雜事、和泉・伊勢・志摩・遠江・近江・陸奥・若狹・加賀・隱岐・備前・備後・因幡・又因幡・開發田事・讃岐、未定了間秉燭、後左中辨經通下給太宰府言上、筑前國・壹岐・對馬等嶋人・牛馬、爲刀伊人被敍害幷被追取解文・勲功者注申事、又處々合戰狀・勘問刀伊人及此度流來未斤達等文、石清水宮別當法眼和尙位定清等幷權別當法橋上人位元命申請文等、傳仰云、大宰言上解文中、注進勲功者、可賞哉否、又流來者幷初刀伊人等勘問

諸國ノ申請ノ雜事ヲ定ム
諸國ノ申請ノ解文ニ勘例ヲ續ガシム
平永盛ノ申文ニ官符ヲ續ガシム
實資公卿ヲ催ス
公季故障ヲ稱ス
諸國ノ申請ノ雜事ヲ定ム
申請ノ諸國因幡開發田
大宰府ノ解文及ビ勲功者ノ注進等ヲ議ス

藤原公任等勅符以前ノ勲功ナレバ賞スルニ及バズト爲ス

賞賚新羅襲來ノ時ノ先例ニヨリ賞スベシト申

賞セズンバ今後ノ士氣ニ關スベシ

向後ノ奬勵ノ爲ニ加フベキ賞ヲ加ヘスベシ

等事、可定申、又定清并元命等申請事、同可定申者、國々司・將軍等申請事等定申趣、其定文在別帋、抑勲功賞之有無如何、大納言公任・中納言行成申不可行之由、其故者、有勤之者可賞進由、雖載勅符、〇四月十七日ノ第二條參看、々々未到之前事也、余云、不可謂勅符到不、假令雖不募賞事、至有勲功者、賜賞有何事、寛平六年、新羅凶賊到對馬嶋、々司善友（文室）打返、卽給賞、〇寛平六年九月十七日ノ條參看、雖無被募、前跡如此、他事相同、就中刀伊人近來警固所、又追取國嶋人民千餘人并敘害數百人・牛馬等、亦敘壹岐守理忠（藤原）、而大宰府發兵士忽然追返、并射取刀人、猶可有賞、若無賞進、向後事可無進士歟、大納言齊信同余定、其後大納言公任・中納言行成及已次皆同、件等定文注付、大宰府言上、賊徒合戰之間雜事、一、府所注進勲功者事、右大將藤原朝臣・中宮大夫藤原朝臣（齊信）・權大納言藤原朝臣（公任）・權中納言藤ヽ朝臣（行成）・皇太后宮權大夫源朝臣（經房）・左大辨源朝臣（道方）・右大辨藤ヽ朝臣（原）・資平朝臣（實資）等定申ニ〇以上ノ分注八十三字ハ、當ニ大字ニ作ルベキナラン、云、先日賜勅符之日、被募功伐之間有功績輩隨其狀跡可加抽賞之由、而所注申者在勅符未到著以前、不可理必被行其賞歟、但散去餘衆非無向後之畏、爲勵後輩、聊可賞進歟、一、生虜者勘問事、同前諸卿等定申云、所注申之人、合戰間雖多中矢者、捕得賊徒唯三人也、而勘問之場、共陳申高麗國人之爲刀伊賊徒等被虜之由、〇四月二十七日ノ條參看、縱雖非刀伊國之人、同船送數日之間、盍見其案內、而不窮問其趣、難散麟結、又拷訊之者、不承伏時、度々可究拷

漂著ノ高麗人モ賊徒ノ疑アルニ依リ重ネテ尋ネ問スベシ

祈禱ヲ行フ要アリ

定清元命申請ノコト

寺社司ハ權官ト雖文書ニ加署スル常例メ難シ

大宰府注進ノ勲功者平爲賢等五人

警固所ノ合戰ニ賊徒ヲ射殺ス

文室忠光

賊ノ首ト戎具トヲ上ル

也、加之不注杖數、頗以不慥、重以窮問、可言上其旨歟、又言上流來高麗國人事、同前諸卿定申云、先日賊徒之中、多有高麗國人者、此間流來輩、非無事疑、安置別所、重令尋問、可經言上之由、可被下知歟、抑異國賊徒來候之恐、不可不慎、先後來觸、何不怖畏、方々可被祈禱歟、

石清水宮別當法眼和尙位定清等・權別當法橋上人位元命申請事、〇定清、元命ガ別當ヲ望ムヲ愁フルコト、元年十月二十日ノ第一條ニ見ユ、右大將ム々等定申云、內外并寺社司、雖權官者文書署了、是則恒例也、若猶執行之人有致雜怠、先被問其由、處科責後、可被定替人也、無故相並可難定申歟、太宰注進成勲功者、散位平朝臣爲賢・前大監藤ヽ（原）助高・傔仗大藏光弘・藤ヽ（原）友近・友近隨兵紀重方、

以上五人、警固所合戰之場、相戰者雖數多、賊徒正中件爲賢等矢、但重方不載先日府解、〇四月二十七日ノ條參看、事慥子細依不注申也、令尋實誠、追所言上也、

筑前國志麻郡住人文室忠光、

賊徒初來志麻郡之日、與所差遣兵士合戰之間、中忠光矢者多、又斬賊徒之首進上、并進彼戎具等、

多治久明
賊ヲ射殺ス
大神守宮
財部弘延
豫メ要所ニ兵ヲ配ス
二人ヲ生擒ス
前肥前介源知
捕虜ヲ進ム
大藏種材
兵船ノ完備ヲ待タズ率先シテ賊船ヲ追撃ス

同國怡土郡住人多治久明、
賊徒到來之間、於當郡青木村南山邊相戰、賊徒合戰、射取賊一人、斬其首進府、先日
解文難注子細、仍件久明自漏矣、
大神守宮・擬撿非違使財部弘延、
賊徒擊却之間、計要害所々、件守宮等差加兵士豫所遣也、而於筑前國志摩〔郡脱カ〕船越津邊合
戰之間、中件守宮等之矢者多、就中生捕者二人、但一人被疵死了、
前肥前介源知、
賊徒還却之間、於肥前國松浦郡合戰之間、多射賊徒、又生捕進一人、
前少監大藏朝臣種材、
賊徒逃却之日、依有兵船遲出之告、以少貳兼筑前守源朝臣道濟遣博多津、且令解纜、
且問遣其案內之處、奉使者等各申云、賊船數多、猶造兵船、一度可罷向者、其中種材
獨申云、種材齡過七旬、身爲功臣之後、○大藏種材ノ祖父同春實、藤原純友ノ誅伐ニ功アルコト、天慶四年五月二十日ノ條ニ見ユ、
待造了兵船之間、恐賊徒早逃、弃命忘身、一人先欲進向者、道濟以種材所言而爲善、
〔整カ〕
整出衆軍了者、依賊船之早去、誠雖無遂戰、種材之所言、忠節不淺、

壹岐講師常覺
賊ヲ擊退スルコト三度
源道方ヲシテ定文ヲ清書セシム
殺害及ビ掠取
筑前ノ被害志麻郡早良郡
怡土郡
能古島
壹岐島
島民四百人ヲ失ヒ三十五人ヲ殘スノミ

壹岐講師常覺、
賊徒三襲、每度擊返、後不堪數百之衆、一身逃脫、身雖非在俗、其忠不可隱、
右、去四月十八日給當府勅符云、箇裏若有攻戰忘身勲功超輩者、隨其狀跡、加以褒賞者、
言上如件、
事定了、子四剋退出、件定文未清書、仍書具可奉由、仰左大辨了、
筑前志麻郡人五百四十七人、被鈦害者百十二人、追取者四百三十五人、牛馬七十四疋頭、
早良郡人六十四人、男廿四人、女四十人、牛十頭、馬九疋、被鈦害者十九人、被追取者四十四人、被切食牛馬六疋、〔頭脫カ〕
怡土郡人二百六十五人、被鈦害四十九人、男・童幷四十三人、女六人、被追取二百十六人、男卅八人、女童幷百七十八人、牛馬卅三疋頭、牛十六頭、馬十八疋、
能古嶋人九人、女六人、童三人、駄四十四疋、牛廿四頭、
壹岐嶋
守藤原理忠被鈦害、被鈦害嶋內人民百四十八人、男四十四人、法師十六人、童廿九人、
女五十九人、被追取女等二百卅九人、
遺留人民卅五人、諸司九人、郡司七人、百姓十九人、

對馬島
銀坑燒損ス

對馬嶋
銀穴燒損事云々、
被敍害人十八人、被追取人百十六人、男三十三人、童・女合八十三人、童廿八人、女五十六人、○以上二行ハ童女ノ内譯ナラン、已上百三十四人、

上縣郡

上縣郡百卌一人、
被敍害人九人、被追取男女童幷百卌二人、男三十九人、女・童九十三人、

下縣郡

下縣郡男女幷百七人、
被敍害男女幷百七人、○百七人ハ九人ノ誤ナラン、被追取男女童九十八人、男三十人、女・童幷六十八人、

對馬島民損亡ノ總計

幷三百八十二人、男百二人、女・童二百八十人、
被燒亡人々住宅卌五宇、

牛馬ノ損害

爲賊徒被切喰牛馬百九十九疋頭、馬八十二疋、牛百十七頭、

七月

一日、丙辰、左大辨道方示送宰相云、頭□□動不來、○頭ノ字、原ト闕ク、京都御所東山御文庫本ヲ以テ補塡ス、相扶若宜者、明日先參法興院、○法興院法華御八講ノコト、本月二十八日ノ條ニ見ユ、□次可來者、余報也、一夜定文未持

道方實資ニ定文ヲ提出ス

來、仍所示送歟、
二日、丁巳、左大辨道方持來一日定文幷具文書等、相逢談話、
三日、戊午、○中略宰相云、今日有官奏、
大宰府言上定文有可改之事、仍返遣左大辨許、書改付使送之、○中略

一部ヲ更ニ書改メシム

道方書改文有可改之事、仍返遣左大辨許、書改付使送之、

藤原道長頼通共ニ實資ニ二箇年滯ガ留ノ案件ヲ敏速ニ定メ了リタルヲ賞讃ス

第一條參看、○七月三日ノ
攝政云、一日定太早、所感、入道殿(藤原道長)同被命此由、兩丞相二个年取籠文書不定申、而承仰後、不經幾日定申、太好者、可謂恩言、一勞歟、
四日、己未、○中略一夜定文等、今日可付左中辨、昨日依官奏事不來、
一日定文等付頭辨經通、
七日、壬戌、早旦參入道殿、宰相同車、奉謁、○中略命云、○中略、賀茂社ニ神領ヲ充ツルコトニカ、ル、七月五日ノ條ニ收ム、此次云、大臣達取籠國々司申請文等、二个年不能定申、而汝一日定申、甚賢事也、
十五日、庚午、左中辨下賜雜々宣旨、又傳仰一日定申國々司幷將軍申請事・石清水宮事等、國々・將軍等事如上達部定申、但因幡開發田事、可問忠貞(菅原)者、未知其故、○下略、元命ニ釐務

諸國申請ノ件ハ概ネ議定ニ隨フ

宣旨ヲ下スコトニカ、ル、七月十六日ノ第二條ニ收ム、
○諸國申請ノ雜事ヲ定ムルコト、二年八月九日ノ條及ビ本年三月四日ノ第二條ニ、

大宰府、女眞賊擊攘ノ旨ヲ飛驛言上スルコト、四月二十七日ノ條ニ、追討ノ功ヲ賞シテ、大藏種材ヲ壹岐守ニ任ズルコト、七月十三日ノ第一條ニ、大宰府、對馬判官代長岑諸近ノ高麗ヨリ歸國シタル由ヲ奏スルコト、同日ノ第二條ニ、元命ニ釐務宣旨ヲ下スコト、同月十六日ノ第二條ニ見ユ、鎭守府將軍平永盛ノ事蹟、便宜左ニ合敍ス、

〔權記〕長保三年七月

廿七日、丙申、候內、院(東三條院)案主永盛持來院竈生茸占方、○下略、全文ハ長保三年年末雜載、災異ノ條ニ收ム、

〔立坊部類記〕後朱雀院○注略ス、

外記日記

寛仁元年○中略

九月九日、甲辰、○中略今日、於右近馬場、試春宮坊帶刀騎射、勅使參議右大辨朝經(藤原)朝臣、春宮坊

○中略

從五位下守中務權少輔平朝臣永盛

平永盛ノ事蹟

官歷

東三條院案主

從五位下中務權少輔

春宮陣頭

鎭守府將軍

世系

平維敍ノ子

奉　令旨、件等人宜爲陣頭者、

寛仁元年九月九日

〔安西氏系圖〕永盛　號平群將軍、○中略寛仁二年正月二十三日任鎭守府將軍、正二位行權中納言兼左近衞大將藤原朝臣敎通奉(小字カ)

〔尊卑分脈〕平氏

維敍　右衞門尉、從四下、上野・常陸・□(陸)奥等守、實右大將時○藤原卿男、○以上七字、一本〔濟脫カ〕ニ據リテ補フ、

使貞敍　越中守、正五上、

盛永　中務少輔、從五下、鎭守府將軍、

使維輔

〔諸家系圖纂〕十一下　坂東諸流綱要　城越後

惟(維)敍　右內(門)尉、從四下、世繼(榮花物語)云、花山・一條御時人、爲貞盛(平)孫云々、上野・常陸・陸奥等守、

使貞敍　使、越中守、正五上、

女子　駿河守源忠隆妻、淸和末、重隆母、

寛仁三年六月二十九日

- 永盛　中務少輔、從五下、鎮守府將軍、
- 惟（維）輔

〔系圖纂要〕　四十六　平氏一　平朝臣姓

- 維敍（便）　母關口貞信女、右門尉、陸奥・常陸守、從四下、（マ）正
  曆元年五ノ十九卒、〇平維敍出家スルコト、長和五年五月十五日ノ條ニ見ユ、
- 貞敍（使）　越中守、正五上、
- 永盛（日根）　中務少輔、從五下、鎮守府將軍、
- 維輔（使）
- 女　駿河守源忠隆妻、

〔安西氏系圖〕　安西　平群朝臣姓

利方　秋田城介、永觀三年正月二十九日任出羽秋田城介、

- 永盛　號平群將軍、中務少輔、（マ）正五位下、母陸奥守平貞盛朝臣女、外叔父平維敏（敍カ）猶子、改平氏、寛仁二年正月二十三日任鎮守府將軍、
  - 賴義　筑後守、從五下、母前出羽守從五上平季信女、外祖父季信猶子、立二男、天喜五年十二月六日出家、法名蓮明、康平三年十二月六日卒、六十八歳、

實父平群利方

母ハ平貞盛ノ女

室ハ平季信ノ女

〔諸家系圖纂〕　十三之二　平群系圖拔萃

永盛　中務少輔、（マ）正五位下、號平群將軍、

母陸奥守從四位下平貞盛朝臣女、外叔父維敏（敍カ）爲子、實父秋田城介平群朝臣利方也、而祖父征（マ）東副將軍、天慶三平將門追（マ）討副將軍、常陸介正五位下平群郡大領也、號平群將軍、平群清幹之孫也、寛仁二年正月廿三日、平群朝臣永盛任鎮守府將軍、故世之人號平群將軍、

- 賴義　筑後守、從五位下、母前出羽守從三位（五カ）上平季信女、
  則外祖父季信爲子、立二男、然後外叔祖參議平親信卿更爲子、立列八男、賴義實者鎮守府將軍中務少輔正五位下平群朝臣永盛男也、永盛實父秋田城介平群朝臣利方者、花山院永觀三年正月廿九日、以式部巡任出羽秋田城介、〇中略　爰賴義齷齪之當初、入天台山首楞嚴院源信僧都之室、頗令習學止觀明靜之義道、

平群將軍ト號ス

子賴義ハ幼時源信ニ學ブ

吉正頼通第ノ寢殿ノ邊ヲ徘徊シテ捕ヘラル

右近衛府ニ拘禁ス

實資吉正ニ屢不善ノ行爲アルニ依リ頼通ノ救解ヲ辭ス

頼通重ネテ吉正ニ咎無キ旨ヲ實資ニ示ス

頼通師任等ヲ追卻ス

七月 小 丙辰朔 盡

二日、丁巳、大納言兼右近衛大將藤原實資、ソノ隨身右近衛秦吉正ヲ勘當ス、尋デ、攝政内大臣藤原頼通ノ救解ニ依リテ、之ヲ宥ス、

〔小右記〕○前田家本　七月

二日、丁巳、○中略資高朝臣、〔云脱カ〕隨身近衛秦吉正□□〔去夜カ〕○以上二字、殘畫依□□〔女事カ〕到〔藤原頼通〕攝政殿寢殿北面徘徊、侍所男等出來、捕搦打調間、稱右大將〔藤原實資〕隨身、仍追弃云々者、乍驚問其由、無所避、事似實正、即召遣俊〔橘〕遠朝臣、示事由、秉燭後來、傳攝政〔頼通〕命云、去夜事不知事也、早免勘當、可召仕者、御消息旨太多、不能具記、不可免使之由令申了、先是吉正遣府全〔舍カ〕令候、至今召仰事、女事、以可追却、度々有不宜事等、

三日、戊午、○中略宰相〔藤原資平〕來、小時退出、黄昏來云、隨身吉正事申攝政〔頼〕、命云、彼夜無殊事、而處勘責、不可然、昨示可免之由、不承引如何、又式部錄師任・厶丸二人知其事、而不申其名、令尋問處、聞隨身由、即不申之事召勘追却者、至有可免召之由、不可申左右、只於近處依致濫吹、重所召勘、又可從追却、今有指命、可召仕之由、秉燭之後、以宰相令申、即參内、攝政〔頼〕被參入道殿〔藤原道長〕、仍退歸、明旦可申之由相示了、極熱令候府戸屋不便事也者、仍先可出由、差隨身仰遣了、

吉正ヲ宥免ス

四日、己未、○中略宰相〔資平〕來、奉攝〔參カ〕政〔頼〕殿、小時來云、隨身吉正此度殊優可召仕者、仍仰武〔荒木〕晴令召遣了、○是ノ本、蠹蝕ノ箇所アリ、京都御所東山御文庫本ヲ以テ補塡ス、

三日、戊午、官奏、

〔小右記〕○前田家本　七月

三日、戊午、○中略宰相〔藤原資平〕云、今日有官奏、

四日、己未、○中略一夜定文等○諸國ノ新司等申請ノコトヲ定ムルコト、六月二十九日ノ條ニ見ユ、今日可付左中辨〔藤原經通〕、昨日依官奏事不來、

入道前太政大臣藤原道長、重ネテ上表シテ、准三宮及ビ封戸ヲ辭センコトヲ請フ、尋デ、三タビ上表ス、

〔小右記〕○前田家本　七月

三日、戊午、○中略入道〔藤原道長〕殿今日上表云々、

〔公卿補任〕七　前太政大臣從一位藤道長、五十四、六月十九日、上表請止准三宮・二千

第三度上表勅答アリ

天台座主慶圓ハ延暦寺以東ノ内ニ至ル藤原道長由ヲ陳訴ス亦諸陵寮モ田戸陵ヲ除クベキ由ヲ

戸、○略中七月三日修狀又請、

〔日本紀略〕後一條院　七月

廿一日、丙子、前太政大臣上表、有勅答事、

○道長、初度上表ノコト、六月十九日ノ第一條ニ見ユ、

四日、己未、廣瀨・龍田祭、

〔日本紀略〕後一條院　七月

四日、己未、廣瀨・龍田祭、

五日、庚申、先ニ賀茂社ニ寄セタル山城愛宕郡ノ八箇郷ヲ、上下兩社ニ分チ充ツベキ由ノ太政官符案ヲ作ル、尋デ、同上社々司、同郡賀茂郷内社領ノ、公領ニ入レル由ヲ愁フ、

〔小右記〕○前田家本　二年十二月

廿日、戊申、左少辨經頼（源）來、傳太閤（藤原道長）命云、山座主（慶圓）云、埴川以東天台四至內也、而可爲神領者、亦諸陵寮奏狀云、被除（可脫カ）陵戸田者、令申云、天台四至定有官符歟、可令尋勘彼官符、諸陵（寮脫カ）奏狀不申陵名、可令問之也、抑四至官符在天台歟、又官符長案在官底歟、亦山城國

奏ス

延暦寺四至ノ古官符ヲ文殿ニ求メ得ズ之ヲ寺ニ求ムル同

法印院源志頭原及ビ埴川以東ハ延暦寺領ナリト證言スル

山城國ヲシテ延暦寺四至及ビ陵戸田ヲ注進セシムル西院源注進ノ塔領四至文

道長ノ決裁

知四至歟、各可尋、又縱雖云四至內、至田畠可爲神領歟、只以年來國司所行之例、社司可同行也、如此之事一定後可令作官符、々々作了、先覽太閤、隨彼命可及捺印也、

廿九日、丁巳、○略中左少辨經頼持來勘宣旨、經頼云、天台四至官符令尋文殿、不能尋出、仍問遣座主許、報云、預文書之所司法師他行、過修正二七日尋問可申事由、但大殿（道長）御八講間、○二年十二月十四日ノ條參看、法印院源云、志豆原天台領、亦埴川東同四至內也、早可申大殿者、然者以令申之由可傳申者、志豆原者西塔領由所聞也、但埴川以東四至內事不覺事、令尋問、追可申也、又可被問遣法印所者、余答云（藤原實資）、從官更不可問法印、座主可尋問歟、

○是ノ本、以前ノ記、燒損ノ箇所アリ、京都御所東山御文庫本ヲ以テ補塡ス、

三年二月

十一日、己亥、○略中

左少辨經頼持來山城國司注進天台四至限幷諸陵々戸田、又法印院源注進西塔領四至等文、四至合山城國司注進文、見了示可令覽大殿之由、

十六日、甲辰、左少辨經頼云、前々天台申四至幷八瀨・横尾等爲天台領事、日者依穢不申大殿、今日申事由、命云、山城國司注進文・法印院源書狀等見給了、山城國司幷院源

八瀬・横尾ハ延暦寺領タルベシ　埴川以東ハ確證ヲ要ス

八瀬等ノ田畠ノ田租地子ニハ國司就キテ注進ニ從フベシ

鞍馬寺解文藤原寺解文原實資四至延暦寺官符四至ノ田古少辨源經等ヲ左ヲシテ道賴ヲシテ長セ進覽セシメント

書無相違、至件兩處、可爲天台領、其外堀川（埴カ）以東爲山領、無指事不可然、且以此由、仰遣山座主并院源所、令承知其由可宜、但八瀬・横尾等住人、任例可爲天台役人者、余申云、八瀬・横尾等可爲山領者、田畠如何、辨云、此事尤可有案、只今申案內者、歸退早來云、以此趣申大殿、命云、所示可然、彼八瀬等田畠、租稅共納天台歟、將只納地子、至租辨國歟、問國司、隨彼申重可被尋也、余仰辨云、申租稅共物（納カ）之由、可尋省符、只申納地子之由者、至官物、早可令辨於社之由、可仰下歟、但先召問國司、隨注申可被定下也、

三月

廿日、丁丑、左少辨經賴來、依有所勞不相遇、以人令傳進延暦寺四至官符并山城國注申西坂下田畠文・鞍馬寺解文・田畠施入書等、件文等見了返給、至延暦寺四至官符・山城國注進西坂田畠（下脫カ）文可令覽大殿、鞍馬寺解文者更不可經御覽、官省符在山城國歟、如件施入文所申可然、可仰上御社司之由示仰了也、

五月

一日、丁巳、今日入道（道長）殿三十講始、○五月一日ノ條參看、未剋許參入、坐御堂南廊、被招入簾中清談、其次申賀茂御社四至事、天台申西坂西（マヽ）四至事等也、經賴朝臣未申其事者、天台四至官符令勘申了、而未經御覽之由、承驚而已、命云、經賴在國（近江）、今明可參上云々、

十六日、壬申、○略中

左少辨經賴來云、天台四至事、昨日申入道殿、命云、任官符可爲天台領、件四至內田三町餘・畠若干、爲禪院燈明料之由、山城國注進、雖無官省符、爲禪院領年紀多積、仍可爲天台領、又八瀬・横尾住人、依四至內天台所召仕者、不可改數年例者、卽可作官符之由、仰辨了、但官符草可見、又可令覽入道殿、四至古官符文云、西限下水飲者、謂下水飲則是禪院云々、○古官符トハ仁和元年十月十五日ノ太政官符ヲ指セルナラン、

廿八日、甲申、○略中　左少辨經賴持來賀茂神鄕官符、太違例文多、令改直、件官符給民部省、直改後、見畢令淸書、可令覽入道殿、

四至內田畠町數ハ官符無シト雖省例ニ任セテ寺領ト爲ス

西ハ下水飲ヲ限ル

實資官符案ヲ檢シテ訂正セシム

七月

一日、丙辰、○略中

左少辨經賴持來神鄕官符草□入道殿命云、可作官符之趣、先日申□、爲法師（藤原道長出家スルコト、三月二十一日ノ條ニ見ユ）、見神事官符、有所憚者、仍仰可作官符之由畢、昨日推爲、下給經官符ヲ憚ル

道長出家シタレバ神事ヲ見ルヲ

賴、々々云、最可直之事等也、今日乍推帋持來、又余云、可作官符之由仰下之後、以彼草猶候氣色、可令覽者也、

仰下之後經覽、可無事忌歟、爲□□重所令申也、近代之事如履虎尾、

五日、庚申、左少辨經賴云、神郷官符案覽入道殿、命云、甚善者、經賴云、至今可請印歟者、答可令早捺印由、今日不宜日、仍不捺印、又有可一定事、其可請印、

七日、壬戌、早旦參入道殿、宰相（藤原資平）同車、奉謁、山城國司幷賀茂上御社司等各有所申、其事者、上御社者坐賀茂郷、以件郷田若干爲御手代、而此度被堺之間、入公郷方、又神戸同在公郷、猶須皆可被入神領也者、國司云、神郷・公郷已被堺限了、仍公郷方田官物令勘徵之處、社司相妨不令徵、社司所爲理不可然、觸事由于左少辨經賴、申云、社司所行太以不當者、余所思者、素御手代田幷神戸可爲神領、而被奉郷々之後、被留彼御手代田等爲公領、不宜事也、須問社司、令進社解、以彼解被定仰宜歟、若猶可爲神領者、引彼解別給官符可宜、以此趣申案内、命云、如社司申、尤可然、但令進子細解文、可被定仰、若在公郷中、以御手代田幷神戸可爲神領、至其外有被新堺之限、仍可爲公領歟者、

八日、癸亥、賀茂上御社司申神田等事、仰左少辨經賴、但件郷田官物不可暫徵之由、令

寛仁三年七月五日

傳仰國司、社司言上解文之後、可隨被定下也、

九日、甲子、○中略

（裏書）「太政官符　民部省

應以山城國愛宕郡捌箇郷奉寄賀茂上下大神宮事

四至　東限延暦寺四至、南限皇城北大路同末、西限大宮東大路同末、北限郡堺、

御祖社肆箇郷

蓼倉郷　栗野郷　上粟田郷　出雲郷

別雷社肆箇郷

賀茂郷　小野郷　錦部郷　大野郷

右、去年（寛仁元年）十一月廿五日行幸彼社、○元年十一月二十五日ノ條參看、以件八郷被奉寄了、今商量便宜、平陵戸等田幷左近衛府馬場・修理職瓦屋・其守丁役人、皆是百王之通規、曾非一時之自由、仍任舊跡、不敢改易、加以延暦寺領八瀨・横尾兩村田畠等、代々國宰以租稅宛禪院之燈分、令住人勤彼寺之役者、久作佛地、何爲神戸哉、但除社素所知之神山・採葵

寛仁三年七月五日　二九九

山之外諸山者、或是寺社領來之處、或又公私相傳之地、自歷年紀、難輙停止、亦至于戸田・治田・造畠等者、社司・領主共撿公驗、租分令納於社、地子可免本主、此外田地・官物・官舍等類、自今以後、悉爲神領、卽以其應輸物、永宛恒例祭祀・神殿雜舍新・上下枝屬神社・神館・神宮寺等修造及臨時巨細之新矣、正二位行大納言右近衞大將藤原朝臣（實資）宣、奉　勅、依件分宛者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

（左）右少辨正五位下兼行近江守源朝臣（經頼）　正五位下行左大史兼播磨權介但波朝臣（奉親）

寛仁二年十一月廿五日」

十一日、丙寅、〇中略　左少辨經頼持來賀茂上御社司解文、是注申御手代田二町・神戸田廿七町幷西南堺等、依何文注申乎、可令尋問、亦仰國司可被勘文簿之事等仰之、

八月

十一日、乙未、〇中略

左少辨經頼持來賀茂上御社西四至外田畠、國司・社司等共注進文、〇下略、賀茂上社々司、畠ノコトニ就キテ申スコトニカカル、十一月十四日ノ條ニ收ム、八瀨・横尾兩村内ノ田

戸田治田等ハ社ヲ賀茂ヲ納メヲ本ニ租ニ地子ニ主ニシムト官物ノ舍田地以外ノ官物等ハ悉爲神領及ビ爲シク祭祀料ニ充テシム修造ニ

上社々司解
御手代田二町
神戸田二町
十七町

山城國司及ビ上社上社々司ノ西ノ田畠ヲ四至外ノ田ノ注進ス

〔類聚符宣抄〕

一　被奉公郡於神社事

太政官符民部省

應以山城國愛宕郡捌箇郷奉寄賀茂上下大神宮事

四至　東限延暦寺四至、南限皇城、西限大宮東大路同末、北限郡堺、北大路同末、

御祖社四箇郷

蓼倉郷　栗野郷　上粟田郷　出雲郷

別雷社四箇郷

賀茂郷　小野郷　錦部郷　大野郷

右、去年十一月廿五日行幸彼社、以件八郷被奉寄了、今商量便宜、平均田圃、所定如件、抑件諸郷所在神寺所領及齋王月新・勅旨・濕池・埴川・氷室・徭丁・陵戸等田幷左近衞府馬場・修理職瓦屋・其守丁役人、皆是百王之通規、曾非一時之自由、仍任舊跡、不敢改易、加以延暦寺領八瀨・横尾兩村田畠等、代々國宰以租稅宛禪院之燈分、令住人勤彼寺之所役者、久作佛地、何爲神戸哉、但除社素所知之神山・採葵山之外諸山者、或是寺社領來之處、或又公私相傳之地、自歷年紀、難輙停止、亦至于戸田・治田・造畠等者、社司・領主共撿公驗、租分令納於社、地子可免本主、此外田地・官物・官舍等類、自今

以後、悉爲神領、卽以其應輸物、永宛恒例祭祀・神殿雜舍幷上下枝屬神社・神館・神宮寺等修造幷臨時巨細之新矣、正二位行大納言兼右近衛大將藤原朝臣實資宣、奉勅、依件分宛者、省宜承知、依宣行之、符到奉行、

左少辨正五位下兼近江守源朝臣〔行脫カ〕　正五位下行左大史兼播磨權介但波朝臣

寛仁二年十一月廿五日

〔鴨脚秀文文書〕乾　○山城

鴨御祖太神宮

代々聖主勅願祭奠幷御起文遷宮之年記新加崇重御遊神領御寄附之事

○中略

一、後一條院御宇、寛仁二年、〔朱書〕「一條以北境內猶以御寄附之所々」

被奉寄四箇郷、所謂山城國愛宕郡〔參倉郷・栗栖郷・粟田郷・出雲郷〕、等也、委細之勅願有宣旨者也、〔朱書〕「此時別雷社四箇郷、此□下上社仁御寄進、以上、」

〔長秋記〕長承元年五月

十五日、甲戌、○中略、陣定ノコトニカヽル、長〔内大臣藤原宗忠〕承元年五月十五日ノ條ニ收ム、大臣仰官人召取文〔書カ〕云、次第下之、史秉燭、

下社領內ニ吉田社領田四段アリ長和四年ノ官符アリ後年ニ至リテ官下社々司官省符無シトシテ官物三斗ヲ徵ス

寛仁度ノ寄進ハ私領モ國司三代ノ免除ヲ得タルヲ地ヲ除ク

陣定

〔左大辨藤原實光〕大辨開文讀之、

一、鴨御祖社司與吉田社司相論御供田四段間、吉田社司申云、件田粟田〔藤原左衛〕左大臣爲長者、以私領施當社、隨長和四年可爲社領之由、則官符、數百歲間無牢籠所領掌也、其旨見所進長和官符、而鴨御祖社司乖此旨、始自去年〔天承元年〕致其妨云、鴨〔社脫カ〕司申云、寛仁二季、分一郡所被寄進當社、其中雖有神社・佛寺領、非官省符所者、尙於官物三斗辨當社、於地子辨本所也、而件吉田領本官省符由不見、仍所徵官物三斗也、仍進其官符案等者、右宰相中將〔藤原〕成通朝臣發語定申云、以兩方所進文書、被下法家、理非勘決後、可被裁許歟、○中略〔源師時〕下官獨申云、所論賀茂・吉田兩社司、各募於神威、所進長和・寛仁二歲符、共出自綸言、理非難決、左右爭定、先於官底、對問論人、比校官符、其後可被裁許歟、右兵衛督〔藤原顯頼〕定申云、吉田社司之所進者、左大辨續之書之、長和寫官符〔指カ〕張坪奉免、其狀云、粟田左大臣爲長者時、分私領所寄進也者、鴨御祖社司所進寛仁二年官符、一郡皆進、其狀云、於社領・寺領幷氷室寄人・〔丁脫カ〕右近馬場守〔左〕等作田・比叡山四至等免除、其外雖私人領、於三代國司免除所、非自專云々、如此狀云、〔著カ〕雖有寛仁一郡所進符、於長和奉免地吉田社可領知歟、倩案鴨社司申狀云、所免之官省符不輪〔輸〕田也、於地子領地、任官符、當社徵三斗官物例也者、

四至内ニ鞍馬寺等ノ敷地ヲ含ム

此事尤可被對決、傍例顯然歟、
長和官符粟田左大臣長者云々、件人不分明、不審也、符案皆在官底、被比挍時眞僞無其
隱歟、仍所申此旨也、

〔瀨多文書〕○國立國會圖書館本

記錄所

鞍馬寺住侶等越訴申言狀

右件堺事、住侶等捧安和二年宣〔官〕符・嘉禎二年官符等、寺邊五百町爲寺領致管領訖、而賀
茂社去應安五年、掠給勅〔敕〕載、致其妨之條、不可然之由、越訴申之處、社司等備寛仁二年
官符○中略等、於貴布禰河以東、一鳥居以西者、往昔以來社家進止之旨爭之、仍被召決
兩方之處、○中略如社家所進之寛仁官符者、鞍馬寺敷地以下、雖可爲社領四至内、一條以
北寺院佛閣傳領之段、傍例繁多之上、作佛地、何爲神戸哉、或寺社領來處、或公私相傳
之地、自歷年紀、難輙停止之、彼官符文言載而炳焉歟、而可謂寺家證驗哉、加之、如格
條、占請田地之輩、偏限四至不論町段、是以檢四至者、則涉官舍人宅、檢町段、則不滿
四至内、求之政途、理不合然、望請、自今以後、占請之地、一定町段、不依四至云々、

藤原顯光故障アリ同公季上卿ヲ勤ム

雖號寛仁奉寄之四至内、難足社領一圓之准的哉、○中略仍言上如件、

永和二年十一月十九日○署所略ス、是ノ文書、宮内廳書陵部所藏記錄所文書ヲ以テ校正ス、

○賀茂社ニ行幸アラセラレ、山城愛宕郡ヲ同社ニ寄セ給フコト、元年十一月二十五
日ノ條ニ、陣定ヲ行ヒ、同郡ノ八箇郷ヲ、上下社ニ分チ充ツベキコトヲ議スルコト、
二年十一月二十五日ノ第二條ニ、上社々司、神領ニ就キテ愁フル所有ルニ依リテ、
使ヲ遣シテ實檢セシムルコト、本年十一月十四日ノ條ニ見ユ、

造宮賞常陸介藤原惟通宮々御給女眞賊追討ノ賞

十三日、戊辰、直物、敍位、小除目、

〔小右記〕○前田家本　七月

十三日、戊辰、今日直物云々、取案内資業〔藤原〕朝臣、報云、左府〔藤原顯光〕被申故障、仍右府〔藤原公季〕被承行、
○中略
子剋許宰相〔藤原資平〕自内退出云、直物次、有敍位・除書等、敦賴〔菅野〕・惟通〔藤原〕四品、敦賴造宮賞、○造宮敍位ノコト一二年七月十二日ノ第一條ニ見ユ、未被定功過惟
通任常陸者、敍一階若然歟、俊遠〔橘〕・成順〔高階〕、加階、宮々御給、種材〔大藏〕任壹岐守、○壹岐守藤原理忠、女眞賊ニ殺害セラル、コト四月十七日ノ第二條ニ見ユ、
若所望歟、鎭西武者非忽無所望者歟、仍被任歟、○大藏種材等、女眞賊ノ追討ニ功アルコト、四月二十七日及ビ六月二十九日ノ條ニ見ユ、

寛仁三年七月十三日

造八省延祿堂所申請ノ茨田光明ヲ國用位記ヲ作ラシム

藤原隆家ハ賞ニ與ラズ

大藏種材ヲ壹岐守ニ子弘光ヲ大宰監ニ任ズ

十七日、壬申、宰相（資平）云、章信（藤原）云、昨日〇中略右大臣（公季）於陣〇中略造八省延祿堂所〇八省院延祿堂顚倒スルコト、長和五年三月二十三日ノ第一條ニ見ユ、申請茨田光明位記可作之事、仰大内記義忠（藤原）朝臣、下賜名簿・本宣旨書等、但可作國用位記事、同仰之、

〔日本紀略〕後一條院　七月

十三日、戊辰、直物、

〔大鏡〕四〇東松本三氏本　一、内大臣道隆

〇上略、藤原隆家、女眞賊ノ來寇ヲ擊攘スルコトニカヽル、四月二十七日ノ條ニ收ム、おほやけ、大臣・大納言にもなさせ給ぬへかりしかと、御ましらひたえにたれは、たゝにはおはするにこそあめれ、このなかにむねと射かへしたるものともしるして、公家に奏せられたりしかは、〇六月二十九日ノ條參看、みな賞せさせたまひき、種材は壹岐守になされ、其子（大藏光弘）は大宰監にこそなさせたまへりしか、この種材かそうは、純友（藤原）うちたりしものゝすちなり、〇種材ノ祖父大藏春實、藤原純友ヲ追討シテ功アルコト天慶四年五月二十日ノ條ニ見ユ、

〔應德元年皇代記〕後一條　□月□日、大藏種材依件賊徒追討賞拜任、

大宰府、對馬判官代長岑諸近ノ竊ニ高麗ニ渡リ、女眞賊ニ捕ヘラレタル女十人ヲ率キテ歸ル由ヲ申ス、尋デ、同府ニ官符ヲ下シテ、警備ヲ嚴ナラシム、

大宰權帥藤原隆家書狀ヲ上ル

〔小右記〕〇前田家本　八月

三日、丁亥、〇中略

（藤原隆家）都督書云、云々、副府解幷内藏石女申文案、注裏、

十日、甲午、〇中略

（裏書）「太宰府解　申請〻〻、

大宰府解

言上對馬嶋判官代長岑諸近越渡高麗國、隨身爲刀伊賊徒被虜女拾人歸參狀

女二人ハ筑前志摩郡安樂寺領板持莊人

二人筑前國志摩郡安樂寺所領板持庄人、卽進府、

一人病船中、不參府、

八人對馬嶋人、

八人ハ對馬島人

二人到來之間、病惱死去、

途中二人病死ス

五人又病惱、留本嶋、

一人進府、

副進賊虜女内藏石女等申文、

右、得對馬嶋去六月十七日解狀、同廿一日到來偁、得管上縣郡伊奈院司同十六日解狀偁、刀伊賊徒到來之間、〇四月二十七日及ビ六月二十九日ノ條參看、判官代諸近幷其母・妻子等被虜、而賊船還寄當嶋之日、諸近獨身逃脫罷還本宅、然間、以昨日夜盜取小船逃亡已了、定知爲思當島之厄、罷渡陸地歟、早被言上大府、將被召返者、嶋内人民爲賊被虜、僅所遺民又渡他處、若無被召返之定、愁遺民不可留跡、望請府裁、被仰下管内諸國、尋在所、逃亡、仍其由言上先了、而以今月七日諸近到來、申云、刀伊賊到來之日、諸近母・伯母・妹母（衍カ）・妻子・從者等幷十餘人、被取乘賊船、慮外往反筑前・肥前等國、但賊徒還向之次、寄對馬嶋、爰諸近獨身逃脫、罷留本嶋、而竊惟、離老母・妻子獨雖存命、已有何益、不如相尋老母、委命於刀伊之地、欲申事由於嶋司、渡海制重、仍竊取小船、罷向高麗國、將近刀伊境、欲問□（老母カ）之存亡、爰彼國通事仁禮罷會、申云、刀伊賊徒先日到來當國、敘人掠物、欲相戰之間、逐電赴日本國、仍艤舟儲兵、相待之間、無幾還向、重殘滅海邊、仍豫於五箇所儲舟千餘艘、所々襲擊、悉以擊敘了、其中多有日本國

對馬島解
上縣郡伊奈
院司諸近母妻等
ト共ニ女眞ヘ捕レリ逃ス
諸近獨レテ歸島
六月十五日夜小船ニ乘リテ出奔ス
對馬島七月七日歸來セル由
諸近ヲ報ズノ申狀
老母ヲ尋ネテ高麗ニ渡ル
女眞先ヅ高麗ヲ襲ヒ日本ヘ向フ
高麗女眞ノ來襲ヲ再度ノ箇所ニ邀撃シテ全ク滅セシム

之虜者、彼五个所之内、且三箇所々進三百餘人也、待集遺二箇所之人、乘船可被進日本國之由、賊徒等到著高麗地之間、取載强壯高麗人、以病羸低弱者、皆入海了、海母（女カ）幷妻妹等皆以死了者、只會伯母一人、欲罷還本土之處、本朝□□（向異カ）國之制已重、無故罷還者、定可當公譴、縱雖得書牒、無指證、更不可被信用、因之受乞日本人、爲證件人、欲罷還□□處、高麗國且以賊虜十人充給、抑諸近依思老母、已忍罪過、知母死亡、至于今者、進身於公應（聽カ）、左右可隨裁定者、投若（マヽ）異國、朝制已重、何況近日其制彌重、仍召諸近身、相副件女三人、差嶋使前掾御室爲親、進上如件者、謹檢案内、異國賊徒刀伊・高麗其疑未決、今以刀伊之被擊、知不高麗之所爲、但新羅者元敵國也、雖有國號之改、猶嫌野心之殘、縱送虜民□□（不可カ）爲悅、若誇勝戰之勢、僞通成好之便、抑諸近所爲、先後不□（當カ）也、越渡異域、禁制素重、況乎賊徒來侵之後、誠云、以先行者爲與異國者、而始破制法而渡海、無書牒而還、召（若カ）以將來虜者、優而無坐其罪、恐不（マヽ）後窓愚民、偏思法緩輙渡海、爲懲傍輩、禁候其身、須待高麗國使申上其案内、然而來不難知、旬日欲移、下民之言誠難信、境外云爲非可默爾、仍注在狀、言上如件、謹解、

救出シタル日本人數百スヲ近ク送還シベシ
賊ハ强壯者ヲ捕ヘ病弱者ヲ海ニ投ズ
諸近ノ母妻等既ニ死ス
渡海ノ嚴制アルトシテ以ヲ女眞ヲ證人ヲ同伴十人ヲ歸還スル
大宰府ノ意見
賊寇ハ高麗ノ所爲ニ非ルヲ知ル
但シ敵國新羅ノ後ナレバ心ヲ許ス
諸近ノ罪セズ
諸近ノ難ノ禁ヲ保シ渡海ヲ許チ諸近ヲ禁錮ス

内藏石女等ノ申文

賊船ニ捕ヘラル

賊ノ死者多シ

賊船高麗ニ著岸ノ後未明ニ上陸シ掠奪ハ島ニ隱レ夜ハ海上ニ漕去ル

高麗ノ軍船數百賊ヲ襲フ

石女等海ニ投ゼラレ高麗船ニ救助セラル

高麗船ノ構造

鐵ノ衝角アリ

大石ヲ以テ賊船ヲ破ル

高麗石女等ニ驛馬ヲ給シテ優遇ス

高麗官使石女等ヲ優遇ハ日本ヲ尊重スルノ故ナリト言フ

金海府ニ集ル日本人三百人殘リノ者ヲ合セテ送還スベシ

藤原頼通同實資ヲシテ報符ヲ下サシム

警固祈禱及ビ兵粮催促等ノコト

寛仁三年七月十三日

寛仁三年七月十三日

内藏石女等解申進申文事

注申被追取刀伊賊徒、罷向高麗國海路雜事幷歸參本國案内等狀

右、石女安樂寺所領筑前國志麻郡板持庄之住人、阿古見對馬嶋住人也、而各被追乘賊船、日來之間見其案内、所々合戰之日、石女等罷乘兩船之内、中矢賊徒五人也、而著對馬岸之間皆以死了、此外傍類船、被疵死亡者追日不斷、爰罷著高麗國岸之後、賊徒等、毎日未明之間上陸地、滅海邊・別嶋等之人宅、運物取人也、晝則隱嶋々、撰取强壯之者、打致老衰之者、又日本虜者之中病羸□〔者カ〕皆以入海了、夜則各々漕忿去也、如此送廿餘箇日之程、五月中旬之比、高麗國兵船數百艘襲來擊賊、爰賊人等勵力雖合戰、依高麗之勢猛、無敢相敵之者、即其高麗國船之體高大、兵仗多儲、覆船致人、賊徒不堪彼猛、船中致害所虜之人等、或又入海、石女等同又被入海浮浪、仍合戰案内不能見給、無幾有高麗船扶了、即□勞所令蘇生也、但見被救乘船之内、廣大不似例船、□造二重、上立櫓、左右各四枝、別所漕之水手五六人、所□□士二十餘人許、不懸檝、又一方七八枝也、船面以鐵造角、令衝破賊船之料也、舟中儲雜具、鐵甲冑・大小鉾・熊手等也、兵士面々各々執持也、又入大石打破賊船、又他船長大已以同前、合戰事畢之後、石女等一類卅餘人各給驛馬、迎金海府之途中十五箇日、毎驛以銀器供給、其勞尤豐、官使仰云、偏非勞汝等、唯奉尊重日本也者、著金海府之後、先以白布各充衣裳、兼以美食給石女等、六月卅个日之間、令安置彼府、爰對馬嶋判官代長岑諸近、爲尋訪被追取賊徒之母妻子等、到來高麗國、聞母子之死□〔亡〕□〔欲〕歸本朝、仍爲證據申請虜女十人、離岸之日、彼朝公家宛給歸粮料人別白米參斗・干魚卅隻、兼給酒食、但金海府所召集之日本人幷三百餘人、是三个所軍船所進也、殘二个所人等來集之後、差使可返進之由、且言上公家者、往反案内、言上如件、

寛仁三年七月十三日　　多治比阿古見

内藏石女

○本裏書、八月十日條ノ末ヨリ三日條ノ初ニ亙レリ、

廿一日、乙巳、○中略藏人左〔右〕少辨資業（藤原）含攝錄〔籙〕命云、大宰府言上解文等定申度解文・今般解文等、事、又（藤原頼通）々可警固要害事、祈禱事等、如先日報符可勤行事、新羅人能可守護事、兵粮糒未進可催納事可給官符者、即仰下了、府解等上達部定文同□〔下〕給也、

請印

主上ノ奉爲ノ三種祈願ノ一

廿三日、丁未、○略中 右少辨資業持來給大宰之報符、仰可令捺印之由、

○大宰府、女眞賊ノ來寇ヲ飛驛言上スルニ依リテ、陣定ヲ行ヒ、大宰府ニ勅符ヲ下シ、又、諸道ヲシテ、要害ヲ警固セシメ、幷ニ諸社寺ヲシテ祈禱セシムルコト等ヲ議定スルコト、四月十七日ノ第二條ニ、大宰府、重ネテ飛驛シテ、女眞賊擊攘ノ旨ヲ報ズルニ依リテ、公卿ヲシテ其ノ狀ヲ議セシメ、同府ニ官符ヲ下シテ、防護ニ努メシムルコト、同月二十七日ノ條ニ、公卿ヲシテ、女眞賊追討ノ勲功ヲ賞シ、捕虜幷ニ漂著ノ高麗人ヲ勘問スベキコト等ヲ議セシムルコト、六月二十九日ノ條ニ、大宰府、高麗ノ虜人送使ノ對馬ニ來レル由ヲ奏スルニ依リテ、陣定ヲ行ヒ、使ヲ大宰府ニ召問スベキコト等ヲ定ムルコト、九月二十二日ノ第一條ニ見ユ、

十六日、辛未、石山寺ニ入道前太政大臣藤原道長祈願ノ阿闍梨三口ヲ置ク、

〔小右記〕○前田家本 七月

十五日、庚午、○略中 石山寺被置阿闍梨三人、遍日・修仁・證念、彼寺座主大阿闍梨大僧都深覺解文、先年入道殿（藤原道長）奉爲主上被立申御願三種、○寛弘元年十二月三日ノ條參看、其一也者、

太政官符
石山寺座主
深覺奏狀ニ
道長家門皇胤ヲ得バ阿闍梨ヲ置カント祈誓スル
遍日修仁ノ受法次第
證念ノ受法次第
道器ト爲スニ足ル

太政官牒

〔石山要記〕五 文書 被置三口阿闍梨太政官符

太政官牒　石山寺

應永置傳法灌頂阿闍梨三口令修御願事

傳燈大法師位遍日年八十二、臈六十、東大寺

傳燈大法師位修仁年六十、臈四十、東大寺

傳燈大法師位證念年五十九、臈廿七、東大寺

右、太政官今日下治部省符偁、得彼寺座主大阿闍梨大僧都法眼和尚位深覺去六月一日奏狀、〔偁脫カ〕謹檢案內、入道大相國發三種願、令祈誓伽藍、其一云、家門紹王胤者、可奏置三人阿闍梨者、願力相應、早繼鴻基、福祚已至、新膺寶曆、抑件大法師等受法次第、寺家座主故僧正法印大和尚位觀賢傳內供奉十禪師淳祐、々々傳眞賴大法師、眞賴傳雅眞大法師、雅眞授歷海大法師、歷海傳遍日・修仁等也、又同僧正弟子淳祐傳少僧都寛忠、々々傳平琳大法師、平琳傳內供奉十禪師雅守、々々傳內供奉十禪師中玄、々々傳證念大法師、如此師資相承、受學兩部諸尊儀軌・護摩祕法等也、覆審无誤、尋其德行、足爲道器者也、望請、蒙天恩、任御願旨、准慈德・惣持等寺例、○永延元年三月五日ノ第一條及ビ長保三年十一月一日ノ第一條參看、永置

上卿藤原實資

件傳法灌頂阿闍梨職位、令傳授密教、奉翼聖凡（化イ）、然則佛日之光比金輪與照萬歳、法水之味與黄河以待一清者、正二位行大納言兼右近衛大將藤原朝臣實資宣、奉勅依請者、省宜承知、依宣行之者、寺宜承知、牒到准狀、故牒、

寛仁三年七月十六日　　外從五位下行大史小槻宿禰（左イアリ）（貞行）

正四位下左京大夫兼左中辨藤原朝臣（行脱カ）（經通）○以上、東寺要集ヲ以テ校ス、

道長石山寺ニ鞍ヲ寄進ス

按、入道殿下依御願立成就、皇子降誕（敦成親王）、○寛弘五年九月十一日ノ第三條參看、其後卽位○長和五年正月二十九日ノ條參看、等子細、委載緣起、今不出之（書カ）、遍日等行狀、見僧傳・血脈等記、

〔明月記〕寛喜三年二月

廿四日、辛巳、天晴、○中略午時許參殿（藤原道家）、○中略又仰云、我可參詣石山、依有御堂（道長）御願、○藤原道家、皇子誕生ヲ石山寺ニ祈ルコト、寛喜二年書、去年立願（八月是月ノ第二條ニ見ユ、○皇子秀仁御誕生ノコト、寛喜三年二月十二日ノ條ニ見ユ、寛弘又被奉御鞍、去年同被奉、彼時被置阿闍梨三口云々、其比石山人遍參詣、近年頗希歟、

三月

廿二日、戊申、○中略未時許有長朝臣來臨、適有被仰事、○中略又石山非延引、已停止歟云々、是又如何、答云、有申止人歟、一凶年飢饉之中、尋常行粧之御出爲世煩、一上古靈驗群集之道場也、末代偏被處天狗之棲、今御參詣如何云々、此兩條本自皃女子之遍所存也、何因被立御願、依諫言停止乎、○寛喜三年三月二十三日ノ條參看、

道長ノ歸依

〔石山寺緣起〕（道長）法成寺の禪定太閤當寺に御歸依ふかゝりけれは、後一條院御位の時、寛仁三年七月十六日、官符を下されていはく、入道太相國發三種願、令祈誓伽藍云、家門紹王胤者、可奏置三人阿闍梨者、願力相應、早繼鴻基、福祚已至云々、かねて當寺に參詣して、この事を申されけるとそ、又庄園を寄進し、常燈をたてまつらせ給て、御祈願おこたる事なし、是によりて後一條院・後朱雀院・後冷泉院御誕生、三代の外祖・一朝の重臣として、御子孫いまにさかへさせをはします事、ひとへに當寺の擁護なるへし、

藤原道長公卿ノ議定ヲ採ラズ

○石山寺年代記錄、異事ナキヲ以テ略ス、石山寺、阿闍梨三口ヲ置キテ、中宮（藤原彰子）ノ御願ヲ果シ奉ラント請フコト、寛弘五年十二月是月ノ第一條ニ見ユ、

石清水八幡宮寺權別當元命ニ釐務宣旨ヲ下ス、

〔小右記〕○前田家本　七月

三日、戊午、法橋元命來問一夜定事、○六月二十九日ノ條參看、

四日、己未、早朝法橋元命來云、入道殿（藤原道長）□□深者、石清水宮事不可被依上達部定歟、

元命ノ加署ナキ文書ハ勘會スベカラズト命ズ

十五日、庚午、左中辨(藤原經通)下賜雑々宣旨、又傳仰一日定申國々司并將軍申請事・石清水宮事等、國々・將軍等事如上達部定申、○中略石清水宮事、權別當法橋元命不加署之文、不可勘會公文之由、可宣下二寮者、件事不被用公卿定事甚不穩、只入道殿雅意云々、

〔石清水八幡宮略補任〕○別本　權別當

元命　寛仁三七十六、蒙釐務宣旨、

〔石清水八幡宮略補任〕○別本　別當

社務ヲ掌ル

定清　聖清子、治安三七辭退、權別當元命寛仁三依蒙釐務宣旨也、

元命　豐前講師資高(マヽ)子、社務十八年、自權別當時、自寛仁三至長元九、

〔石清水祠官系圖〕

元命　豐前講師賢高眞弟子、件賢高者豐前掾栗林連卿之子息也、○中略同三年(寛仁)七月十六日蒙釐務宣旨、四十九、

〔大山寺緣起詞書〕　寛仁三年の比とかや、八幡大卉(菩薩)の御詫(託)宣には、我に弊(幣)を得させん物は先大智明菩薩に奉れとありけり、別當法印元命、幡磨(播)守行(源)任朝臣にかたり申されけるなり、其記今にたえすとこそうけ給れ、○上下略

神託ヲ告グ

元命一切經ヲ書寫供養ス

〔地藏菩薩靈驗記〕六　三、大山大智明神地藏垂跡事

○上略忝モ此神(大智明神)ハ大智滿菩薩ト申シタテマツリ、三德兼具ノ薩埵、假ニ應物シテ、男山石清水ニ垂迹シ玉ヘリ、サレハ八幡大菩薩ノ御詫(託)宣ニモ、我ヲ敬セン輩ハ先ツ大智菩薩ヲ供養スヘシトナリ、永承元年二十九代ノ別當元命法印、幡摩(播磨)守行任朝臣ニ語ラレシ也、彼ノ元命ハ豐前國掾連卿ノ子孫ナリ、同國ノ講師賢高ノ弟子也、本海人ナリシカ、寛仁三年七月十六日里(警)務ヲ受、所ヲ領スルコト十三年、長任ノ宣旨此時ヨリ始マル、

○定清、石清水八幡宮寺別當ト爲ルコト、長和二年正月二十四日ノ條ニ、元命、權別當ト爲ルコト、同三年十月十一日ノ第三條ニ、定清、元命ガ別當ヲ望ムヲ愁訴スルコト、寛仁元年十月二十日ノ第一條ニ、定清及ビ元命申請ノコトヲ議スルコト、本年六月二十九日ノ條ニ見ユ、元命、一切經書寫供養ヲ行フコト、便宜左ニ合敍ス、

〔石清水八幡宮寺略補任〕○石清水八幡宮記錄三十一所收　權別當

元命　自十一(寛仁三年)月十六日至同四年六月三日、一切經書寫了、同十四日開講供養、安置宮中、講師權律師定基、咒願權少僧都心參(警カ)、三禮別當法眼定清、讀師已講融碩、唄內供念緣、散花權別當院救、堂達修理別當定海、

〔八幡宮寺縁事抄〕○石清水八幡宮記錄十所收

一、當山一切經藏

一所、子守傍、元命立之、

一切經藏ヲ建立ス

〔八幡宮寺寶殿并末社等建立記〕○石清水八幡宮記錄四十所收

經藏、鳥居外、子守傍、安宗願、不逐宿願、被侵霧之間、權別當元命安置一切經、遂彼願畢、建武三年ニ燒失

燒失、○延元三年七月五日ノ條參看、

入道前太政大臣藤原道長、阿彌陀佛像ノ造立ヲ發願シテ、ソノ新堂無量壽院ノ木作始ヲ行フ、

〔小右記〕○前田家本　七月

十七日、壬申、○中略

（朱書）「入道相府造无量壽院事、」

入道殿（藤原道長）忽發願、被奉造丈六金色阿彌陀佛十躰（九カ）・四天王、彼殿東地（上東門第）京極東邊、造十一間堂、可被安置、以受領一人宛一間、可被造云々、從昨始木作、攝政（藤原頼通）不甘心云々、

十一間ノ堂宇造立ヲ受領ニ一間宛配當スル藤原頼通之ヲ悅バズ

九月

廿一日、甲戌、午後參入道殿、宰相（藤原資平）同車、先向小南、奉拜丈六阿彌陀如來、五躰、以章信（藤原）朝臣有藤原資平小南第ニ新像五體ヲ拜ス

丈六阿彌陀九體ノ造像ヲ立ル明年三月完成ノ新堂ニ安置ス

可相逢之命、仍奉謁、暫有清談、

十二月

四日、丙戌、○中略

吉平（安倍）朱書末、談雜事、○中略　吉平云、○中略　又云、入道殿奉造丈六阿彌陀佛九躰、暫安置小南、明年三月可被安置新造堂、從小南寅・卯間、是王相方也、然而不可被忌之由申了、但御自身者今月晦比渡給二条殿、以新造御堂充吉方、依無佛忌、只可有我忌之故者、

〔左經記〕十一月

卅日、壬午、天晴、○中略、藤原道長、仁和寺ニ詣スルコトニカ、ル、十一月三十日ノ條ニ收ム、入夜令歸京給、丈六阿彌陀佛八（マヽ）體、今日造了、仍令開眼給云々、

新堂ニ吉方ニ當テ道長ニ移徙シテ第ニ新堂ヲ思案ス

佛像開眼

〔榮花物語〕十五　○梅澤義一氏所藏三條西本　○上略、道長病ムコトニカ、ル、三月二十一日ノ條ニ收ム、としころの御ほい、たゝ出家せさせ給て、このきやうこくとのゝひんかしにみたうたてゝ、そこにおはしまさんとのみおほさるゝに、○中略、道長、出家スルコトニカ、ル、三月二十一日ノ條ニ收ム、同廿一日（三月）に出家せさせ給つれは、○中略　いまはたゝいつしか（てイ）このひんかしにみたうたてゝ、さゝしう（さゝしう、富岡本、さて）ニ、一本、しつかにニ作ル、すむわさせん、となんつくるへき、かうなんたつへきといふ（なイアリ）御心（ものイアリ）たくみいみ

道長新堂ノ結構ヲ思案ス

し、○略中とのはみたういつしかとのみおほしめす、このよのことは、いまはたゝかのみたうのことをのみおほしめさるれは、攝政とのもいみしう御心にいれておきて申させ給ふ、○略中かくてよをそむかせ給へれとも、御いそきはうらふくかせにや、御こゝちいまはれいさまになりはてさせ給ぬれは、みたうのことおほしいそかせ給、攝政殿くに〳〵まてさるへきおほやけことをはさるものにて、まつこのみたうのことをさきにつかふまつるへきおほせことたまひ、とのゝおまへも、このたひいきたるはこと〳〵ならす、わか願のかなふへきなりとのたまはせて、ことことなく、たゝみたうにおはします、方四丁をめくりておほかきして、かはらふきたり、さま〳〵におほしおきていそかせたまへは、よのあくるも心もとなく、日のくるるもくちをしくおほされて、よもすからはやまをたゝむへきやう、いけをほるへきさま、うゑきをうゑなめさせ、さるへきみたう〳〵さま〳〵かた〳〵つくりつゝけ、佛はなへてのさまにやはおはします、丈六金色の佛をかすもしらすつくりなめ、そなたをはきたみなみとめたうをあけ、みちをとゝのへつくらせ給ひて、らう・わたとのかすおほくつくらせ給ふに、とりのなくもひさしく、○富岡本、コノ次ニおほしめされノ六字アリ、よひあか月の御おこなひもおこたらす、やすきいもおんとのこもらす、たゝこのみたうのことのみ、ふかく御心にしらせ給へり、○富岡本ヲ以テ校ス、

○道長、無量壽院ヲ建立シ、阿彌陀像ヲ安置スルコト、四年二月二十七日ノ條ニ、無量壽院落慶供養ノコト、同年三月二十二日ノ條ニ見ユ、

二十七日、壬午、相撲召合、

〔小右記〕○前田家本　七月

九日、甲子、給隨身夏衣服、府掌武晴・府掌扶武（荒木）（高）爲相撲使之間、所召也、物節三疋、近衛二疋、○中略、丹波ノ百姓等、陽明門前ニ愁訴スルコトニカヽル、六月十九日ノ第二條ニ收ム、件愁人中堪爲相撲人之者、以府下部等令撰召、二人將來、一人者年老、無便爲相撲人、今一人見目頗宜、仰預將曹正方了、（右近衛府）（紀）

十日、乙丑、○中略、四條大納言被示新古丹波相撲豐門事、是則彼納言庄人者、內取日可召進之由、有彼御消息、

十四日、己巳、○中略、召見丹波訴人弘門・弘滿・輔光等、不堪相撲人、但弘門見目頗宜、然而先年雅通（源）・匡衡（大江）時召進相撲人等申云、爲相撲人其體不堪、仍返遣了者、丹波國司申云、件弘門等郡々郷司、被召候之間、不勤藏人所例進絲幷國交易物、免給弘門等身假、令勤件等事者、卽令免遣畢、弘滿・輔光等痩衰殊甚、至弘門隨狀可召上之由、仰遣訖、

南海道相撲使伊豫相撲人等ノ參上ヲ報ズ

召仰

藤原道長二后ノ御見物アルニ依リ音樂ヲ奏スベシト命ズ

織手等裝束進ニノ調ム

畿内紀伊使相撲人ヲ隨ヘズシテ歸ル

參ス山陰道使二人ヲ進ム

陰陽師ヲシテ近衛府ノ日時ヲ勘ヘシム

右ニ利有ルヲ擇ブ

右近衛權中將藤原家長

將者阿波介ヲ召

淡路・阿波・伊与・讃岐相撲使府掌扶武入夜來云、伊与相撲人等乘船參上、明日・明々日間可參著者、

十六日、辛未、入夜府生重孝申云、權中將朝臣（藤原）公成、令申云、今日相撲召仰、依永延元年例、可有樂者、○永延元年七月二十七日ノ條參看、年號不分明、亦々可尋問、音樂諸卿不甘心、攝政（藤原頼通）又同、而入道殿（藤原道長）命可必有之由云々、二后可令見物給、是入道殿懇切被勸聞云々、

十八日、癸酉、宰相來云、藏人範國（平）云、一日攝政命云、相撲樂猶被强行、但人々裝束不可調二襲、織手等愁歎無極云々、兩宮令參上給之間、依御裝束等事多、是所愁云々、問遣頭辨、經通（藤原）、報云、未承、計也有制歟者、

十九日、甲戌、畿内・紀伊國使將監（六人部）保春不隨身相撲人參來、仰事由追遣了、山陰道使番長和信將來相撲人二人、不召見、

府生保重（六人部）申云、陰陽頭文高（惟宗）申云、明日・明々日間、可始内取事、依藏人所召營參之間、不能進勘文、明後日可進者、

廿日、乙亥、府生保重進内取日時勘文、廿一日丙子、時申、件日爲右有利、仍所勘申也者、陰陽屬惟宗忠孝勘文、權中將長家（藤原）消息云、阿波介ム姓爲時云者、有膂力之聞、住山城國寺戸（乙訓郡）云處、又在前伊豫守爲任（藤原）許、令召

サンコトヲ請フ

相撲長立合及ビ相撲人等ノ裝束請奏

實伊豫及ビ山陽道ノ相撲人ヲ召見ス

右近衛府内取

土佐ノ相撲人

相撲定文ヲ下ス

右近衛府牒ヲ以テ土佐ノ木賴膂力者八人ヲ召ス

實最手眞上勝岡ヲ召見ス

如何者、報云、可無事煩之樣令召遣、有何事乎、

相撲裝束二襲、其制尤重之由、頭辨經通示送也、

廿一日、丙子、早朝將曹正方持來相撲長立合并相撲人等裝束請奏、加署返賜、又云、權中將朝臣消息云、昨日令申爲助（時力）、年過五十、無便相撲云、爲之如何、答云、五十有餘者、初爲相撲人、非桀出者、不可召歟、海（南脫カ）道使府掌扶武將參伊豫相撲人四人、召前見之、□（山陽道カ）□使近衛下毛野公武隨身相撲三人參來、申云、播磨相撲信兼煩胸罷留山埼、今夕參上歟者、依内取時剋漸至、不召見、遣於府訖、

入夜府生保重持來相撲所定文等、二通、因夜漏不返賜、土左相撲人三人參來、使府掌尙貞相副、召見相撲人常正（參）等、卽遣内取所、

廿二日、丁丑、相撲定文等下給、去年土左守登平（源）申彼國膂力者八木賴高事、今年必可召進之由、去年并今春令申、而寄事於左右、不令參上、仍重差遣使、可令召上之由、以將曹正方、示送中將公成許、報云、成府牒可馳遣者、最手勝岡（眞上）參來、湯治之間暫不召見、此間將曹正方參候於隨身所、令賜熟瓜、其後召見、重賴（葛井）・爲永（縣）・吉高（秦）等今夕若明旦使共參著歟、至勝岡騎用馬不可堪、仍乘船參上者、

不足ノ舞人ヲ奈良ヨリ召スモ猶及バズ　丹後ヨリ多政方ヲ召シ上ス　越智富永御前内取ニ合常正ト請フ　秦常正ハント許サズ　實資陣ニ熟瓜ヲ頒ツ　府内取ノ手結ヲ進ム　大宰府ノ相撲人参ル　勝岡内取ニ常正ヲ破ル　富永縣爲永ニ敗ル

廿四日、己卯、中將公成來云、乍立相逢、依穢、舞人不足、召遣南京、未參來、縱參入猶可有不足、爲之如何、答可仰將曹多雅方之由、中將云、雅方在丹後國、未參上、先日召遣了、又云、音聲人不具、又召人申參左方之由、不可參入者、示不可闕事之由、又富長(越智)申可合常正、答云、富長誠雖宜相撲、忽不可合常正、罷合次々者、決雄雌之後、可及腋常正歟、公成諾矣、今日土左相撲(中臣)爲男及取手者一人・白丁一人參來、召見、

廿五日、庚辰、○中略熟瓜三駄給陣、府生保重進昨日內取手結、隨身肅愼羽胡錄(籙)六具、依樂所申、給府生保方(紀)、是舞人新也、今日御前內取、府生保重持來內取手結、御前內取左將監光(狛)高申革、給二枚、將曹多雅方參來云、自丹波只今參著者、仰遲參由、給革一枚、舞人ニ革ヲ給ス

○中略

最手勝岡・大宰相撲人等來、○最手ノ上、廿六日辛巳ノ五字ヲ脫スルカ、給熟瓜、昨御前內取、勝岡・常正拏攫、常正太不敵、仍申障被免云々、富永將・官人等有用意云々、去年初爲近衞未相撲、今年申可被合腋常正之由、一昨中將所來言、然而不許容、答可合爲男・爲長等之由、仍昨日御前內取、與爲長相撲、爲爲長被打、太不敵云々、

實資擬近奏ニ署ス　召合　東宮參上シ給フ　實資上卿ヲ勸ム　裝束司頭辨藤原經通　出御　參入ノ公卿　左右大將相撲奏ヲ奏ス

頭辨經通來云、拔出日可給上達部祿者、其案內不審相示了、左右中少將同預祿由、相示又了、又云、東宮(敦良親王)參上給、可有御祿乎如何、尋見前例、依御簾內歟如何、

廿七日、壬午、將曹正方持來擬進(近)奏二枚、樂人一枚、相撲一枚、加署返給、彼(日カ)同只被下樂人奏、今日相撲召合、午剋參入、宰相々從(資)、仗頭卿相兩三參會、青宮參上、被催傍卿參宮、攝(賴通)政被候、新納言能信(藤原)奉仕御非(ヰカ)・御裝束、卽參上給、經弘・微承香・仁壽等殿等、宮司・學士(藤原廣業)・帶刀等候之、攝政已下卿相候御共、宮司・學士・帶刀候右仗、下官(藤原實資)復仗座、頭經通可召侍(仰脫カ)從之由、可令敷座事仰同辨、依裝束司、此間右大臣(公季○藤原)參入、內侍臨檻、大臣起座、俳徊壁後、左少將顯基(源)入自宣仁門參上、余起座、大臣以藏人頭經通被奏事由、不聞其趣、依仰參上、候御簾內、攝政被候、余復仗座、召外記、々々順孝參入、仰可召侍從之由、次余起座參上、公卿次第參上著座、大納言齊信(藤原)・公任(藤原)・中納言行成(藤原)・教通(藤原)・頼宗(源)・經房(源)・能信(藤原)・實成(藤原)・參議道方(源)・頼定(源)・通任(藤原)・朝經(藤原)・三位二人左中將道雅(源)右中將兼經(源)・參議資平、因日漸傾、不待侍從參上、與左大將教通、云合退下、先左軍退下、次余、左少將誠任(藤原)・將監光高(高)、右少將良頼(藤原)・將監扶宣、左將軍先並立東階壇上、左右奏持來、指笏取奏、見了引寄杖首指奏、以杖奏、傳取參上、就御簾下、付內侍、拔笏右廻復座、次余取奏見了、次取杖自挿參上、其儀如左、內侍排御屏風召余、起座候簾下座、次左將監光高取版位、數度被催、良久之左右三府出居著座、左少將實基(源)・左衞惟忠(藤原)・右兵惟任(藤原)・左少將實康(藤原)・右衞章信(藤原)・右兵經輔(藤原)、次左右置

員刺立合

衝重ヲ居ウ

實賢酒番侍從ガ御前ノ上卿ヲニ行酒スル少將ヲ以テ各メ代ラシム

承平及ビ天慶ノ先例

左ノ出居ノ前ニ張筵ヲ賜フ

籌指・出衣等員座、須出居以前置、或以後置、而已有兩說歟、次員指著座、時剋推移、初相撲、一番、左麻績永世、勝、右秦吉高、二番、左忍海爲正、右清原時武、勝、三番、左若湯座秋則、右縣爲永、勝、四番、左宇治義安、右中臣爲男、勝、五番、左伴勝平、勝、右越智富永、六番、左安曇元高、右秦正代、勝、依天判持、七番、左紀光時、勝、右他戸久清、八番、左伴得近、勝、右山口枝延、九番、左大原正清、右川原正清、勝、十番、左海秀廉、右紀武賴、勝、十一番、左能登良任、勝、右刑部宗親、十二番、左三枝邦近、勝、右丈部正時、十三番、左大井高遠、申障被免、右物部信景、十四番、左美麻那重茂、申障被免、右他戸秀高、十五番、左於保家近、右葛井重賴、十六番、左御長忠賴、右秦常政、不取、十七番、左公候常節、右眞上勝岡、不取、相撲中間內堅居公卿衝重、了左少將誠任執公卿座南第一衝重、居余右、副高欄連居二合、小時誠任勸盃、造酒正賴重（源）行酒、誠任擬余、々不受云、行酒人可用少將歟、酒番侍從造酒正不進候御前之上許、雖從上達部座役、行酒時、次將執侍從所持之瓶子、進候御前之上卿許、而賴重執瓶子進御前如何、無所答、又示大納言齊信・公任・中納言行成、答不覺由、然而不受盃令退了、其後左少將顯基四位、勸盃、少將誠任執瓶子、余受盃目齊信卿、起座居余右、受盃復座、流巡、（藤原實賴）故殿承平二年七月廿八日御記云、大殿門（藤原忠平）候御簾中、上達部座儲平敷穀倉院辨備少饌、調突重、內堅盃進大將許傳之、少將代侍從執瓶子、是例也、自是之後、每有盃巡、必用此儀、十〇承平二年七月二九条（藤原師輔）丞相天慶六年七月廿七日記云、內竪等參上、羞饌於王卿、但候簾前大將衝襲近衛少將羞之、酒番侍從勸盃親王、貫首親王式明執盃云、件巡可至於大將所歟、彼此答云、倭不悟先例、但此巡只下而至于候簾前上上卿（行カ）、近衛次將勸盃、其巡下時親王進上卿後受盃、還本座云々、〇天慶六年七月二十七日ノ條參看、隨此說行之、今就件御記案之、今日余所案相允、爲披後蒙、注付件御記、可賜左出居

日暮ルヽヲ以テ十五番ヲ以降ヲ停ム

左右亂聲ヲ奏スト雖左ヲ勝ツニ依ツテ右ヲ止ム

拔頭ノ置物ノ蛇アルハ例ヲ失スル

東宮御元服近キニ依リテ二后ノ行啓ナシ

拔出

東宮參上シ給フ

出居ノ座ヲ敷クコト遲シ

左右相撲人列立スルニ共ニ北面セズ

前張筵之事、申攝政（賴）、々々近候簾中、依許諾示宰相令仰之、殿上出居退下、仍示上達部令傳宰相、右大辨朝經退下令召仰、頃之所司給張筵、十四番衝黑、左相撲重茂申障被免、候氣色令入立合・籌指・出居等、先是令撤張筵、左右次將撤、上達部起座臨欄、余加其座、左右亂聲、左已勝、右何奏乎、仍仰事由令止、左拔頭出、左官人走出自樂所到南、前置物蛇歟、前々自階腋趍出、但拔頭時不置失例歟、此間主殿寮執燎、次右亂聲、奏納蘇利、樂令止了、諸卿退下、東宮退下給、扈從如元、其後退出、今日二后兼有可令參上給之云々、而忽停止、或云、東宮御元服近々、〇八月二十八日ノ第一條參看、彼間兩宮女房衣裳營多、仍今日不令參上給者、

廿八日、癸未、拔出、參內、午二、宰相々從、諸卿未參、頃之彼是參入、依有催參靑宮、攝政被候、太弟參上、宮司・諸卿祗候如昨、諸卿復陣、藏人頭左中辨經通仰云、可召侍從者、可敷座事便仰經通、次可召侍從事仰外記順孝、內侍臨檻、左少將誠任從陣參上、次下官及諸卿參上、內侍召余、起坐候簾下簀子、攝政（賴）幷右大臣（公）候簾中、良久不敷左右圓座、度々令催、僅敷左右出居座、左實康（基）、右實基（康）、著座、步出自幕著座、須褰□（幕カ）乍居著之、可謂失例、良久相撲不出、令催仰、移剋左相撲列立、須北面、而西向立、仰其由、仍北向立、候氣色、仰云、南向、卽南面列立、次候氣色、仰、西向、卽西面立、亦候氣色、仰、罷

三番

追相撲

公卿ニ甘瓜ヲ賜フ　氷無シ

舞樂ヲ奏ス　還御

右相撲人等實資第ニ參入ス　實資永ガ內取召合ニ敗レ且ツ新參ノ身ヲ以テ最手等ヲ合ハシタコトヲ策ルヲ責メテ追卻ス

入礼、古傳云、縱、有兩說、退入、次右相撲人參列、東面立、須北面立、而東面、仰其由、仍北向立、其儀如左、但以西替東而已、依仰攝政、召左相撲茂安、仰云、茂安進礼、臨曉內竪居上達部突重、無酒事如何、次□〔召カ〕右常政、如左、常政兩度申障被免、次左元高、勝、右時武、次左爲正、勝、右爲男、拔出了出居入、仰非例由、更出居、次候氣色、召追相撲、仰云、追相撲進礼、追相撲、次散樂、相撲了出居入、余起御前座加著簀子座、先是撤張莚、張莚、〔衍カ〕諸卿起座、臨欄、賜甘瓜、無氷、左少將顯基勸盃、左右亂聲、遞奏舞曲、左蘇合・方歲樂・散手・還城樂・猿樂、右鳥蘇・綾切・歸德・狛犬・狛狂、還城樂間主殿執燎、事訖還御、諸卿退下、太弟退下給、傳以下諸卿祗候、此間降雨、仍太弟自承香殿馬道北行、自片庇西行、通弘徽殿、〔藤原彰子〕母后御坐、仍宮司已下留片庇下、雨脚最密、仍還陣頭俳徊、右府復陣座、待雨間、無其隙、數剋推移、退出、戌終、

廿九日、甲申、早朝相撲人等參來、以常正爲首、富永・時武無召者等也、而進出列坐、追却富永、御前內取・召合不勝、而不思其恥進出之上、屬官人、與最手・腋等成相撲之望云々、去年初入取手、與方相撲未決雄雌、而屬其所官人、欲合高手、仍追立耳、非無其故、時武同追却了、

八月

一日、乙酉、○中略幾內相撲使將監保春無其勤、攝津・河內相撲人不參會御前內取之事、令召問之處、申使不來召之由、令問保春、殊無所避、今日朔日、無便令進過狀、明日又々召問可令進過狀事、以將曹正方、仰遣中將朝臣許、公成、將監扶宣參來、有引汲富永之氣云々、仍有事次仰宣耳、今朝最手勝岡同有所申、筑紫相撲等參來、河內白丁文兼助令著犢鼻褌見之、

幾內相撲使六人部保春ノ怠慢ヲ責メテ怠狀ヲ進メシム　高扶宣等富永ヲ救解セントス　實資河內ノ白丁ニ犢鼻褌ヲ著ケシメテ之ヲ見ル

三日、丁亥、○中略今日中將長家儲食物給相撲人、宰相資來云、侍從行成中納言有可來之消息者、答左右在心之由、乘晩來云、右大辨〔朝經〕依彼消息同到、上達部・殿上人・諸大夫等有饗、相撲人只□〔四カ〕人著座、中將忿怒、勘當扶宣・保重等、殆及凌轢、勝岡・重賴・爲長・吉高云々、

中將長家相撲人ヲ饗ス　著座ノ人唯四人ノ相撲長家激怒シテ將監扶宣等ヲ勘當ス　長家ソノ經緯ヲ實資ニ報ジテ怠狀ヲ進メシメントス　饗ヲ儲クルハ召合以前ニ在ルベキカ

六日、庚寅、○中略權中將長家使前備後守政職(源)示送云、有所勞不自來、仍且所令申也、其事者、相撲人等爲給少食、相撲人等可召侍之由、仰將監扶宣・府生保重等、而去三日有其儲、隨則扶宣等申將來相撲人由、召著座、只有四人、驚奇無極、問其由、各罷下了、須先令申其由、而今就各仰所令申、理不可然、扶宣申云、以保重令申了者、其事不分明、召問事由、無所避、欲令進怠狀者、答可召問之由、余所思者、召合以前可給、而以後設

饗餼、甚無所據、件事去三日事也、彼日侍行從中納言招右大辨朝經・宰相人作名（資平）、上達部・殿上人・諸大夫等皆有饗云々、近代事不因古實、

左大將藤原教通還饗ヲ行フ

七日、辛卯、今日左大敎通將付府賜還饗、後日左將曹重種（八俣部）云、相撲人只有三人、將監・將曹・府生祿疋絹、不知前例歟、

十日、甲午、○中略

中將長家以政職朝臣見送將監扶宣・府生保重過狀、見了返遣、

實資扶宣等ノ過狀ヲ見ル

十一日、乙未、○中略

今日還饗、付府行之、將監祿合細長一重、將曹祿單重、府生祿絹一疋、相撲長立合祿布、米十石・熟瓜三駄・魚物等遣之府、相撲悉歸去、仍不遣祿布、

實資還饗ヲ行フ祿

饗料

〔日本紀略〕後一條院　七月

廿五日、庚辰、相撲內取、

廿七日、壬午、相撲召合、

廿八日、癸未、相撲御覽、

〔舞樂要錄〕上相撲節

寛仁三年

召合　七月廿七日、

左　拔頭

右　納蘇利

拔出　同廿八日、

左　蘇合　萬歲樂　散手　還城樂　猿樂

右　古鳥蘇　綾切　貴德　狛犬　桔槔

○右近衞府、相撲使ヲ定ムルコト、五月三日ノ條ニ見ユ、

八月小　乙酉朔盡

三日、丁亥、釋奠、

〔小右記〕○前田家本　八月

一日、乙酉、○中略　公季○藤原

召使申云、明日右大臣有可被定申之事、○定ノコト、詳ナラズ、可參入者、又云、可參釋奠者、有所勞、乍兩□不可參由、仰之了、

二日、丙戌、宰相來云（藤原資平）、今朝參攝政殿（藤原頼通）、命云、不可聞食釋奠內論義、

三日、丁亥、釋奠分配、而稱所勞不著、昨日仰大外記文義朝臣（小野）了、後聞、中納言經房（源）・能信（藤原）・參議道方（源）參入、

〔日本紀略〕後一條院　八月

三日、丁亥、釋奠、有宴座、儒士・文人多不參、詩四五枚也、

四日、戊子、內論議（義ヵ）、

五日、己丑、政、官奏、

〔左經記〕□（八月）□

藤原實資不參

內論義ヲ停メントス

參入ノ公卿

宴座ニ儒士文人ノ不參多シ

內論義アリ

內印

□（五）日、己丑、參結政所、有政、上侍從中納言（藤原行成）、申詔使返事、次有內□（印カ）、次有官奏、余候（源經頼）、

十五日、參結政、有政、上侍從中納言、

〔小右記〕○前田家本　六月

二日、丁亥、宰相來云（藤原資平）、今日依內印事、參大內○中略者、

〔兵範記〕保元二年十一月

十二日、甲戌、天晴、○中略

今日休日被行政事、古今希有例云々、下官尋問外記之處（平信範）、師茂（中原）申云、

○中略寛仁三年六月十八日被行之、

○十五日幷ニ六月十八日、政ノコト及ビ六月二日、內印ノコト等、便宜合敍ス、

六日、庚寅、大極殿ニ於テ、仁王經御讀經ヲ修ス、

〔小右記〕○前田家本　八月

五日、己丑、晩頭宰相資來云（藤原資平）、明日於大極殿、以百口僧轉讀仁王經、大納言齊信（藤原）行之、

六日、庚寅、召使申云、今日八省御讀經仁王經云々、發願、可參入者、稱所勞、宰相來云、參

八省、向晩自八省退出來云、大納言齊信爲上首、左三位中將道雅（藤原）參、諸卿云、三位不參

休日ニ政ヲ行フ

請僧百口上卿藤原齊信

公卿等三位藤原道雅ガ例ヲ破ツテ大極殿ニ參入スルヲ難ズ

結願卷數ヲ奏スベシヤ否ヤ

臨時御讀經雖百口ト時僧ハ季御讀經ニ准ジテ行フ近年陣頭饗ナシ

藤原實資齊信ガ九條流ニ背イテ卷數ヲ奏シタルヲ怪ム

闕請ヲ補ス

大極殿御讀經者、

十日、甲午、宰相云、（資）昨日大極殿御讀經結願、大納言齊信卿爲上首、卷數若奏乎、不然乎、彼是不答、宰相答奏由、大納言問左少辨經頼（源）、申不知由、仰可問外記之由、辨云、問大外記文義（小野）、申云、天暦二年、○天暦二年五月十六日ノ第一條參看、諸卿自八省參入大内、不記申文事、無指事者、不可被參内歟、爰知有申文者、仍大納言已下參入、大納言著陣、令奏申文、

（藤原頼通）攝政出里第、藏人持參、已及數剋、此間入道殿（藤原道長）參内給、大納言已下參入母后（藤原彰子）御方、其後復陣、御覽了、返給申文、即下給外記、初召外記萬納卷數奏之、見故殿（藤原實頼）御日記、雖臨時御讀經、百口時、准季御讀經儀者、又發願・結願日有陣頭饗者、年來無饗云々、不知前跡、又彼一家例、卷數者令申文、今日奏卷數如何、故殿只被奏、下賜外記、而彼一家令申文、而今日改一家例如何、

〔左經記〕〔八月〕□□

――――――――最初闕請者於陣座補之、而依爲堅固物忌、於里亭被補之、

續紙、置辨前、辨隨上宣、補辭替、了覽上、即給之、結□〔了カ〕下史、

〔五〕□日、己丑、○中略今朝隨身辭書等、參中宮大夫（齊信）御許、於門外令申事由、被示云、以可然

發願ノ日ニ饗アリ

僧侶ノ見參ヲ取ラシム

導師懷壽

後夜ニモ確實ニ勤行スベシト命ズ

初夜後夜ノ見參ヲ攝政藤原頼通ニ覽ズ

頼通後夜ノ僧ノ僧少ナルヲ誡ム

供米

土佐臨時交易絹ヲ請僧ニ頒ツ

僧等、早可召補者、仍參内請補、

六日、庚寅、參八省、堂裝束幷東廊等裝束如例、但有饗、午二剋有仰令打鐘、次仰綱所令取僧見參、次上達部入堂、有仰諸僧入堂、威儀師・從儀師東西相分引頭、從東西戸壇上入堂、堂童子大夫東西各四人、・圖書官人東西各一人、相分著座、次御導師權律師懷壽著座、兼有仰、次分花僧十人列居佛前、次堂童子分花筥、次行道、自堂壁内廻行、次第行香、有仰、初・後夜慥可勤之由、仰綱所、今日三位中將道雅參八省、人々難之、先例三位不參此所云々、

〔七〕□日、辛卯、時々降雨、早旦取初・後夜見參、令覽攝政殿、次參八省、令催集絶供（施）等、入夜歸宅、

八日、壬辰、取去夕初・後夜見參、覽攝政殿、初七十餘、後八人、仰云々、後夜僧數甚少、能々可試仰（誡カ）者、參八省、令引僧供米、僧綱九口・威儀師一口、各日別米六斗・和布・堅鹽・昆布等、凡僧九十一口・從儀師一口、各日別米四斗・和布・堅鹽・昆布等、件米・雜物等運置八省東廊、加實檢令引之、

九日、癸巳、參八省、御堂幷東廊等裝束如例、有仰請渡土州國臨時交易絹百十三疋、令褁儲之、僧綱・威儀師各二疋、凡僧・從儀師各一疋、午剋許上卿參著東廊、有仰打鐘、衆僧參會、上達部入堂、有仰諸僧分入堂、導師懷壽著座、堂童子著座、分花僧十三人著座、行道、自壁外壇上廻行、事了上

頼通僧名奏ヲ里第ニ覧ル
布施

上卿藤原実成
左大辨源道方南面座ニ著シ強ヒテ藍尾ヲ行フ

卿参左仗座、令藏人良佐（任）奏僧名等、良任参摂政里第申之、御覧了下給、先是余（藤原）留東廊令引僧布施、僧綱・威儀師手作一段・中紙三帖・用紙十帖・鍪一口、凡僧手作一段・中紙一帖・用紙六帖・鍪一口、（源経頼）入夜参摂政殿、申施供行畢由、歸宅、

〔日本紀略〕後一條院　八月

六日、庚寅、御讀經、仁王經、

九日、癸巳、結願、

十一日、乙未、定考、

〔小右記〕○前田家本　八月

十一日、乙未、○中略

左中辨経通（藤原）云、今日定考、右衛門督実成（藤原）・左大辨道方（源）参入、道方著南面座、無北面人、依大辨確執行濫尾（藍下同之）、無北面人行濫尾、不聞事也、大辨著北面、可無濫尾也、古記云、無南面人之時、無濫尾者、左中辨所陳、最可然也、又無人者、大辨猶可著北面者也、

〔左經記〕□□（八月）

十一日、乙未、天晴、依考定参宮司（官カ）、右衛門督・左大辨参入、自餘上・宰相依物忌不参、時剋申文・請

参入セル公卿ハ実成道方ノミ

少納言辨交互ニ考文ヲ讀申ス
朝所ノ儀宴座
穩座
雅樂寮舞ヲ奏ス
挿頭
上卿参議各一人ナルコト例ヲ見ズ

印如常、考所少納言・辨・史・々生用外記史生、等立版位、依召次第昇著床子、史等又昇立、皆如例、史生在壇下、云々之少納言讀申、第一、攝政ウチノオホいマウチキミト讀、欲讀大納言之比、余起座（源経頼）讀申如例、事了上巳下著朝所、一獻左中辨、上卿著（差カ）左大辨、二獻權辨（藤原重尹）、三獻余、事畢著宴座、左大辨取酌、入上卿盃、唱平飲畢、著南面座、次左中辨取酌、入左大辨盃、有藍尾、次第入、登至于少納言座、又有藍尾、二獻權辨、三獻余、事訖上巳下起座、次著隱（穩）座、一獻左中辨、左大辨下座、傳盃權辨、二獻權辨、次羞粉熟、次召史生、次近途（邊カ）諸司、次雅樂奏舞、各一曲、奉挿頭、上料左大辨取之、大辨料左心（マヽ）中辨取奉之、中辨已下史生取之、次餅餤、次見参、次史信賢獻盃、左大辨取酌、乍立大史盃、史彌（マヽ）盞、大盃、下座傳左中辨、事畢上下分散、及戌終歸宅、上・宰相各一人云々例不見之、今年始有此事、是皆兼日定云、

〔日本紀略〕後一條院　八月

十一日、乙未、定考、

太皇太后宮大進源頼國等、朔平門ヨリ闖入セル法師等ヲ、弘徽殿邊ニ捕フ、尋デ、議定ニ隨ヒ、頼國等ヲ賞シテ、之ニ加階ス、

〔小右記〕○前田家本　八月

十一日、乙未、○中略
入夜宰相(藤原資平)來云、拔刀者入宮中、於弘徽殿邊搦得云々、母后(太皇太后藤原彰子)御坐之殿也、乍驚差隨身令案内、歸來云、事已有實者、仍宰相同車參入、著衣直、先參太后(彰子)御方、以宰相令觸女房、小時有可參入之由、仍候簾下、女房傳令旨、暫候、參攝政□(御カ)宿所(藤原頼通)、卽奉謁、命云、昨今堅固物忌、而依藏人來告、過午時參入、已終許事也、件事發者、於西京博奕者爭論、法師拔刀突敵男、其男弟追法師、々々逃走入朔平門、到弘徽殿南瀧口邊之間、佐渡守有孝(内藏)候宮侍所、捕留拔刀法師、奪取刀、追法師之男同搦捕、皆給檢非違使、令候獄所者、（此十四字勘物也、其間大進頼國(源)祗候、頼國走向法師、）

十三日、丁酉、○中略　夜深宰相示送云、左大臣・侍從中納言顯光○藤原行成(藤原)・中宮權大夫能信(藤原)・左大辨道方(源)・右大辨朝經(藤原)參陣、以頭辨經通(藤原)被仰左大臣云、○中略、春日社行幸ノコトヲ定ムルコトニカ、ル、本月十三日ノ第一條ニ、見又仰云、拔刀者入禁中、到大后御在所殿邊、大進頼國走會抑屈、佐渡守有孝輔(捕カ)得、若可賞進哉、可定申者、諸卿定申云、事已非常也、可加勸賞者、頼國加一階、從四位上、有孝敍五品者、

十四日、戊戌、早朝宰相來云、昨賞彼是云、不可及二人歟、而被仰下之趣、先有頼國事、

拔刀シテ宮中ニ濫入ス
弘徽殿ハ太皇太后御座所
藤原實資報ヲ聞キテ參内ス
法師博奕ノ爭論ニヨリテ男ヲ刺ス
男ノ弟法師ヲ追ヒ宮門内ニ闖入ス
兩人ヲ捕ヘテ獄所ニ下ス
勸賞ノ有無ヲ定メシム
頼國拔刀者ヲ抑ヘ内藏有孝逮捕ス
頼位國上ヲ從四位ニ有孝ヲ五位ニ敍ス
藤原頼通ノ意ヲ慮ツテ二人ヲ共ニ賞ス

仍□(可イ)被賞兩人之由、緣氣色所定申者、

〔左經記〕□(八月)□

十一日、乙未、天晴、○中略　已風聞、拔刀者二人追走入禁中、太皇大(太)后宮大進頼國朝臣・佐渡守有孝等相共於弘徽殿南方追捕、卽令藏人奏之、卽乍二人下給獄所云、

十二日、丙申、小定考、

〔左經記〕□(八月)□

十二日、天晴、及晚景著小考定、先著東廊壇上床子、事具畢、入自東面中戶著座、西面、史入自南戶著、東上北面、次外記史生一人取入考文筥進來、膝行置辨前退歸、官史生取入硯筥進來、膝行置座前退出、次又取簡授史、以(次カ)辨定考、史讀簡、事畢上勞史召史生名、一聲、史生等次第來撤筥・簡等、了立座、著壁外床子、次改裝束居饗饌等、官掌申事由、卽著座、二獻召史生、史召仰、官掌入召之、三獻畢各分散、

小一條院、白河院ニ於テ、管絃ノ御遊ヲ催シ給フ、

〔小右記〕○前田家本　八月

十三日、丁酉、○中略　宰相(藤原資平)云、昨日院(小一條院敦明)坐白河院、有管絃、左衛門督○藤原頼宗・源中納言經房・新中納言(藤原能信)・

饗饌
扈從ノ公卿

藤原實資母后ノ御惱重キニ御遊アルヲ奇怪極ト爲ス

修理大夫・通任○藤原・右兵衛督公信○藤原等祗候、日來母后重惱給、○皇后藤原城子、御惱ニ依リテ、剃髮シ給フコト、五月九日ノ條ニ見ユ、而逍遙管絃、奇怪無極云々、一昨坐母后宮、其間重惱給、有管絃云々、非尋常之事也、

十八日、壬寅、○中略今夜白河院燒亡云々、

白河院燒亡

○白河院燒亡ノコト、便宜合敍ス、

十三日、丁酉、陣定ヲ行ヒ、春日社行幸ノコトヲ議ス、

十月二十日ニ內定ス

〔小右記〕○前田家本　八月

二日、丙戌、宰相來云、今朝參攝政殿、命云、○中略亦曰、十月・十一月間、可有春日行幸、

藤原賴通十月ハ御厄月ニ當ルヲ憂フ

四日、戊子、頭辨經通（藤原）持來宣旨次云、春日行幸內定十月廿日者、

五日、己丑、晩頭宰相來云、○中略又云、攝政□〔日カ〕、春日行幸、來月伊勢宮遷之後、○九月五日ノ條參看、若十月可□〔被カ〕遂行、十月御厄月、若可令忌給乎、吉平（安倍）申云、厄日可慎給、厄月不可忌給者、被仰可尋前例由了者、

八日、壬辰、頭辨經通合攝政命云、○中略、宮城大垣ノ損色ヲ取ラシムルコトニカ、ル、九月二日ノ第二條ニ收ム、即仰同辨、々云、春日行幸略定十月、而當御厄月、若可有忌乎否、可尋前例之事等、十五日以前參入可被定申由、被申左大臣、顯光○藤原被申故障、可申左大臣（右カ）者、內々吉平申云、不可出行事只忌日、無忌月之文者、

安倍吉平出行ノ事ハ厄日ヲ忌メド厄月ヲ忌ムコト無シト爲ス

行幸ノ日大厄日ニ當ラバ南行スベカラズ吉平十月二十日ハ御厄日ニ非ズト爲ス

十一日、乙未、○中略入夜宰相來、○中略、拔刀者、內裏ニ闖入スルコトニカ、ル本月十一日ノ第二條ニ收ム、仍宰相同車、○中略參攝政□〔御カ〕宿所、即奉謁、○中略事次問申春日行幸、明後日可有定、有彼是可參之氣色、十月御厄月、若可有乎否之由、內々問吉平、申云、厄日南方不行者爲明、件日大厄月〔日カ〕、其日南方不可向者、可無厄月、（マヽ）只可令慎厄日給、十月廿日非御厄日者、余（藤原實資）申云、年厄・月厄・日厄・時厄若可侍歟、但雖大厄月、々中無不向其方、只忌其□〔日カ〕者也、攝政命云、然事也、抑御厄月幸遠如何、尋勘前例、小衰月有行幸遠所之例、是吉平所勘申也者、其次行事宰相事申案內、是資平事也、頗有宜氣、小時退出、

小衰月ニ行幸ノ例アリ藤原實資同資平ヲ行事ト爲サンコトヲ請フ

十三日、丁酉、召使云、左府御消息云、今日有定、可參入者、申障、○中略夜深宰相示送云、左大臣（顯光）・侍從中納言行成（藤原）・中宮權大夫能信（藤原）・左大辨道方（源）・右大辨朝經（藤原）參陣、以頭辨經通被仰左大臣云、十月可有春日行幸、而彼月當御厄月、可有忌哉否、宜定申者、定申

藤原顯光ヲシテ十月行幸ノ可否ヲ定メシム

行幸アルベシト定ムル行幸ハ大神宮遷宮ハ、九月十六日ニ豫定セリ、若被定行事人、行幸期迫近歟、余所思而
宮以後ニ定ムベシ

云、如吉平申可無其忌歟、厄月忌厄日、不忌月、又申云、御厄月行幸有其例者、仰云、
隨定申彼月可有行幸者、○中略行幸行事人々、伊勢大神遷宮以後可被定云々、是資業朝臣（藤原）
説云々、來月十六日以後、○皇大神宮遷宮ハ、九月十六日ニ豫定セリ、若被定行事人、行幸期迫近歟、余所思而
已、

○重ネテ日ノ吉凶ヲ議シテ、春日社行幸ヲ停ムルコト、九月二十三日ノ第二條ニ見
ユ、

天台座主慶圓、病ニ依リテ、大僧正ヲ辭シ、内供良圓ヲ律師ニ任ゼラレンコトヲ請フ、

慶命ニ付シテ辭書ヲ上ル　慶圓辭書ヲ藤原道長及ビ實資ニ示シ後攝政ト命ズ

〔小右記〕○前田家本　八月

十三日、丁酉、○中略内供（良圓）消息狀云、座主（慶圓）猶重被惱、今日被辭大僧正了、其狀卽付法性寺
座主慶命僧都、被奉攝政殿（藤原頼通）、又云、痢病藥乳脯尤良、可求送者、座主新也、求遣乳牛院
邊了、又以叡覺消息云、被辭大僧正狀云、停大僧正、以内供良圓、可被任律師者、此事
可致用意也、答云、座主依病辭職、偏可歎其事、不可有僧綱之望、公家自有定歟、不可
營思、乳脯廿枚奉座主御許、

痢病藥乳脯尤良、可求送者、座主新也、求遣乳牛院ヲ乳牛院ニ求メテ慶圓ニ贈ル

慶圓辭書ヲ藤原道長及ビ實資ニ示シ後攝政ト命ズ

十四日、戊戌、○中略黄昏法性寺座主慶命、來向云、一昨對面山座主、相逢作法如尋常、
痢病數々、不知度數之由被談也、停大僧正職、以内供良圓可被任律師狀、忽被草案、須
借洛中筆者也、而命在旦暮、如形筆作被付奏狀、其詞云、先覽入道殿（藤原道長）、次令見下官（藤原實資）、其
後可奉攝政者、一字有相誤事、仍令改直、清慎公（藤原實頼）書誠字、返授了、僧都云、去夕覽入道殿、命
云、故尋禪僧正被申僧綱之時、未參公請、仍不被任、其後一兩度參季御讀經、任僧綱、
○天延二年十二月二十二日ノ條參看、又尋圓・永圓・尋清等勤公請、任僧綱、○僧綱ノ二字、流布本ヲ以テ補フ、寛弘七年八月二十一日ノ條・
同八年四月二十七日ノ第一條及ビ寛仁元年十二月二十六日ノ第二條參看、至良圓未勤公請、抑可示攝政者、余答云、此事下
官更不知、座主自由也、昨夕側承此事、但入道殿命、尤可然事也、被覽攝政事、可依座
主御志也、慶僧都退去了、

實資藥料ノ藹ヲ贈ル　慶圓ノ病重キヲ悅ブ者アリ

十六日、庚子、慶快爲内供使從叡山來云、座□（主）被惱一兩日頗減、彼藥祈（藹カ）獦可入者、付還
奉遣之、宰相（資）云、昨參入道殿、相遇尋圓僧都、密談云、入道殿曰、聞座主病重由、一兩
有悅氣者、可彈指、計也可望其職之人歟、

稍平復ス

十七日、辛丑、○中略資高（藤原）昨登山、今日下山、座主御病漸以平復、度數多減者、亦有子細
御返事、

湯治剃頭等ハ常ノ如シ下痢止マズシテ力無シ

但波忠明大豆煎及ビ生乳ヲ服スベシト爲ス病勢進ム

十九日、癸卯、阿闍梨祈統來云、日來看座主病惱、昨日下、唯今登山、但座主所惱不輕、然而時々被食、湯治幷剃頭等如尋常、痢猶不止者、逐日無力者、又被示辭退事子細、報答了、其後內供消息云、昨今彌重發惱辛苦、大豆煎不變色出、似可被慎、雖然猶可被服歟、又被服生乳如何者、呼遣忠明(但波)宿禰、問件事等、申云、大豆煎・生乳等能煎被服可良、生乳者半分煎可被服者、申達此由了、入夜內供報狀來、猶無平氣、

實資陰陽師三人占方ヲ求メテ慶圓ニ送ル

廿一日、乙巳、○中略叡覺云、內供消息云、座主御病逐日有增、無力殊甚、就中昨今似無馮氣、無被食、痢不止、又々令問陰陽師、可示送子細者、書占方以師重含具趣、遣三人陰陽師所、吉平(安倍)・文高(惟宗)・守道(賀茂)、各占云、猶不快、詞云、似可被慎者、占方付叡覺送之、

慶圓辭讓ノコト賴通ハ贊意アレドモ道長ハ難色ヲ示ス

廿三日、丁未、○中略內供報云、有增無減者、申達可被服生乳之由、試可服者、晩景法性寺座主慶命僧都立過云、大僧正讓事、入道殿猶有難澁、攝政雖有和氣、只可在入道殿雅意者、

慶圓ニ書狀ヲ送リテ幹旋ヲ請フ

廿四日、戊申、阿闍梨祈統來云、座主御心地無減、被讓狀事太以懇切、被送書札于源大(俊賢)納言許、此事下官猶可令申者、頗有怨氣云々、隨狀可左右也、

○中略

實資藤原資平ヲシテ讓與ノコトヲ賴通ニ申サシム

慶圓道長ニ書狀ヲ送ル

道長猶肯ゼズ

實資ノ意見

慶圓ハ多年勤仕シテ驗德多シ

臨終ニ恩命アルベキカ

良圓ハ既ニ內供トシテ御祈ヲ奉仕シタリ

資平等雨中登山シテ慶圓ヲ見舞フ

慶圓讓與ノ事ノ澁滯スルヲ憤ル

大僧正讓事試以宰相令申攝錄(藤)、入夜來云、具以執申、雖有御返事、非可馮、似難澁、如入道殿命、

廿五日、己酉、祈統來云、昨參上、今朝下山、座主所被勞無減氣、依辭退事、被奉書狀於入道殿、卽將(持カ)參、召御前、面被命此事、以未公請之人任僧綱、太可難、以此由、可傳達者、報旨雖多、事趣如此、余所思者、爲三朝師□修年尙、勤公勝傍、驗德揭焉、亦主上・太子御病之時、因座主驗度々平愈(癒)、○慶圓、上皇・天皇及ビ東宮等ノ御惱ニ際シテ、御修法ヲ行フコト、寛弘六年二月十八日等ノ十二條ニ見ニ、今臨重病、以職讓弟子、可有恩許歟、又內供良圓、雖未參御讀經・仁王會、身爲內供、勤修御禱者也、座主所惱事、早旦取案內、々供報云、未有減氣者、

廿六日、庚戌、今旦宰相參詣座主御房、資賴(藤原)・資高相從登山、良圓示送云、和尙自去夕不覺、甚難馮者、歎息無比、

申剋許宰相歸來云、和尙所惱、從昨彌重、以內供令達事由、僅有御返事、彼讓事聞難澁由、病中攀緣云々、今日宰相冒雨參登、和尙有悅色云々、

廿七日、辛亥、夜間座主所惱案內、問遣內供許、報云、更無減氣、猶可被慎也、

廿八日、壬子、○中略

病狀危急
讓狀ヲ送ル

慶快云、座主御病彌危、被期旦暮、今日被進讓狀、內供消息云、此事不應由、不奉聞、彌有攀緣、件狀送之、若有平復、可奉見者、

七月ニ辭ス
トノ說

〔僧綱補任〕三　○興福寺本

大僧正慶圓　天台座主、七月廿一日辭表上、

〔僧綱補任〕乾　○彰考館本

大僧正慶圓　七月廿一日辭大僧正、

〔天台座主記〕第廿四大僧正慶圓後三昧座主、　寛仁三年己未、七月廿一日辭大僧正幷座主職、

○僧綱補任等、七月二十一日ニ係ク、今、小右記ニ據リテ掲書ス、慶圓、大僧正ヲ辭シテ良圓ヲ律師ニ任ゼンコトヲ藤原實資ニ諮ルコト、長和四年八月二十七日ノ第二條ニ、寂スルコト、九月三日ノ第二條ニ、良圓、權律師ニ任ゼラルヽコト、長元元年十二月三十日ノ條ニ見ユ、

十六日、庚子、信濃勅旨駒牽、

〔小右記〕○前田家本　八月

十六日、庚子、○略中

出御ナシ
分取

馬寮馬部等ノ愁文及ビ日記ヲ藤原實資ニ進ム

檢非違使別當藤原頼宗實資ニ加害者ノ妻ト牛トヲ馬寮ニ留置シソノ住居ヲ壞ツ由ヲ問フ

先ニ十社奉幣ニ依ツテ延引ス

今日信濃馬牽、左衞門陣饗饌如例云々、不出御南殿、於大庭分取等事如常云々、

十八日、壬寅、右馬寮馬部某、殺害セラル、

〔小右記〕○前田家本　八月

十八日、壬寅、馬屬爲政令申今日馬部ム姓ム丸爲ム丸被敍害之由、又進馬部等愁文・日記□、〔等カ〕

廿三日、丁未、○略中　檢非違使左衞門府生良信持來馬部被敍害日記云、別當消息云、（藤原頼宗）可令見下官、（藤原實資）又敍害者妻幷牛籠置馬寮、又壞取住宅如何者、報云、日記見給了、左右只可被行、敍害者妻幷牛・宅事、更所不知事也、馬部敍害事、卽日寮屬爲政所申也、使廳可召仰也、

二十日、甲辰、攝政內大臣藤原頼通、賀茂社ニ詣ス、

〔小右記〕○前田家本　四月

廿一日、戊申、○略中　攝政（藤原頼通）今日可被參賀茂、○賀茂祭ノコト、四月二十二日ノ條ニ見ユ、而依公家奉幣○十社奉幣ノコト、四月二十一日ノ條ニ見ユ、延引云々、

八月

別納ヨリ出ヅ　藤原實資見物ス　行列次第　松尾社ノ走馬ヲ具ス　扈從ノ公卿　左大將藤原教通ノ馬寮ヲ具スルハ先例ニ違フ　公卿ハ乘車　教通ト藤原頼宗ノ家人上社ニ於テ鬪亂ス　上官扈從ス

廿日、甲辰、攝政（頼）從別納所所（被カ）參賀茂、依是（是依）不被參祭云々、宰相（藤原實成）來云、今日爲候攝政御共、參彼殿者、被催小女、於染殿北邊見物、次第御幣、下家司二人、騎馬在左右、次納神寶長櫃二合・和琴一張、次牽神馬二疋、次著褐衣者二人、騎走馬二疋、若松尾走馬歟、次左右近衛官人騎十列、著青摺衣・袴、御車後陪從官人等遊行、相從卿相左大將教通（藤原）、具權隨身・々々・馬寮等、近衛隨身等皆騎馬、攝政具權隨身、近衛隨身皆騎馬、左將軍敎之歟、攝政權隨身、左將軍馬寮等相具、太違例、近代事歟、次左衛門督頼宗（藤原）、有權隨身、皇太后宮權大夫經房（源）・中宮權大夫能信（藤原）・右衛門督實成（藤原）無權隨身、兵衛督・三位中將等又無權隨身、・二位宰相兼隆（藤原）・左大辨道方（源）・左兵衛督頼定（源）・右兵衛督公信（藤原）・修理大夫通任（藤原）・右大辨朝經（藤原）・左三位中將道雅（藤原）・右三位中將兼經（藤原）・侍從資平乘車相從、

廿一日、乙巳、早朝宰相來云、昨日御共卿相不候歸給御共、依彼命也、各々分散、左大將人與左衛門人（督脱カ）於上御社鬪亂、

〔左經記〕（八月）□□

廿日、甲辰、參攝政殿、今日有御賀茂詣事、舞人・陪從近衛官人等也、被參上達部中納言五人・宰相七人・三位二人、皆乘車被候、少納言・辨・外記・史供奉如常、自餘殿上人・諸大夫・前駈者濟々焉、

上卿藤原行成　犬産ノ穢諸陣ニ札ヲ立テシム　民部省符

〔日本紀略〕後一條院　八月

廿日、甲辰、攝政內大臣被參賀茂社、去四月依障不被參之故也、

二十三日、丁未、政、陣覽內文、是日、內裏穢アリ、

〔左經記〕（八月）□□

廿三日、丁未、時々微雨、參結政所、有頃右大辨（藤原朝經）被參著、右少史濟道申文欲結之間、左（源）大辨（道方）被參著、仍暫不結申、卽右少史信忠（忠信）申文、左大辨見文之間、濟道結申、右大辨與達（奪カ）、以有政（次カ）、上侍從（藤原行成）中納言（宇治カ）、事了著南所、次參陣、有內文、余（源經頼）參攝政殿（藤原頼通）、有頃右少辨（藤原資業）參申云、內只今有犬產事者、仰云、諸陣可令立札者、又暫不可觸穢者、

二十五日、己酉、是ヨリ先、近江守源經頼、稻三千五百束ヲ加擧シテ、首楞嚴院定心房四季講料ニ充テンコトヲ請フ、是日、之ヲ聽ス、

〔門葉記〕寺院三横河　○青蓮院所藏　四季講堂本號定心房、

○中略

民部省符近江國司

應以左少辨正五位下兼行近江守源朝臣經頼任中公課合正稅、每年加擧、以其利宛天台（延暦寺）

太政官符
經賴ノ解狀

覺超ノ請ニ依ル

良源ノ發願春ハ涅槃經ヲ夏ハ法華經ヲ講ズ

料物ノ闕乏ニ苦ム

經賴俸祿ヲ割キテ加擧セントス

利米ヲ講料ニ充ツベシ

楞嚴院定心房四季講佛僧供新稻參仟伍佰束事

右、被太政官今年八月廿五日符偁、得經賴去三月十六日解狀偁、經賴以愚庸之質、兼內外之官、上欲報朝恩、下將隨民望、永期王事之太平、須據佛教之勝利、爰阿闍梨覺超申云、慈惠(良源)僧正存生之日、爲護持朝家、爲利益法界、私發弘願、修四季講、春從二月十五日講涅槃經、夏從四月八日講法華經、(康保四年是夏ノ條參看、)五日十座給(マ)者他念、講匠・聽衆披演經內之奧旨、立義・問者決擇諸宗之深理、是則爲令釋迦之遺法以紹慈尊之出世也、而本新不幾、殆可闕癈、若有涓塵助成之人、可續國家鎭護之願者、謹考舊貫、諸國牧宰、以自給俸、猶申請諸寺加擧、先蹤多存、非可勝計、經賴所給捧(俸)祿、既過涯分、將捨其餘資、以支彼不足、望請　天恩、因准傍例、被裁許件加奉(擧)參仟伍佰束、以其利米、宛彼講新、永以寺返抄令勘合(會カ)公文、然則金輪之遠轉、算日月於蓬壺之雲、玉燭(之脫カ)長明、請人民於花肯(宵カ)之風者、正二位行大納言兼右近衞大將藤原朝臣實資(宣脫カ)、奉勅、依請者、省宜承知、依宣行之者、國宜承知、依件宛之、符到奉行、

正四位下行大輔藤原朝臣(實經)

寛仁三年九月廿三日

正六位上行少錄伴宿禰(佐親カ)

經賴ノ施入願文

五日十座ノ講良源ヨリ尋禪源信ト相傳スト源信ノ滅後ハ覺超之ヲ行フ

奉行
右中辨兼大介源朝臣(經賴)到來同年十二月廿八日、

左少辨正五位下兼行當國守源朝臣經賴敬白

奉施入加擧稻參仟伍佰束官符事

蓋聞、天台楞嚴院者、王法護持之地也、構鎭界葉、永留其遺風、慈惠大僧正者、佛事中興之首也、智德滿山、多受彼餘瀝、其門弟中、覺超闍梨、是弟子有緣之師也、相語曰、先師和尙在世之日、所修善業種々非一、其中爲鎭護國家、爲利益法界、分一代之大乘、行四季講說(之脫カ)、卽爲房中之勝事、特勵門徒之修學、講匠聽衆、五日十座、遞釋經內之奧理、各決自他之要義、是欲令尺迦之遺法以繼慈尊之初會也、和尙入滅之後、慈忍(尋禪)僧正相傳修之、僧正遷化以來、源信僧都次又勤修、寛仁元年僧都逝去、(元年六月十日ノ條參看、)厥後覺超續所催行也、而學徒彌多、本新不幾、爰於當時尙以闕之、恐及後代猶有斷絕焉、若適有助成之人、定可全久住之願者、弟子從聞斯言、深發念願、佛種從緣起、蓋是此時哉、仍分結俸(給カ)、申請公家、支配其新施入加件、仰願、三世諸尊共以證明、且滿足和尙之本願、且優容弟子之新誠、俾我朝家與乾坤而長持、俾此講說添日月而彌盛、弟子齡過二毛、祿及

兩國、内云外云、所兼是重、觸公觸私、所犯無量、非逢佛陀之汲引、何免冥吏之呵責、仍不渴現世之榮耀、唯思後生之菩提、心底所願、非佛誰白、縱雖泥三途八難、縱雖因熱湯寒氷、倩生當來諸佛出世（之脱カ）、必値諸佛說法之會場、供養恭敬尊重讚嘆、依其見佛聞法之力、遂爲讚證果利生之身、願以此功德、普及於一切、我等與衆生、皆共成佛道、敬白、

寛仁三年十月十四日　　左少辨正五位下兼行當國守源朝臣經賴

〔左經記〕十月

十四日、丁酉、降雪、逢朝夕講、是講是故良源僧正所如（始カ）行也、門跡相傳嫡々行之、覺闇梨去年相示云、件講源信僧都入滅之後、相請行之、而料物不足、動可闕怠歟、聊可助成者、仍余（經賴）分給俸、申請公家加擧、以其利米充件會不足料、則注事趣、於佛前令開白已了、次於丈六堂、令修阿彌陀念佛、及晩行地藏講、及巳剋歸京之次、花藏寺金色佛像數體壞堂露出給、仍令運移粟田寺之、入京、

○經賴、丈六堂ニ於テ、念佛幷ニ地藏講ヲ修スルコト及ビ花藏寺ノ佛像ヲ粟田寺ニ移スコト等、便宜合敍ス、

二十八日、壬子、東宮、御元服アラセラル、

日時勘申

藤原頼通勘文ヲ太皇太后東宮ニ進覽ス

行事所始左近衛府弓場ニ設ク

藤原道長御元服料ノ砂金ヲ獻ズ

習禮ニ出御アリ

加冠藤原公季　理髮源經房

〔御堂關白記〕○陽明文庫本　二月

十九日、丁未、參大内、右大臣（藤原公季）參會、召陰陽寮、令勘申東宮（敦良親王）御元服日時、右大臣著左丈（仗）座、令進勘文、攝政（藤原頼通）持來大宮（藤原彰子）御方、次宮（敦良親王）、殿上攝政・右大臣・中宮大夫（藤原齊信）・四條大納言（藤原公任）・（藤原敦通）大夫・左衛門督（藤原頼宗）・皇大（太）后宮權大夫（源經房）・中宮權大夫（藤原能信）・右衛門督（藤原實成）・二位宰相（藤原兼隆）・權大夫（藤原公信）・右大辨（藤原朝經）・（藤原資平）侍從宰相等參會、

廿七日、乙卯、從夜深雨、此日初東宮御元服行事所、左近衛府弓場、

三月

二日、己未、東宮御元服御厨子二基・御冠莒等料沙金卅五兩、賜亮（藤原）公成、

〔御堂關白記〕○陽明文庫所藏　八月

廿七日、辛亥、終日雨降、無晴氣、○中略東宮御南殿習禮、主上有御出、候攝政・右大臣・大夫及可然上達部等云々、入夜還御者、

（頭書）「母々（大）參太内、」（源倫子）

廿八日、壬子、天晴、此日東宮御元服、辰時許參、候縫殿寮張殿、午時御直廬、未時參上殿、着南御元服座、右大臣兼傅加冠、中納言經方（房）理髮、自如（餘脱）式、御乳母（藤原豐子・源時子）・宣旨（藤原姫子）等給加階、

丑時許從縫殿退出、○丑以下ノ八字ハ、薄墨ヲ以テ記スコト、二十九日ノ記ニ同ジ、恐ラクハ次日ノ補書ニ係ルナラン、

廿九日、癸丑、丑時許雨降、尤有感、丑時從縫殿退出、〃〃〃〃〃〃

九月

十六日、己巳、雨降、神事後、今日參太(大)内、○藤原道長ノ姪同周頼卒スルコト、九月三日ノ第三條ニ、伊勢例幣ノコト、同月十一日ノ條ニ見ユ、奉見東宮、御元服經數日、雖雨降、不障參入、

道長御元服後初メテ東宮ニ拜謁ス

〔小右記〕○前田家本　二月

十八日、丙午、早朝宰相(資平)來、即參大殿(藤原道長)說經、○道長家說經ノコト、年末雜載、社會ノ條ニ見ユ、臨昏來云、說經了、

大納言齊信・公任及近習人達、大略被定東宮御元服事、

十九日、丁未、○中略

今日可被勘東宮御元服日之由、有四条大納言消息、又於宮可被定雜事、今日可參入歟者、

(藤原實資)余答無指召者、宮司・近習卿相外不可必參之由、

廿日、戊申、○中略宰相云、昨日大殿被參東宮、右大臣傳、大納言齊信・公任・中納言教通大夫・經房・賴宗・能信・實成・參議兼隆・公信權大夫・朝經・資平同候、被定御元服雜事、右大臣於陣令勘申御元服日時、四月七日時巳、

雜事定

四月七日ニ豫定ス

廿三日、辛亥、○中略

日華門爲風被吹顚、○二月二十三日ノ第二條參看、可立事、攝政於殿上問彼是卿相、申云、今日內被立可無忌歟、若不被立者、東宮御元服時、無件門如何、○中略即以經通(藤原)被申前太府(道長)、○中略報命云、只早可令搆立、修理大夫通任(藤原)經營起座、向其所行事云々、搆立上假棟云々、

風ニ顚倒シタル日華門ヲ御元服ニ備ヘテ急遽造立ス

廿八日、丙辰、○中略

今日前太府第四娘(藤原嬉子)初笄、○中略、尙侍藤原嬉子ノ著裳ノコトニカヽル二月二十八日ノ條ニ收ム、俊賢(源)兩度上辭表返給了、○二年十二月十四日ノ條及ビ本年二月六日ノ第一條參看、今日依前太府命參入云々、又東宮御元服日可參入之由、有命云々、○中略依主人命、次第著座、

七月

十七日、壬申、宰相(資平)云、章信(藤原)云、昨日攝政・右大臣傳、大納言齊信・中納言教通大夫・賴宗・經房・參議道(源)方・公信權大夫・朝任(經)於東宮定御元服事、右大臣(公季)於陣令勘日時、

廿七日、壬午、○中略、相撲召合ノコトニカヽル、七月二十七日ノ條ニ收ム、今日二后兼有可令參上給之云々、而忽停止、

或云、東宮御元服近々、彼間兩宮女房衣裳營多、仍今日不令參上給者、

八月

十九日、癸卯、○中略正方(紀)申云、史忠信(宇治カ)仰云、東宮御元服日、近衞六十人著褐冠等可進者、

延引ニヨリ再ビ雜事ヲ定メ日時ヲ勘申セシム

二后ノ女官等衣裳ノ調備ニ奔走ス

六衞府ヲシテ舍人ヲ進メシム

今五府同仰之者、

廿七日、辛亥、○中略

傳聞、今夕東宮於南殿有習禮、攝政・傅右大臣（公季）・大夫幷御傍親卿相・近習人等祗候云々、

所謂大夫敎通・中納言頼宗・經房・能信・權大夫公信等云々、

廿八日、壬子、今明物忌、修諷誦清水寺、依可參內、○中略

今日皇太弟敦良、加元服、年十一、午剋許參內、宰相車後、大納言道綱（藤原）在仗座、有可參宮□□相共參入之次、見南殿御裝束、皆殿上□□等裝束如應和式、○東宮憲平親王御元服ノコト、應和三年二月二十八日ノ條ニ見ニ、太弟向休廬、先例陰陽師反閇而忘却不令奉仕、向休廬儀如應和、但權大夫公信相加前行、其路經弘徽殿西南承香殿北、出麗景殿西南中門、經溫明殿北・東、敷薦道、攝頼政已下諸卿候御共、中納言能信持候御笏、傅右大臣在宿所不候御共、爲改著裝束、加冠右大臣、理髮中納言經房、本宮調朝衣裝束各二襲、納平文衣莒、置黑漆高机二脚、在入帷・覆等云々、被送各宿廬、蘇芳・藍下重云々、攝政已下暫候太弟休廬、々々御裝束如應和、等時、春興殿東庭立七丈幄一宇爲獻物所、其東立五丈幄、爲殿上饗辨備所、其北立五丈幄、爲啓所、傅右大臣參入、著二藍下襲、問案內曰、蘇芳下襲裝束遲給、仍著二藍下重者、未二剋太弟把笏參上、經敷政・宣仁等門參上、不敷薦道、大夫敎通著靴在前、次傅右大臣、此度權大夫公信不候、著靴、欲前行、彼是云、不可然、仍脫靴、權大夫・亮候御後、攝政已下候御共、先例上達部候陣、臨參上給之時、下座跪候、而諸卿皆依宮殿上人候御共歟、傅留立軒廊西一間、須立東一間、余俳徊宣仁門邊、不細見、參上

紫宸殿等ノ裝束ハ應和ノ例ノ如シ東宮休廬ニ向ヒ給フ儀反閇ヲ忘卻ス

加冠及ビ理髮ニ裝束ヲ給フ獻物所等ノ鋪設東宮紫宸殿ニ參上シ給フ

衣服ヲ改メ給フ

御座ニ著御經房空頂黑幘ヲ加ヘ奉ル公季冠ヲ執リテ祝文ヲ申スト幘ヲ脫シ冠ヲ加ヘ奉ル經房纓ヲ結ブ

東宮休廬ニ還リ給フ加冠理髮ノ人ニ祿ヲ給フ加冠ノ御座等ヲ撤ス威儀御膳ハ撤セズ

藏人ヲシテ詔書及ビ位記ヲ奏セシム位記請印

南殿、於太弟改衣所、從御障子戶隙、卿々共見、攝政候御後、更來此處、被談雜事、太弟改衣處東戶前、不立御屛風、彼是示大夫、仍撤西隔屛風一帖、改立東戶前西邊立二帖、仍取一帖、加冠人參上著南廂座、次理髮人參上著座、太子起座、著加冠座、理髮人進著自當間進著座、太子前倚子、理髮、此間作法見或日記無相違、仍不記、訖取空頂黑幘、加於頭上、起座東退西面立、在母屋南第二柱下、加冠人進到置物机下、跪執冠、右執頂、左執前、北面立、在置物机南邊、祝曰、云々、其聲不聞、應和祝文云々、卽著倚子、脫幘、入本莒、加冠、訖復南廂座、理髮人亦著倚子、結纓理鬢、訖復本座、此間余及見物卿相退下、佇立宣仁門邊、加冠・理髮人退下、太弟改服著靴而出、傅先經階下、相待太子、贊引至南階上云々、此間不見、太弟退下、傅引下殿、大夫相迎軒廊、供奉如初、還給休廬、攝政・諸卿候御共、內侍臨檻、召近衞次將、左少將顯基（源）四位、不帶弓箭、彼是云、未引陣、不可帶弓箭者、至階下立、內侍仰、喚加冠・理髮人、卽參上、此間不見、□□祿退下、於庭中拜舞、西面北上、左仗南頭、天皇還□（御カ）、□坊司參上、撤加冠座・倚子・机及御厨子等、不撤御膳、撤北廂換衣之所、爲東宮供膳之所、此間余及諸卿參上殿上侍所、攝政同被候、被催南殿御裝束、所司立王卿座、如節□（會カ）、余復陣座、卿相々從、大臣以藏人頭左中辨經通令奏詔書・位記、先是被仰宮宣旨・乳母等名、可下給名簿歟、又詔書草昨可被奏歟、又詔書進御所可被奏歟、依御畫、至位記、依覽攝政、付人被覽、有何事乎、至詔書不可然、位記請印間、暫撤小庭屛幔、位記者返給內記、令給宮司、詔書者

天皇再ビ紫宸殿ニ出御　東宮再ビ參上シ給フ

給中務如例、天皇亦出御南殿、近仗陣、預立胡床、中・少將帶弓箭著靴、天皇御座定、近仗警蹕、次太弟參上、殿上儀不見、秉燭、余（此十七字勘物也、）上藹大納言道綱早出、未知其由、只稱病後、及諸卿出自敷政門、向日華門、左大臣（右カ）不立列、被奏所勞歟、（十一字勘物也、）若公成（藤原）授空盞儀、可無□（便カ）歟、太弟謝座、了諸卿入自日華門、下官爲上首、先於門下著靴、列立、版位東三許丈、參議已上一列、四位以下在後重行、丞北面西上、謝座、春宮亮右近中將公成執空盞來授、公成帶胡禄、不取弓、謝酒儀如常、上下著座、諸卿・參議如節會、諸大夫座在宜陽・春興兩殿、余起座退下、諸卿次第退下、出從敷政門、到日華門下、四位已下取獻物、（七字勘物也、）菓子魚鳥類百捧、授上達部、搢笏取之、鳥皆作木、諸大夫不足、仍六位取之、延喜例、公任卿所陳也、○延喜十六年十月二十二日ノ第一條參看、余爲貫首、進立版位東邊、進自初列、是例也、參議已上一列、西上北面、諸大夫・六位列後重行、良久之、大臣問云、何所ゟ物、余稱唯云、御子六口（宮）の獻（タテマツ）る御贄（へ）千鳥、次々稱物名、大臣云、進物所仁給へ、余稱唯、兩三步喚膳部二聲、於月華門邊稱唯、良久不來、度々相催、僅參來、其數少、余給獻物、拔笏復列、次々卿相給獻物、膳部相同、諸大夫等就進物所進之、余左廻、出自日華門、延喜・應和例不同、諸卿相從、入自敷政門復、諸大夫廻自中隔可復座、而經屯食後歟、依入夜歟、內膳自西階供御膳、東宮采女益供太子膳、出自御障子戶、采女一人前行供之、坊司・殿上人給公卿饌、內竪益、宮亮惟憲（藤原）・公成等一獻唱平如節會、但彼是云、可用旬儀歟者、仍大臣指執盃者、跪飲、又起唱

雜人諸司ニ給フ屯食ヲ爭ヒ取ル

奏樂

見參ヲ奏ス

東宮ニ御衣ヲ賜フ

公卿ニ祿ヲ給フ

東宮太皇太后御所ニ參リ給フ

天皇モ渡リ給フ

伶人ヲ召ス

御厨子所御膳ヲ供ズ

母后御在所ニ依ツテ警蹕ナシ

御遊

太皇太后祿ヲ賜フ

平、惟憲作法太不覺、此間開長樂・永安等門、運出屯食、辨官行事、雜人數多奪取屯食、極以狼藉、僅少々運出了閉門、二獻後令催雅樂寮、依及深更、於日月兩華門外、奏罷入音聲、參入分立承明門壇下、奏立樂、大唐・高麗舞各二曲、舞人四人、著重裝束、如節會、舞了各罷出音聲、大臣退下、依可奏見參歟、□（大カ）臣在仗座之間三獻、了後大臣奏見參、如節會儀、返給退下、此間內侍持御衣、出自御屏風內、賜太弟、內侍居太弟座北邊、太弟下座跪取之、只取御衣一、其外置座前、太弟於南廂西面拜舞、當座南、退下、左衞門督賴宗依攝政命昇東階、趍取太弟御祿遺退下、大臣依太弟傳、候彼退下、不還昇、余已下退下、細雨零、仍少納言信通（藤原）於宜陽殿唱見參、余及諸卿到春興殿給祿、於宜陽殿拜儛、先是太弟參母后（彰子）御所、弘徽殿、諸卿追參入、片庇座有饗饌、攝政・右大臣及已次著座、太弟於簾前拜舞、入給御簾給祿、更出給於初處拜舞、又入給、卽主上渡給、召侍臣令卷御簾、東面庇、御坐母屋御簾前、東宮坐御座北間、東又庇敷圓座、藏人頭經通召諸卿、先是攝政候御前、右大臣已下次第參上、候御前座、又令敷伶人座於欄下、居上達部衝重、有一兩巡、應召伶人著座、供御厨子所御膳、御臺、中納言行成（藤原）陪膳、不稱警蹕、依母后御在所、行成卿案內彼是所不稱、彼又存矣、又有東宮膳、高坏六本、或卿云、可有四本歟、可尋前例、從北方供之、兼宮昇殿者供之例也、殿上・地下竹肉合聲、賜突重伶人、御遊漸闌、后宮給祿、殿上侍

詔　六位以下ニ爵一級ヲ加ヘ寛仁元年以往調庸未進ヲ免ズ

臣渡御前、於北渡殿執祿給之、大臣已下參議已上女裝束、但有差、殿上人・伶人同給祿、子剋許退出、詔、皇太弟敦良、周誦養材、漢莊讓德、龍樓之月添其明、牛漢之星揚其耀、是以仲秋景宿、日月嘉辰、備首服而應三加之禮、〔正脱カ〕容儀而從四行之文、宜尋徽章於曩日、以均慶賜於普天、夫天下爲父後者、六位已下敍爵一級、又寛仁元年以往調庸未進、咸從免除、普告遐邇、俾知此意、主者施行、

第二日

廿九日、癸丑、今日春宮有饗饌、〔賴〕攝政及中納言已下參入、臨夜退出、

九月

一日、甲寅、○中略

第三日

參內、宰相乘車後、陣頭無人、大納言公任從殿上向陣、其後卿相參入、相共參東、〔宮脱カ〕有饗饌、○中略、陣定ノコトニカヽル、其後攝政被參東宮、有兩三盃、九月二日ノ第二條ニ收ム、

詔書覆奏　濟信ヲシテ御元服御祈ノ御修法ヲ行ハシム

十一日、甲子、○中略外記史生進東宮御元服詔書覆奏、加署返賜、

〔左經記〕〔八月〕□□

廿七日、辛亥、○中略始自今日、於仁和寺、〔濟信〕僧正爲東宮御被修御修法云々、是明日御元服祈也云々、

豫テ東宮御膳物ヲ設ケザルニ依ツテ宮司勘責セラルル加冠等ヲ召ス近衛次將ヲ弓箭ヲ帶セズ　宣旨乳母等加階ノ慶ヲ申ス

御年十一　殿上人嵯峨野ニ遊ブ

廿八日、壬子、天晴、東宮御元服、未剋、依產穢不參、○年末雜載、社會ノ條參看、傳聞、宮御膳物本宮〔大脱カ〕夫不儲者、仍臨期調備云々、宮司等被勘責云々、左少將顯基不帶弓箭〔傳カ〕侍召云々、自餘事等皆如舊儀、後日右少辨〔藤原資業〕云、東宮御祿、〔御衣〕一襲（但不加御袍、只下襲已下物也、又宣旨・乳母等參大〔盤カ〕監所申加階慶、各祿、大褂各一重、白、先例乳母衾一條也、有定給大褂一重、

〔日本紀略〕後一條院　二月

十九日、丁未、東宮御元服○コノ下、脫文アラン、

八月

廿八日、壬子、皇太弟加元服、年十一、天皇出御南殿、理髮權中納言經房卿、加冠右大臣、乳母等敍爵、今日、〔ムイ〕殿上侍臣放遊嵯峨野、○殿上人、是日、嵯峨野ニ遊ブコト、稍疑フベシト雖、便宜玆ニ附載ス、

〔扶桑略記〕二十八後一條天皇　八月廿八日、東宮元服、年十一歲、○百練抄・一代要記等異事ナシ、

〔今鏡〕一すへらぎの上　〔寛仁三年〕八月廿八日、東宮御元服せさせ給、御とし十一にそおはしましゝ、

〔東宮元服祝文〕皇太弟敦良元服

詔、皇太弟敦良、周誦養材、漢莊讓德、龍樓之月添其明、〔牛カ〕午漢之星揚其耀、是以仲秋景

宿、日月嘉辰、備首服而應三加之禮、正容儀而從四行之文、宜尋徽章於曩日、以均慶賜於普天、夫天下爲父後者、六位已下敍爵一級、又寛仁元年以往調庸未進、咸從免除、普告遐邇、俾知此意、主者施行、

寛仁三年八月廿八日　　正六位上中務丞源朝臣光成奉行

〔給祿時儀事〕

○伏見宮御記錄利五十九所收

同年行成卿記（寛仁三年）

東宮ノ拜舞シ給フ位置御祿ノ御衣ハ御座邊ニ遺シ給フ

太子給祿拜舞、當座南、々柱南、今依舊式日記、□之祿拜所當座南云々、今日所立御倚子當柱、不可然、柱東少倚北八尺許可立也、其御祿御下襲・表袴等也、御衣落右御座邊、太子退下給間、左衞門督進取之、候儲君持給所、大夫傳賜、於階上轉授左衞門督、

〔東宮冠禮部類記〕

土右記歟

永承元年○中略

寛仁ノ式

十二月○中略

十九日、甲子、晴、此日東宮（尊仁親王）御元服也、○中略春宮大夫（能信）以下○中略到日華門下、取獻物、○注略ス、入自同門列立、○中略春宮大夫○中略稱物名、○注略ス、大臣（教通）云、給進物所、寛仁式注云、可仰給膳部歟云々、然而大臣仰如之、○中略今日御裝束・作法等、都同寛仁式、件式彼時四條大納言公任、依大相國（道長）命、依應和式作之云々、

藤原公任應和ノ式ニ准據シテ作ル

理髮ノ具

東宮ノ紫宸殿ニ參上シ給フ路ニ筵道ヲ敷カズ祝文ハ唐禮ノ文ヲ用フ

永承元年十二月十九日、甲子、天晴、今日東宮御元服也、○中略向南殿、見御裝束、○中略相對立平文倚子、○中略加冠・理髮人所著也、其左右立平文置物机、○中略件置物机上分置唐匣・泔坏等、西机置唐匣筥、無蓋、下重入櫛・巾・力、中重入櫛・笓・婆佐美、上重納黑幘・本結等、是依寛仁例所納也、○中略庭中裝束、○中略屯食等立庭中、○中略立屯食皆有丈尺、見寛仁式、○中略已刻可有御反閉也、應和有此事、寛仁無之、權大夫（藤原資房）被申云、御反閉尤可候也、至于寛仁者被忘却也、不可爲例、○中略反閉了、即渡御々宿所、○中略諸卿以下○中略候御後、此間上官等少納言以下、跪候床子壇下、大夫能信、高聲被追入、○中略仍起入南小屋內、此事應和上官等跪候、仍亮延光（源）戒其由追入云々、若思彼例被追入歟、但寛仁式、政官候壇下云々、上官存彼例所候也、但應和候壇上云々、○中略及申刻、○注略ス、主上出御南殿、宮參上給、大夫被申云、可敷筵道歟、予云、先例不敷之、寛仁如此云々、○中略加冠人又起座、○中略跪取御冠、○中略申祝詞云々、此唐禮文也、延喜御時文、○延喜十六年十二月十二日ノ第一條參看、不用之、應和例、寛仁如此、今日又如此云々、其音不聞云々、○中略主上還御之後、坊司等參上、撤南殿御裝束、○中略又以北廂東一二間爲東宮御膳

威儀御膳ヲ置クニ机ヲ用フ

宿、○中略立黒漆机二脚、爲置御膳具云々、須立大棚厨子也、寛仁例立机云々、○下略

〔江次第〕十七東宮御元服　永保裝束司違例事等　○永保元年八月二十一日ノ條參看、

○中略

一、御器等事

朱漆ノ御器

依延喜十六年四月一日旬記、皆可用朱漆歟、只箸・七用銀云々、而永保馬頭盤・御四種・御酒盞・御菓子盤八枚用朱漆、自餘御汁物器二口・窪坏二口・盤六枚用銀器、御飯垸亦用銀、予大略示之、而季綱(藤原)(大江匡房)曰、寛仁三年記曰、御飯垸以下皆用銀器由被注、仍不設云々、予案彼年記云、朱馬頭盤・朱器八枚、唐菓四坏、木菓四坏、御酒盃・御四種・窪坏・盤例數歟、自餘箸・七・飯垸以下皆用銀器、仍不可儲云々、如件記者、飯垸者可用銀器、窪坏・盤等可用朱漆歟、

飯椀箸等ハ銀器ヲ用フ

〔承元二年東宮御元服記〕承元二年順德院○注略ス、

長兼記

十二月廿五日、庚寅、○中略今日東宮(守成親王)御元服也、○中略巳剋人々參集、予(藤原長兼)○中略參皇太弟御在所、凝花舍也、先例御坐昭陽舍、今度有議、被用凝花舍、是應和・寛仁之例也、○中略午初、皇太弟移休廬、○下略

東宮ノ御座所ハ凝花舍

〔正元元年東宮御元服部類記〕龜山院　實雄公記(藤原)

正元々年八月○中略廿七日、經任(藤原)爲院(後嵯峨上皇)御使來、明日御元服條々有被仰合事、申御返事了、其次奏云、○中略今度所被用寛仁例也、件年習禮、仁義公(公季)予立御後見之云々、然者就此例有習禮之儀可宜乎、○下略

藤原頼通等東宮ノ御習禮ヲ輔導シ奉ル

資宣(藤原)卿記

正元元年八月廿八日、己亥、○中略今日皇太弟(恒仁親王)御元服也、○中略

今日事

○中略

一、召加冠・理髮人次將事

○中略寛仁左少將顯基朝臣、○中略

一、屯食辨事

○中略

寛仁三年八月二十八日

寛仁　權左中辨藤重尹、〔右〕左少辨藤資業、

○中略

一、宣旨・乳母奏慶賀事

先例多乘車參北陣外、付藏人奏之、

寛仁參臺盤所申慶、今度儀兼申定之處、今日爲祗候人之上、寛仁已爲佳例、可參臺盤所、○下略

東宮御元服雜事

○中略

一、加冠・理髮人事○注略ス、

加冠

理髮

○中略

寛仁　加冠傅右大臣

理髮權中納言經房卿

○中略

一、日次事

○中略

定日

七月十六日

○中略

寛仁　七月十六日

○中略

日時定日

七月十六日

寛仁　七月十六日

○中略

造御冠形日

寛仁三年八月二十八日

寛仁三年八月二十八日

八月五日

寛仁　八月五日

○中略

御祈日　神事　佛事

寛仁　八月廿七日御修法、

○中略

御習禮日

八月廿七日

○中略

寛仁　八月廿七日

○中略

御加冠日

八月廿八日

○中略

御冠形ヲ造ル日

寛仁　八月廿八日

○中略

一、於陣被勘日時事藏人方沙汰、

上卿已下參陣、

日時勘文被下外記、

寛仁　上卿右大臣

○中略

一、御祈事

○中略

佛事

御修法寛仁濟信僧正勤之、○中略

一、式事

○中略

作者兼日職事可仰其人歟、

寛仁三年八月二十八日

寛仁三年八月二十八日

〇中略

寛仁　大納言公任卿

〇中略

一、所々御裝束事

南殿

〇中略

御唐匣一合、紫檀地螺鈿、無臺、

上懸子納御本結・黒幘、

中懸子納御櫛四枚・篦子・鉸子・小刀、寛仁・永承等刀納身、

〇中略

五尺棚厨子一基、御膳宿料、寛仁・永承立机二脚、〇中略

一襲

〇中略

寛仁　加冠・理髪人裝束、太皇大〔太〕后宮被調進之、

加冠理髪ノ裝束ハ太皇太后調進シ給フ

〇中略

一、可被申下宣旨事

〇中略

關敍位宣旨・乳母人數、

〇中略

寛仁　宣旨一人、乳母六人、

宣旨一人乳母六人ニ加階ス

〔光嚴帝宸記之寫〕　〇伏見宮御記　錄元二所收

〇卷首闕ク、上略、

一、同裝束調進人事

寛仁　太皇大〔太〕后宮、　〇中略

一、取御裾人事

寛仁　〇中略

一、持御笏人事

寛仁　中納言能信卿至御子宿持之、　〇中略

藤原能信御笏ヲ持ツ

寛仁三年八月二十八日

寛仁三年八月二十八日

一、候御共公卿事

寛仁　攝政　右大臣　大納言道綱　實資　公任　權中納言行成　頼宗　經房　能信

實成　參議兼隆　道方　頼定　朝任〔經〕　資平

參列ノ公卿

○中略

一、候北廂人事

寛仁右大將實資卿、　大納言公任卿、

中納言行成卿、

北廂ニ候スル公卿

○中略

一、候御裝束人之事

寛仁　○中略

一、宣旨・御乳母人數事

寛仁　從四位下藤豐子、御乳母、典侍、　正五位下藤姫子、宣旨、

從五位上源涉〔陟〕子、御乳母、大宮宣旨、　同隆子、乳母、中務、

藤能子、同、式部、　同香子、同、同、

從五位下藤明子、同、辨、

宣旨御乳母

以上參臺盤所云々、

○中略

一、公卿勸盃事

寛仁　一獻　惟憲朝臣、

權亮公成朝臣、

公卿ノ勸盃

○中略

一、授空盞人事

寛仁權亮公成朝臣、　○中略

一、御退出時分事

寛仁三獻御祿之後、　○中略

一、御祿使事

寛仁　○中略

一、付宣旨・御乳母名簿仁事

寛仁　○中略

一、申下坊官昇殿・開門以下宣旨等事

寛仁三年八月二十八日

寛仁三年八月二十八日

寛仁　略○中

一、調進脂御膳人事

寛仁　略○中

一、同御膳陪膳人事

寛仁　略○中

一、著御淺履事

寛仁　略○中

一、祿辛櫃員數事

寛仁　永承巳上卅合、　祿ノ唐櫃三十合

一、長食員數事　〔屯〕

寛仁　永承巳上百具、　屯食百具

一、調進人事

寛仁　前太政大臣（道長）、廿具、盛五具、　攝政、廿具、盛四具、　屯食調進ノ人々

左衛門督、十具、盛二具、　中宮權大夫（能信）、十具、盛二具、

權大夫（公信）、十具、盛二具、　廳、十五具、

一、供奉帶刀人數事　略○中　供奉ノ帶刀

寛仁　四人、候陣之時六人、　略○中

一、御修法阿闍梨事

寛仁　東寺濟信僧正、　略○中

一、式作者事

○中　略

八月十三日被下

寛仁　大納言公任卿、

〔御遊抄〕　東宮御元服

後朱雀院　御諱敦良、十一、一條院第三皇子、御母上（彰子）、東門院、法成寺入道女、寛仁三八廿八、紫宸殿、

加冠　傳左大臣（右）公季公、

理髮　中納言經房、

有御遊、

寛仁三年八月二十八日